博士学位論文

張赫宙戦後研究

——終戦から帰化まで——

2014 年 3 月

埼玉大学大学院文化科学研究科（博士後期課程）

日本・アジア文化研究専攻（主指導教員　杉浦晋）

梁　姫　淑

埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程

学位論文

張赫宙戦後研究

——終戦から帰化まで——

梁　　姫　　淑

主指導教員　　杉浦　晋

副指導教員　　小谷　一郎

副指導教員　　権　純哲

2014 年 3 月

目次

序章

はじめに

一．張赫宙の生涯と日本語作品

二．先行研究

三．研究目的

＊

第一章　戦後の出発

はじめに

一．「日本の国民に訴ふ」

二．親日行為に対する弁明―「民族」

三．在日朝鮮人文学者の嚆矢―金達寿

四．民族の戦いを歌い上げる―許南麒

おわりに

第二章　在日朝鮮人民族団体との関わり

はじめに

一．戦後の歩み

二．在日朝鮮人との関わり

三．マスコミによる朝鮮人攻撃と張赫宙

四．心の相剋とその行方

おわりに

第三章　実存的不安をめぐる作者の軌跡―「脅迫」論

はじめに

一．現実的不安と内的不安

二．自己認識①―「弱気な自分」

三．自己認識②―「母国語を持ってない異質な自分」
四．実存的不安へ
五．新しい文学への挑戦―児童向け著作
おわりに

第四章　日本語への回帰―「私の文学」を求めて
はじめに
一．占領下の児童文学
二．張赫宙の児童向け著作
三．児童向け著作における新しい興味性（可能性）
四．「新しい文学」の志向性
おわりに

第五章　祖国に対する愛情のゆれ―『嗚呼朝鮮』論
はじめに
一．執筆背景及び同時代評
二．祖国朝鮮の真実の姿
三．変えられた結末
四．愛情のゆれ
おわりに

第六章　祖国を離れる者の願い―『無窮花』論
はじめに
一．朝鮮取材とルポルタージュ
二．「民族的哀しみ」の本質
三．「無窮花」と「毒の花」
四．祖国を離れる者の願い
おわりに
＊
結章

一．帰化後の自伝小説について
二．習俗として残る民族の残滓―「異俗の夫」
三．おわりに
四．本論文の成果と課題

初出一覧
参考文献
張赫宙戦後著作年譜

凡例

【引用について】

一、本文の引用は「　」で括った。引用文中の筆者による補いや、中略は（　）を用いた。

一、引用文の字体は可能な限り現在通行体とし、ルビ・圏点等は一部を除いて省略した。

一、引用文中の傍線は引用者が付したものである。

一、韓国語の原文は、筆者が翻訳した。

【その他】

一、書名・雑誌・新聞名は『　』を用いて、作品名・論文名・評論名は「　」で表記した。

一、年号はすべて西暦で表示した。

一、張赫宙は一九五二年帰化して野口稔（筆名：野口赫宙）となったが、帰化後から約一年間はそのまま張赫宙として執筆活動をした。本論文では便宜上「張赫宙」と呼ぶことにする。

序章

はじめに

一九五二年一〇月一二日、『読売新聞』の全国版には、張赫宙（一九〇五～一九九七）の帰化の記事が掲載されている。記者は「日本生活廿年の親日家だけにこれを機会に長年の宿願である日本帰化を決意」したと書いて、張の帰化を「長年の宿願」の帰結として解釈している。

当時、日本法務省が求めていた帰化条件は、①日本に五年以上居住、②素行が善良、③独立の生計を営める実力技能を所持、④日本国籍取得によって旧国籍を離脱できる、⑤暴力で政府をてんぷくするような団体に加入していない、などが最低限の基準となっていた。これらの基準からわかるのは、要するに帰化とは、日本の善良な国民になる資質を前提として、在日朝鮮人に朝鮮人たるアイデンティティを自己否定し、いわば日本人以上に日本人らしく生きることを求めるものだったということである。[1]

そのような帰化が、日本の新聞記者に「長年の宿願」の帰結として受け取られたということは、戦前あるいは戦後における張の文筆活動が、如何に日本と親密に結ばれていたかを、象徴しているように思われる。

張赫宙は、一九三二年四月、『改造』主宰の第五回懸賞創作に「餓鬼道」が当選したことによって、日本文壇にデビューした。『改造』の編集部（「第五回懸賞創作当選発表」、一九三二・四）は、「これ恐らくは朝鮮の作家にして我国の文壇に雄飛する最初の人であるであらうし、又広くは、世界に対して朝鮮作家の存在を強く主張するものであらう」と、朝鮮の青年作家のデビューをやや高調した表現で紹介した。これに答えるように張は「朝鮮の民族ほど悲惨な民族は世界にも少いでせう。（中略）私はこの実状をどうかして世界に訴へたい。それには朝鮮語では範囲が狭少である。日本語はその点、外国に翻訳される機会も多いから、どうしても日本の文壇に出なくてはならないと思ひました」[2]と述べた。ここには、被抑圧者である朝鮮民族が置かれている悲惨な状況を、抑圧者の日本をはじめ、世界に知らせようという、強い意志があらわれている。

しかし、このような意志は、日本のプロレタリア文学に対する弾圧が強くなるにつれて、段々その勢いを失っていった。彼は、デビューから一年足らずの間に、朝鮮の風俗のエキゾチックな魅力を売物にする通俗小説に作風を変えたのである。さらに、満州事変以降、

戦時体制が作家の表現の自由を制限するようになると、日本の植民地政策と戦争の遂行に手を貸しながら、自らの作家生命を維持することになる。

これまでの張赫宙論は、主に戦前の活動に限定されて来たと言っても過言ではない。最も早い時期に「張赫宙論」(『文学』、一九六五・一一)を書いた任展慧や、林浩治(「張赫宙論」(『季刊三千里』、一九八三・冬)をはじめ、本格的に張赫宙を研究対象にした白川豊の「張赫宙研究」(東国大学博士学位論文、一九九〇＊韓国語)も、研究の中心は戦前期に限定されていた。一方、近年において、金鶴童(『張赫宙の文学と民族の頚木』、亦楽・二〇一一＊韓国語)、廬允(「朝鮮戦争をめぐる日本とアメリカ占領軍―張赫宙『嗚呼朝鮮』論」『社会文学』、二〇一〇・七)らが、戦後における執筆活動と作品分析を試みているが、日本の国内事情を含む張赫宙の文学的活動の意味と、帰化までの道のり(必然性)を詳しく論じてはいない。

従って本稿では、終戦後、急激な変化を見せている日本国内の事情を踏まえたうえで、親日・新生・文学・民族・家族と言ったキーワードを中心に、帰化に辿りつくようになった張の内的必然を考察する。その上で、植民地期から戦後に至る張赫宙の文筆活動が持つ意味を改めて考えてみたい。

一．張赫宙の生涯と日本語作品

張赫宙(本名：張恵重、一九〇五～一九九七)は、朝鮮出身ではあるが、大部分の作品を日本語で書き、終戦後には日本に帰化(一九五二)して、野口稔(筆名：野口赫宙)として晩年を迎えたため、朝鮮よりむしろ日本で知られた作家である。

朝鮮農民の悲惨な状況を描いた「餓鬼道」(『改造』、一九三二・四)をもって日本文壇にデビューした彼は、続けて「迫田農場」(『文学クォタリイ』、一九三二・六)、「追はれる人々」(『改造』、一九三二・一〇)など、抑圧された朝鮮人をモチーフにした小説を書いた。

しかし、プロレタリア文学の弾圧時代に入ると、「私の所属してゐる民族の種々の境遇」よりも「個人の生存欲に基く各種の本能」を描く方が高度な芸術世界であるという見解を示して、プロレタリア文学路線から離れることとなる。その後に執筆した「カルボウ」(『文藝』、一九三四・三)、「葬式の夜の出来事」(『文藝』、一九三四・八)、「墓参に行く男」(『改造』、一九三五・八)などの作品は、朝鮮人のエキゾチックな面白さを浮き彫りにして書いた風俗小説であると言ってよい。これらの作品は、朝鮮人の醜悪を描いたと、朝鮮では強

い反感を買ったが、日本では評判となり、張の作家的地位を確かなものにした。

また、東京に生活の拠点を移した一九三六年からは、在日朝鮮人を主人公にした「憂愁人生」(『日本評論』、一九三七・一〇)や「路地」(『改造』、一九三八・一〇)を書くなど、旺盛な活動を続け、一九三八年には、朝鮮の古典である「春香伝」の脚本を書き、村山知義演出の「春香伝」は、日本と朝鮮で公演された。[3]

しかし、日本と違って「春香伝」の公演に対する朝鮮の知識人の評価は手厳しいものであった。張は朝鮮公演(一九三八・一〇・二五〜一一・七)が終わった翌年、「朝鮮の知識人に訴ふ」(『文藝』、一九三九・二)で、朝鮮の民族性を「激情性」、「正義心の乏しさ」、「嫉妬心の強さ」、「ひねくれ」などの言葉であらわし、「われわれがもし完全に内地化してしまったとすれば、われわれは自然落着のある、ひねくれのない民族となる」と公言し、当時の植民地政策である「内鮮一体」を支持する見解を示した。そして、日本軍国主義に賛同する一連の作品『曠野の乙女』(南方書院、一九四一)、『幸福の民』(南方書院、一九四三)、『開墾』(中央公論社、一九四三)や、『岩本志願兵』[4]を出版した。

『岩本志願兵』は、短期入隊(三日間)をした自らの体験を小説化したものである。張の分身とされる「私」は、「志願兵訓練所」で「内鮮一体」に自信を持てずに悩んでいた朝鮮人志願兵の岩本と出会い、彼が高麗神社に行って、そこの住民たちが朝鮮の帰化人の子孫であることを知ってから、「皇民化」や「内鮮一体」の正当性に自信を持てるようになったことを聞かされる。その後、訓練所を出た「私」が、自らも高麗神社に行き、岩本をはじめとする「朝鮮同胞」の全てが、一日も早く皇民化を完成するように祈るところで、物語は終わっている。

任展慧[5]は、「張赫宙は、日本帝国主義の植民地政策を単に肯定しただけではなく、このような形で多くの「岩本」たちを、日本帝国主義の侵略戦争にかりたて、死地においやった」としたうえで、「在日朝鮮人文学者の戦争責任の追求は、まず、張赫宙から始められねばならない」と述べた。このような見解は、以後長らく張への評価の典型となった。すなわち、張は在日朝鮮人文学者がたどった二つの道、「屈辱」と「抵抗」の前者をあらわす負の典型として位置づけられてきたのである。しかし、張の文筆活動は、このような評価に帰着した戦前をもって終わったわけではなかった。

在日朝鮮人文学者のなかで、終戦後いち早く文学活動を再開したのは、他ならぬ張赫宙であった。彼は、終戦直後における日本(日本人)の混乱した様子を描いた『孤児たち』(万里閣、一九四六)と、短編集の『ひとの善さと悪さと』(丹頂書房、一九四七)を出版

する一方、一時期（一九四七～四八）在日朝鮮人民族団体（民団、朝連）とも関わりを持った。しかし、この関わりの中で発表した著作には、異なる筆名（黒丘、雞林児など）を用いたものが目立ち、親日文学者であった彼が、在日朝鮮人社会のなかで表に出られない不遇な立場におかれていたことを窺わせる。

また、張は、朝鮮戦争が勃発（一九五〇・六・二五）するや、取材のため韓国を訪問して、その内容をもとにした『嗚呼朝鮮』（新潮社、一九五二）を出版するなど、日本に帰化（一九五二）するまで多数の作品を書いており、日本では戦前に引き続いて朝鮮を代表する文学者として旺盛な活動をした。

帰化して野口赫宙[6]になってからは、『黒い地帯』（新制社、一九五八）、『ガン病棟』（講談社、一九五九）など、結核や癌といった難治の病を扱った社会小説や、『黒い真昼』（東都書房、一九五九）、『湖上の不死鳥』（東都書房、一九六二）などの推理小説も書いている。さらに、一九六一年には、奈良時代に日本に亡命してきた高句麗人の子孫を主人公にした歴史小説『武蔵陣屋』を出版するなど、幅広いジャンルに取り組んでいた。しかし、このような努力にも関わらず、彼は、多数の日本人作家のなかで注目されることはなかった。このような作家的存在価値の小ささに危機感を抱いたのか、張は忘れられかけていた自分の存在を読者に再確認させるためであるかのように、自伝的小説『嵐の詩』（講談社、一九七五）を出版した。

この『嵐の詩』は、幼少年期から終戦までを描いており、戦前における作家の在り様を考えるさいに貴重な資料となる。物語の冒頭部では、作家の分身である龍が幼い時に住んでいた地域が、昔、豊臣秀吉の朝鮮出兵の折に、日本によって七年間も統治されていた場所で、そのあたりの住民は、日本人の血が混ざった、いわば「落し子」であることが強調されている。そして、後半部で龍は、終戦の日に玉音放送を聞き、「ぼくはこの国の人になる」と心を決めて、「それは予定されたことのよう」に思うのである。張の母親は、加藤清正が本陣をおいて七年間統治したとされている、蔚山付近の人である。つまり、張は自分自身が日本の血を受け継いでいる可能性があることを、間接的に示唆しているのであった。

このように、張は、日本人になってもう二五年も過ぎていたにもかかわらず、帰化した自分の行為に確信を持つことができず、それが「当然の帰結[7]」であったことの根拠を探し求め続けていたと言える。このような自己正当化の動機に基づく、自らのルーツに対する関心から、徐々に日韓の歴史に目を向けるようになった彼は、『韓と倭』（講談社、一九七七）と『陶と剣』（講談社、一九八〇）を書き上げる。

『韓と倭』は、「日本人とは何だろう」という関心から始まり、『古事記』や『日本書紀』に登場している崇神天皇の出自が、朝鮮南部に存在した辰王、もしくはその子孫であろうと推測して、「倭は古代日本人の源流の一つであると同時に、古朝鮮人の一つでもあった」という論を推し進めている。さらに、満州語、朝鮮語、日本語の語音が共通しているところが多いことを指摘しながら、日本語と朝鮮語は「同根同祖」であるとみなしている。このような日韓の同質性を、民芸品（陶器）を通して確かめようとしたのが、『韓と倭』の第二部として書かれた『陶と剣』である。

『陶と剣』の「あとがき」で張は、『韓と倭』で言及した上古における日韓の密接な関係が、歴史の流れとともにそれぞれ違った方向へ進むようになったが、「文禄・慶長の役」によって再び「血と心のつながりが再現した」と述べ、このことに一つの「歴史的運命」を感じると述べている。この二作は、多数の文献を参考にして書かれた研究書のようなもので、張は歴史を辿りながら日韓の同質性を立証して、さらに自分自身のルーツをも確かめようとしたと考えられる。

なお、このような歴史に対する関心は日韓の関係に留まらず、徐々に日本の古代人とアメリカインディアン、あるいはマヤ・インカ人との関係にまで拡大して行き、『マヤ・インカに縄文人を追う』（新芸術社、一九八九）を刊行するに至った。このように、晩年において民族の、更には人類のルーツにまで関心を広げていったことは、彼自身が民族のくびきから完全には自由でなかったことの証ではなかったか。それゆえ、張赫宙の文学における「民族」とはどのようなものであったかを、彼の戦前と戦後の在り様を通して、追求して行かなければならないと考える。そのために、現在まで本格的に言及されなかった戦後に注目することが、張赫宙（野口赫宙）研究における新たな視点と方法論を提示してくれると確信している。

二．先行研究

戦後になって本格的に張赫宙を研究対象にしたのは、任展慧の「張赫宙論」（『文学』、一九六五・一一）であった。任は、「民族の視点」から戦前における張の活動を通覧して、「在日朝鮮人文学者の戦争責任の追求は、まず、張赫宙から始められねばならない」と述べた。さらに、一九四〇年頃から執筆活動を始めた金史良との比較を通して「一九四五年以前の、張赫宙と金史良の姿は、植民地の文学者における二つの道―屈辱と反抗―を、くっきり浮

彫にしたものである。金史良を考える時、自国の抑圧者に膝を屈した張赫宙の転落の軌跡は、よりあざやかにされていく」と、抑圧者である日本に直接手を貸した張を批判した。

しかし、このような二分法的な考え方で、植民地期における朝鮮人作家の生き様をあらわすことは果たして妥当であるだろうか。任の「張赫宙論」は、「民族的視点」からはその論旨を明確にしているが、張が「親日」に転じていく過程を「立身出世」や「屈辱」という観点のみで解釈して、そのような文筆活動における作者の内的必然までは詳しく論じていない。また、序文で張赫宙の「帰化」をキーワードにして論を進めているにもかかわらず、戦後から「帰化」するまでの活動が分析対象に入っていないため、任が指摘した戦前からの「帰化願望」が、どのようなルートを経て実際の「帰化」に結び付けられたのかという疑問が残る。

一方、林浩治（「張赫宙論」『李刊三千里』、一九八三・冬）は、張が「日本の植民地文化政策を良くリード」していたことを指摘したうえで、張が無惨に「日本化」したのは「日本人全体の中にある社会排外主義が張赫宙を日本人にしてしまった」と述べている。林は、張の「日本化」を批判する前に、そのようにさせてしまった「日本」という「思想」の恐ろしさを問題にし、日本人の立場から内省的に論じている。さらに、任と同様に金史良を比較対象として取り上げ、「金史良は日本にいて、日本語でしか書けない状況下で日本語によって必死の抵抗をした」と述べている。もちろん、金史良は文学者の自由が著しく制限されてきた一九四〇年頃から日本で本格的な文筆活動を始めたにもかかわらず、ぎりぎりのところまで軍国主義への協力を拒否した朝鮮人作家である。なお、戦後になるとすぐ朝鮮に帰り、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の人民文学者として活動をしたのも事実である。しかし、それを単に「屈従」と「抵抗」というように二分化することはできない。

このような二項対立的な考え方に疑問を提議したのが、川村湊の「金史良と張赫宙―植民地人の精神構造」（『近代日本と植民地・6　抵抗と屈従』岩波講座、一九九三）であった。川村は、「一方を黒とし、一方を白とする二元論的な割り切りは、人間の精神や心をとり扱う場合には、マイナスにはなっても決してプラスとはならない」ことを指摘したうえで、「「抵抗」から「屈従」までの間には、彼らの精神の大きな振幅があり、それは白から黒までの膨大な灰色の領域を含むものである」と述べた。さらに、そうした彼らの心の振れ幅を彼ら自身の言葉や文学作品を通して追究していくことの重要性を力説した。川村の指摘には、先行研究における論者の「民族的」、或いは「日本人の立場」からの論述を超えて、張赫宙の文筆活動や作品に対する深層的分析の必要性が強調されている。つまり、そ

のような考察によって、張の作品と生き様が多様化していく可能性を提示したのである。

一方、外村大（「植民地期の在日朝鮮人論―帰属・文化をめぐって」『植民地近代の視座朝鮮と日本』岩波書店、二〇〇四）は、植民地期における帰属・文化の問題（多様性）を取り上げて、張赫宙の文筆活動を考察した。外村は、植民地期の朝鮮人に対して漠然と抱きやすい認識を「まず疑うことにしたい」と述べて、在日朝鮮人の帰属や文化の問題には、「①在留期間や日本人との接触のあり方、②その人物の世代や日本における家族関係、③日本の中でのほかの朝鮮人との関係、④渡日以前にその人物が身に付けていた文化、⑤朝鮮半島との紐帯・関係の在り方」などが複雑に絡み合っていることを指摘した。さらに、在日朝鮮人の帰属や文化の問題について、其々違う考えを持った三人（高権三、張赫宙、金史良）を例に挙げて考察している。その中で「融合と直接的帰属」を望んだ張に対する見解を見てみよう。

外村は、張の小説や評論を引用しながら、「張は、必ずしも朝鮮人だからといって朝鮮に懐かしみを感じて帰属できるわけではなく、逆に日本に住んでいるにもかかわらずそこに地位を築けないし受け入れられないという困難さを、意識していた」と述べている。つまり、張が「内鮮一体」や「皇民化」の立場を取るに至ったのも、朝鮮民族や日本民族という区別や差別をなくし、「各民族が自主の状態に於いて協和する」ことで、帰属をめぐる問題を安定化させたい意図が働いていた、ということである。実際、戦前から戦後における張の評論や自伝的小説には、外村の論考を裏付ける発言が多く見られる。しかし、張はその解決方法を抑圧者である日本側に求めることができなかった。それには、植民地期における張の立場、或いは力強い民族意識を保つことができなかった幼少年期の記憶（体験）が多く関わっている。

このような張ならではの境遇を取り上げて、張赫宙文学における親日性を再認識しようとしたのが南富鎮である。南は「「内鮮結婚」の文学」（『人文論集』静岡大学人文学部人文学科研究報告、二〇〇四・七）のなかで、内鮮恋愛や結婚の問題を張が作品に扱った時期が、実際の生活のなかで野口桂子と恋愛して同棲をはじめた後であることを指摘した。つまり、野口桂子との同棲・長男や次男の誕生など、自らの内鮮結婚と二世の誕生が張の「日本語への傾斜をもたらし、日本文化への傾斜に赴かせ、最終的には日本への同化を導き」出した、ということである。さらに、「昭和文学の朝鮮体験」（筑波大学博士論文、一九九八）では、朝鮮社会の前近代的な諸相を批判的な視線で捉えた作品が多いことを取り上げ、「朝鮮＝前近代、日本＝近代」という図式を導き出した。つまり、前近代に対する嫌悪と

近代への志向こそ、張赫宙文学の大きな特徴である、と言うのである。張赫宙文学の積極的評価を試みた南の見解は、それ以前、主に「親日文学や国策文学への関与」、或いは「抵抗」文学との比較としてなされた政治的見解を超えて、作者内部に蹲っていた近代への志向を、作品と実際の経歴を相互的に考察した点で評価できる。

このように、二項対立的な解釈から脱皮して、戦前の作品活動を実証的研究を通して整理したのが白川豊の「張赫宙研究」(東国大学博士学位論文、一九八九＊韓国語)であった。白川は、植民地期における張の作品（韓国語と日本語）だけではなく、文筆活動に対する日韓の反応も調査しているため、張赫宙研究の土台を作ったと言っても過言ではない。しかし、白川自身も「研究課題」に残しているように、その研究範囲が主に戦前の活動に限定されているため、戦後を含む張の生き様が明らかにされたとは言い難い。特に、終戦から日本に帰化（一九五二）するまでの活動は、ＧＨＱ占領下における資料の不足によって、文筆活動の全貌が明らかにされてないのが現状である。

近年、ポストコロニアルへの関心とともに張の戦後に対する関心も増しつつあり、金鶴童、張允麕、梁姫淑など、戦後に焦点をおいた論考がしばしば出ているが、戦後の全体像が明らかにされたとは言い難い。

例えば、金鶴童は『張赫宙の文学と民族の頸木』(『亦楽』、二〇一一）のなかで、戦後の作品を整理し、作品分析をも試みているが、作品の出版時における日本の文学状況、あるいは親日文学者として戦後を迎えた張の執筆者としての立場に関する考察が欠けている。特に、終戦から日本に帰化するまでの活動については空白になっているところもあって、終戦直後における張の文筆活動に対する実証的研究が求められている。

今まで張赫宙の帰化の問題は、前述した任（展慧）の「張赫宙論」でも見られるように、張赫宙文学が「屈従」に解釈される大きな要因の一つであった。しかし、単に戦前の延長線上で帰化を解釈するだけではなく、戦後における日本の社会状況のなかで、張の文筆活動を再検討した場合、今まで浮き彫りにされていなかった問題、或いは作者の新たな思考が見えてくるのではないか。それは、張赫宙研究における新たな方向性を見出してくれると考える。

三．研究目的

前述したように、初期の「張赫宙論」は、「抵抗」と「屈従」といった二項対立的に捉え

られる場合が多かった。そして、その背景には、日韓における政治的傾向が長い間、図式化・強化されていったと言っても過言ではない。しかし、一九九〇年代に入って日本での植民地文学の流行と、日本人による朝鮮文学研究の関心が増大することによって、親日文学者である張赫宙に対する新たな見解も増えつつある。

それは、政治的傾向の見解に対する問題の提起から、当時における帰属・文化の実態に対する再考察、或いは作者ならではの境遇に注目して、張の文筆活動に内在している思考を探るなど、張赫宙の作品、或いは文筆活動に対する意味がより深層的に考察されてきている、と言ってもよいだろう。しかし、そのような試みの殆どが主に戦前の活動に限定されており、戦後に対する考察が課題として残されているのも事実である。

例えば、白川豊をはじめ、林浩治、川村湊などの研究者が一九九〇年代後半から張赫宙の戦後の活動に対する考察の必要性に言及し、自らも若干の考察を試みているが、その殆どは代表的な作品に対する紹介に留まっており、戦後の歩みに対する意味を具体的に論じることはできなかった。

前述した金鶴童も、戦後の作品を整理して作品分析も重ねているが、戦後約五〇年（張は一九九七年に亡くなった）に及ぶ張（野口）の執筆活動に対する深層的考察が行われたとは言い難い。特に、日本に帰化するまでの活動については、戦前に引き続き活発な文筆活動をしたにも関わらず、その全貌が明らかにされてないのが現状である。

では、なぜ張赫宙の戦後（終戦から帰化まで）が重要なのであろうか。

白川は、終戦から「帰化」するまでの張赫宙を視野に入れて論じる必要性について、「この時期には、戦前の作品傾向をそのまま維持する反面、終戦と朝鮮戦争などの事態に対する張の対応が問題にされるからだ」と述べている。

終戦から帰化までの間、日本はＧＨＱの占領下におかれていた。ＧＨＱは日本が再び軍国主義に傾斜していくことを防ぐため、言論統制と検閲の政策を施す一方で、政治、文化面においては民主・自由主義を吹き込もうとした。しかし、一九四九年の中国革命と翌年の朝鮮戦争、そして日本共産党の武装闘争とＧＨＱによるその弾圧（『アカハタ』の停刊やレッドパージ等）など、終戦から早くも日本の内外の状況は、戦前と変わらぬ緊張感に覆われていたのである。

張赫宙文学に対する先行研究の盲点は、彼を「親日文学者」という特殊な存在とみなすあまりに、文学界を中心とした戦後日本の時代状況との関連性をそれほど問題にしなかったところにある。もとより、張赫宙文学は日本のプロレタリア文学運動のなかで生まれ、

以後長らく、日本の社会状況に応じて文筆活動を行ったと言っても過言ではない。そのことを考えると、日本の時代状況を視野に入れて張の文筆活動を丹念に追っていく作業は、戦前からの連続性、或いは非連続性の差異を明らかにして、帰化に辿りつくようになった作者の内的必然を、さらにはその生き様に対する新たな意味付けを可能にすると考える。

従って本論文では、張赫宙研究において課題とされて来た戦後（終戦から帰化まで）に注目して、文筆活動の実証的な調査はもちろん、日本の時代状況とも合わせて考察することによって、張の戦後の生き様を明らかにすることを本研究の目的にしたい。

注

（1）文京洙『在日朝鮮人問題の起源』（クレイン、二〇〇七）

（2）保高徳蔵「日本で活躍した二人の作家」（『民主朝鮮』、一九四六・七）

（3）「春香伝」は、東京の築地小劇場を皮切りに、大阪、京都と朝鮮の七都市（京城、平壌、大田、全州、郡山、釜山、大邱）で巡回公演された。

（4）「岩本志願兵」は、一九四三年八月二四日から九月九日まで『毎日新聞』に掲載され、朝鮮においても「巡礼」と改題して『毎日新報』（九月七日～二二日）に掲載された。さらに、翌年一月二七日には、京城の興亜文化出版から「野口稔」署名で出版された短篇集『岩本志願兵』に収録された。

（5）任展慧「張赫宙論」（『文学』、一九六五・一一）

（6）一九五二年に帰化した張は、帰化後の約一年間は筆名を変えずにいたが、自伝的短編「戸籍謄本」（『小説公園』、一九五四・六）から、筆名を野口赫宙に変えた。（長編は『無窮花』（講談社、一九五四）から）

（7）張赫宙「脅迫」（『新潮』、一九五三・三）

第一章　戦後の出発

はじめに

文芸評論家の丸山静は、終戦の日に「これから日本はどうなるだろうか」「これからの日本人は、どうして生きてゆけばよいのだろうか」という、きわめて単純な問題に初めてぶつかり、衝撃を受けたという。ましてや植民地の出身でありながら宗主国である日本に戦争協力をしていた張赫宙にとって、日本の敗戦はどのように受け取られただろうか。

張は、「噫・朝鮮の運命（上）」（『東京新聞』、一九四五・一〇・二二）のなかで、敗戦の日のことを次のように記している。

> ラジオがないので隣家へ聞きに行つてゐた妻の知らせに、全く表現の仕様のない呆然自失ぶりだつた。泣いてゐる妻の傍で、仰向けにぶつ倒れて、ぐら〳〵とめまひのする頭を抱へるのがやつとであつた。
>
> 物凄い混乱であつた。

張は敗戦の知らせにめまいがするほど、「物凄い混乱」を感じたと言っている。しかし、それは、日本人が日本の現実と未来を心配することとは、少し理由が違っていた。普通、朝鮮人であるならば、一九四五年八月一五日は、三六年にわたる植民地支配から解放された喜びの日である。多くの在日朝鮮人は「朝鮮独立万歳」を叫び、解放の喜びと祖国に帰れるという期待感に浸っていた。しかし、張は朝鮮の独立を素直に喜ぶというより、むしろ自分の居場所と定めていた日本の敗戦に「物凄い混乱」を感じていたのである。このように、朝鮮人でありながら自民族とは違う感覚のなかで戦後を迎えた張は、以後どのようにふるまったのか。

本章では、終戦直後に書いた「日本国民に寄せる」（『創建』、一九四六・三）を中心に、混沌とした戦後の文学状況のなかで張が目指した文学的方向を考察する。さらに、戦前の親日行為に対する作者ならではの立場を小説化した「民族」の作品分析を通して、植民地期における親日行為が、戦後の作者によってどのように解釈されていくかを考察する。なお、在日朝鮮人文学者（金達寿・許南麒）との比較を通して、終戦直後における張の固有性を考えてみたい。

一・「日本国民に寄せる」

一九四五年の五月、満鮮文化社の招待で新京に行き、八月になってやっと日本に戻ることができた張は、疎開地である長野県で終戦を迎えた。張が終戦後に初めて書いたものは、『東京新聞』に連載（二回）した「噫・朝鮮の運命」（一九四五・一〇・二二、二三）である。そこで張は、自分が「内鮮一体」に賛同するようになった理由を述べる一方で、「今後朝鮮のために大いに働きたい」が、二十冊の著作を出した「日本文壇と離れるのはつらい」と愚痴を言うなど、今後、自分が目指すべき活動の場が決められず悩んでいた様子が窺われる。

しかし、このような悩みの様子は、約五ヶ月後に書いた「日本国民に寄せる」では一変していた。同文章の中で張は、日本植民地期の悪政を一々取り上げて厳しく批判した後、「日本国民がこのやうな努力を今後必死になつてやるものと信じ、私もまたその一員となりたいと願ふものである」と述べている。つまり、今後「文化の再建」に向けて努力していく日本の将来に「明るい希望」を抱き、自分もその一員になることを願っていたのである。一方、朝鮮に対しては朝鮮人の大部分が「民族主義者」であることを指摘して、「私は朝鮮にこの民族主義が一日も早く除去されることを希望する」と、朝鮮の民族主義に対する懸念を表していた。

「日本国民に寄せる」は、朝鮮人が日本人に対して抱く「憎悪」の心が植民地政策の矛盾（差別）に起因していることを指摘し、日本民族の欠陥（短気、行き過ぎ、優越感、包容性の欠陥）を批判的に述べたものであった。しかし、ここで注目したいのは、張が日本の民族性を批判的に述べていく前に、日本と朝鮮における民族性の「同似性」を強調していたことである。例えば、張は、朝鮮人と日本人の体質の近親性を認めたうえで、「殊に原始道徳の類似は日鮮の同族的関係をはつきり物語つてゐる」と述べている。張の見解によると、日本の場合は、徳川鎖国と維新後の軍国によって、それ以前の善さと美しさ（原始道徳）が破壊されたために、今日の民族性の欠陥が残るようになったという。しかし、終戦による外国文化（精神）の受け入れと、軍国色の払拭によって、今後の日本人は本来の美徳を再発揮できるチャンスをもらえたことになる。張はそのような日本の将来に「明るい希望」を抱いていたのであった。

では、朝鮮に対してはどうだろうか。前述したように、張は朝鮮の「民族主義」に危惧の念を抱いていた。つまり、朝鮮の民族主義が朝鮮（朝鮮人）自体を不幸にするだけではなく、各民族の「融和」を妨げる要因になると考えていたのである。このような朝鮮の「民

族主義」に対する否定的な考えは、実のことを言うと戦前からあったと言える。戦前の張は、朝鮮の強い民族意識に否定的な考えを持っていた。それが公にあらわれたのが一九三八年に上演された「春香伝」公演における、朝鮮の知識人との口論ではないだろうか。

朝鮮の代表的な古典である「春香伝」は、村山知義の演出（脚本：張赫宙）で内地（日本）と朝鮮でそれぞれ上演された。しかし、好評を受けた内地での反応と違って、朝鮮公演における朝鮮人たちの評価は手厳しいものであった。彼らが「春香伝」公演の問題として指摘した内容は、主に次の二点にまとめることができる。

①日本語への翻訳によって「春香伝」ならではの言語ニュアンスが伝わらない

②朝鮮の風俗、習慣を無視している

これらの指摘に対して脚本を書いた張は、「東京で上演する為に朝鮮の古典にある春香伝が東京の観客に分つて貰へるといふことを主眼として出来るだけ優しくといふことを標準にして書いた」[1]と述べている。つまり、張は、朝鮮人の精神文化をほとんど知らない日本人に、朝鮮の古典を紹介するだけでも「春香伝」公演の意義があると考えていたわけである。

しかし、朝鮮人の場合は違っていた。なぜなら、彼らにとって「春香伝」とは、朝鮮の地域的特殊な言語感覚と風俗をストーリーに結び付け、その時代の古い制度と社会的生活様式を表してくれるもっとも民族的な作品であったからである。朝鮮の知識人たちは、「春香伝」が傑作であると言われる所為は、内容の豊富さにあるだけではなく、その無限の言語のニュアンスと精巧な習俗の反映にあると考えた[2]。それ故に、翻訳によって原文の言語ニュアンスがうまく伝わらないことを残念に思い、せめてその背景にある時代の文化や風習を多く取り入れてほしいと思っていたのである。

しかし、張は右のような要求を、自分の活躍に対する嫉妬であると思い込んだようで、翌年に書いた「朝鮮の知識人に訴ふ」（『文藝』、一九四九・二）の中で、朝鮮人の民族性を「激情性」、「正義心の乏しさ」、「嫉妬心の強さ」、「ひねくれ」などとあらわして苛烈に批判した。さらに、「われわれがもし完全に内地化してしまつたとすれば、われわれは自然落着のある、ひねくれのない民族となる」と述べて、当時の植民地政策である「内鮮一体」運動を肯定する立場を表明した。

もちろん、右のような発言のうらには被植民地人として差別されざるを得ない朝鮮人の地位向上のためには完全に内地化するしかない、という張ならではの時代認識があったことは確かである。しかし、一方においては「春香伝」公演を含む自民族との度重なる口論が、張に朝鮮人の強い民族意識に対する不満と反抗心を抱かせたことも指摘できる。

金鶴童[3]は「日本国民に寄せる」について、張が「日本の戦争責任を追及することによって、新しい時代に迎合しようとする作家的態度を見せ始めた」と述べて、同時代の社会・文学状況との関連性に言及している。確かに終戦直後の日本では、敗戦の歎きの文句に似たような、戦争責任の追及が盛んに行われていた。文学界のなかでは、荒正人、佐々木基一、小田切秀雄の三氏が『文学時評』を創刊（一九四六・一）して文学者の戦争責任を問い、様々な立場の人々との連帯を呼び掛けた。

さらに、「日本における民主主義的文学の創造とその普及、人民大衆の創造的・文学的エネルギーの昂揚とその結集」[4]を目指して設立（一九四五・一二）された「新日本文学会」は、機関誌『新日本文学』の三号（一九四六・六）において、小田切秀雄の署名による「文学における戦争責任の追及」を掲載している。この文章には、文学における戦争責任は「まず吾等自身の問題」であって、「自己批判」からはじめなければならないと述べて、二五名の戦争責任者を名指している。この選別基準は「特に文学及び文学者の反動的組織化に直接の責任を有する者、また組織上さうでなくとも従来のその人物の文壇的な地位の重さの故にその人物が侵略賛美のメガフォンと化して恥じなかつたことが広範な文学者及び人民に深刻にして強力な影響を及ぼした者」になっていて、菊池寛、小林秀雄、佐藤春夫などがその名を挙げられた。終戦直後の張は、この「新日本文学会」への加盟（一九四六、七年頃）を試みていたが右のような理由で断わられたという。[5]

このように、終戦直後の日本は、国民生活を悲惨な状況に陥れた責任者の戦争責任追及に熱心であり、知識人らが侵略戦争に巻き込まれ、協力してしまったことを、主体性の弱さとして反省し、日本の近代文学の歴史を批判的に検討する作業に取りかかっていた。

では、このような文学状況の中で、張は戦前における自分の親日行為をどのように自己批判（弁明）していたのだろうか。次節では、張が終戦直後に書いた「民族」（『創建』、一九四六・四～六）の作品分析を通して、植民地期における親日行為が、戦後の作者によってどのように解釈されていくかを考察する。

二．親日行為に対する弁明―「民族」

「民族」は、『創建』に一九四六年四月から六月（第三回で中断）まで連載された。『創建』の「編集後記」（一九四六・四）をみると、次のように同作品を紹介している。

民族対民族の摩擦と愛情を、氏獨特の筆致で描写せるもの、民族的苦悩を身をもつて

体験せる氏にして初めて書き得る作品である。氏が戦後自信をもつて世に問ふ力作である。

編集部が「民族的苦悩を身をもつて体験せる氏にして初めて書き得る作品」であると紹介しているように、「民族」には、植民地期における張の言動と、その背景になっていた心理状況が詳しく描かれており、当時における張の思考と心情が窺える作品である。

まず、三回に分けて連載された「民族」のあらすじを紹介しておく。

・第一回（筆禍前後）：朝鮮人文学者である安俊一は、警察庁から「出頭命令書」を受けて、簡単な職務質問で終わると思い、幼い子供を留守番させて家を出る。しかし、警察庁の担当者は安が一ヶ月前に九州の炭鉱に行って講演したことや、貴族院議員である関貞三と協和事業について対談したことを理由に、場合によっては朝鮮に送還することも可能であると威嚇する。日本文壇に名乗り出た最初の朝鮮人作家として知られた安は、自ら転向を誓わなくてもずるずると協和運動に引っ張りだされて、遂には内鮮一体の模範人物とみなされていた。それにもかかわらず、安は常に警察庁の監視下に置かれて惨めな思いをさせられるのである。安は、今回問題にされた一連の行動に対する経緯をよく知っている吾妻と西村を訪ねるために出かけながら、協和事業について関氏と対談した夜のことを思い出していく。

・第二回（美しい対談）：関氏は愛情を持って朝鮮人に接している数少ない日本人の一人であった。しかし、朝鮮人が日本化の道程において一つ優をとればそれだけ待遇を改善するという関の漸進主義が安には飽き足らなかった。協和新聞の主催で設けられた対談は、関氏の民族融和の美談を中心に協和事業の必要性が次々と述べられていた。

・第三回（美しき対談〈二〉）：　安は朝鮮人の立場に理解を示してくれる対談の美しい雰囲気に心が解かされて、思うまま自然な発言と意見を加えた。そして、民族間の融和をはかる協和事業が如何に重要であるかを感慨深く考えたのである。そのような美しかった対談が問題になるとは思っていなかった安は、対談を主催した協和新聞の吾妻に事件の経緯を説明して助けを求める。

「民族」は、協和事業に対する関貞三との対談の中で、安が「朝鮮人の日常生活様式の内地化とか向上とかについては大阪府協和会は非常に熱心のやうですね、その点東京は力瘤の入れ方が足りないやうに思ひます」と言ったことが東京都協和会を誹謗したと見なされて、拘束の危機に追い込まれた経緯が描かれている。ここで言及されている「協和会」とは、戦時下の日本で、特高警察を中核にしてつくられた、在日朝鮮人統制組織のことで

ある。協和会は、日本国内での戦時体制の確立と深刻な労働力不足に起因した朝鮮人労働動員の必要を背景として組織され、戦時下の在日朝鮮人の治安対策と日本人化（＝皇民化）を目的としていた。[6]

安は、このような協和会の協和運動に大東亜戦争開始前後から協力していたにも関わらず、常に警察の監視下におかれて、警察庁から「出頭命令書」が届く度にびくびくする。これまで幾度も拘留生活をしたことがあった彼は、巡査の前を通る時でさえ尋常でない気持ちになるほど、臆病な性格の持ち主であった。そして安は、そのような自分の臆病に腹を立て、非常に醜く思うのである。安の臆病な性向は、もとを辿れば幼小年時代の記憶が多く関わっていた。安の母親は激しい性情の持ち主で、何かで腹が立つと、「お前なんか抛っておいて何処へでも行ってしまふ」と、威嚇していた。幼い頃の安は、母に捨てられることを恐怖し、連れて行ってくれと哀願しながら母の機嫌がなおることを待ったものである。そして彼は、このような母の暴威に対して恐怖し、遂には物凄い反発心を抱くようになるのである。そのような心理状況が素地になって、安は極端に卑屈になる弱さと燃え上がる反抗の両方を心に感じていた。そして、そのような心の戦いに負けて、心の弱さに自分を任せた時、安はかぎりなく自分を軽蔑した。そして一度弱くなった心は臆病に縮かんで、権力をもつ者におびえるのである。

このように、張は、自分の分身である安を通して、植民地期における心の弱さを告白し、遂には、中学生の頃、日本の帝国主義に反抗して社会主義の革命運動に関わったことについても、「その時の反抗といふものは革命闘士の逞しい意力ではなく、女のやうに繊細な感情で、ヒステリックな神経質的なものであつた」と振り返っているのである。

一九三二年、プロレタリア系列の短編「餓鬼道」を持って日本文壇にデビューした張は、朝鮮語ではなく、日本語で小説を書く理由について、朝鮮人の悲惨な「実情をどうかして世界に訴へたい、それには朝鮮語では範囲が狭小である。日本語はその点、外国に翻訳される機会も多いから、どうしても日本の文壇に出なくてはならないと思ひました」[7]と述べた。つまり、朝鮮農民の悲惨な生活を、日本語という表現手段を通じて多くの読者に知らせようとしたのである。そのような意志の土台になった少年時代の記憶を、戦後の張は「女のやうに繊細な感情で、ヒステリツクな神経質的なものであつた」と、告白しているのである。

さらに、日本語で小説を書くのだから何もかも日本化していると合点して、協和事業の「模範人物」視されてきたことを良いことに、その陰に隠れて「カムフラージュ」していた自

分についても、その全てが「子供の為め」であったと、自己弁護を重ねている。

安は、朝鮮にいる間は朝鮮語による創作にも力を尽くしていた。しかし、両刀使いをするほど彼の文学才能は豊かではなく、努力していたにも関わらず彼の駆使する日本文が本物でないという日本の批評家の言葉に刺激されて、純粋な日本語を習得するためには、日本に行くしかないと思い、日本への移住を決心した。その後の彼は、日本語という敵を征服する為に、日常生活の中に反映されている日本精神を追求し、日本の感性を身につけるためにあらゆる努力をした。しかし、彼の文学はそのような努力にも関わらず、さほど向上せず、かえって初期の文学が持っていた民族的特徴を失い、情熱すら薄らいでしまったのである。

ところが、いつの間にか、彼の言葉は朝鮮訛りがとれて、顔の表情や歩きぶりや物の考え方が日本的なものになって、彼の肉体の日本化という予期しない変化をもたらした。このことが、協和運動や内鮮一体運動という朝鮮人の日本化の観点からすれば、一つの標本のように見られる結果となって、協和事業に関する懇談会にも度々呼ばれるようになったのである。

今回問題となった関貞三との対談も、右のような理由から日本人の間では知名度が高かった安が招待されたのであった。ちなみに関貞三とは、総督府の学務局長を務めた関屋貞三郎のことで、その他の登場人物も人名を少し変えただけで、「民族」は殆ど実話に基づいて書いたと考えられる。[8]

安は他の懇談会でも関と顔を合わせたことがあり、朝鮮人問題について理解を示してくれる関に好感を持っていた。つまり、「朝鮮人は恩知らずで感情的で附和雷同しやすい無智盲味な人種だ」と罵っていた多くの日本人と違って、関は「朝鮮人の美点」を多く取り上げて、朝鮮人の生活向上のためには、警察による「取り締まりよりも教化指導に重点を置いてゆく」必要性と、朝鮮人に対する日本人の認識を改めることが優先されなければならないことを強調していたのである。

しかし、安は関のように考える役人がいることを嬉しく思う反面、そのようなことを自分が言った場合のことを考えないではいられなかった。つまり、被植民地人である自分の弱い立場が頭から離れず、結局彼は、日本警察の悪制度を弁護するようなことしか言えないのである。今回、問題になった対談でも、安は初めのうちは用心していた。しかし、関のもの柔らかな言葉や、現場の「美しい雰囲気」に気が緩んで、いつの間にかつい自分の意見を言っていた。それが、今回のような拘留の危機を招いたのである。

「民族」は三回で中断されているため、その後の展開を知りようがないが、張はこの短編を通して、あきらかに植民地期における自らの主体性の弱さを告白し、自己弁護をも重ねていたことが分かる。そして、このような親日行為に対する告白は、前述したように、自己批判と反省を求める当時の文学状況とリンクしていたのである。

しかし、ここで注目したいのは、張の親日行為に対する自己批判と反省は、三回で中断された「民族」以外には見られないことである。「民族」以後の作品は、東京空襲で戦災孤児となった少女を主人公にした『孤児たち』(萬里閣、一九四六)や、短編集『ひとの善さと悪さと』(丹頂書房、一九四七)など、終戦直後の日本における様々な人間像を描いたものが多かった。しかし、これらの作品は、これまでとは違って、朝鮮や朝鮮人に対する描写も少なく、同胞への共感も希薄である。

張は、終戦後、在日朝鮮人の帰国斡旋や日韓人間の摩擦防止、生活の福祉保証などを掲げて、一九四五年一〇月一五日に設立された「在日本朝鮮人連盟」(以下、朝連と略称)が、GHQの「団体等規正令」によって解散(一九四九・九・八)させられるまで、朝鮮や朝鮮人に対する著作や言及を自ら控えていた。このことについては、第二章で詳しく述べることにして、本章では、終戦直後、文学界における戦争責任の追及に追われて「民族」を書いた張との比較対象として、戦後から活発的な文筆活動を展開した在日朝鮮人文学者の二人、金達寿と許南麒を取り上げて、戦後の出発における文学活動の違いを考えてみたい。

三. 在日朝鮮人文学者の嚆矢—金達寿

戦後の在日朝鮮人文学者たちは、主に在日朝鮮人民族団体や新日本文学会に所属して、朝鮮民族の権利獲得や民族教育の普及といった民族運動に基づく活動を展開した。在日朝鮮人文学者の嚆矢と呼ばれる金達寿(一九一九〜一九九七)もその一人である。

金達寿は、戦後早くも『民主朝鮮』[9]の編集者となって、「教育問題」や「朝鮮解放」の特集号を発刊するなど、民族運動に関わっていた。『民主朝鮮』は、あえて日本語を表現の手段として選び、日本人を読者として想定し、創作活動だけではなく、「朝鮮文学」というものを示そうと試みた雑誌である。[10]この雑誌には在日朝鮮人文学者による小説や詩が多く掲載されており、中野重治など旧プロレタリア文学系の作家たちによって結成された「新日本文学会」の機関誌『新日本文学』と共に、戦後における在日朝鮮人文学者の活躍の場となっていた。

金達寿初の長編小説である「後裔の街」[11]も、『民主朝鮮』の創刊号（一九四六・三）から一九四七年の五月まで連載された。「後裔の街」は、日本から植民地支配下の「京城」（ソウル）に帰った青年高昌倫を主人公として、植民地下におけるインテリの煩悶を描いたものである。昌倫は、祖国を支配する日本に対する反発を感じながらも、祖国に来てみると、祖国での実生活の感覚から離れている自己を発見する。つまり、彼は母国語さえも自由に使いこなせないのである。昌倫は従妹から毎日のように朝鮮語の読み、書き、発音を習わなければならなかった。自ら努力しなければ上達できない朝鮮語のように、民族を意識的に思わなければ、民族との連帯感を保つことはできないと考えた昌倫は、民族との違和に悩みながらも、徐々に民族意識を強めていくのである。

「後裔の街」は、「朝鮮的なるもの」や「民族的なるもの」への追求が軸となっていて、戦後の在日朝鮮人と彼らによる文学そのものを象徴するような作品であると言える。金達寿は、朝鮮生まれではあるが、少年期に日本に渡り、まともな朝鮮語の教育を受けることができなかった。つまり、朝鮮語で書くことを禁止された時代と一線を画した戦後においては、既に朝鮮語を駆使して書くことのできない世代による日本語作品が歩み始めたのである。[12]

もちろん、戦後の在日朝鮮人文学者の全てが朝鮮語で書く能力に欠けていたわけではない。特に金のような一世にあたる文学者の中には、朝鮮語による創作を試みた文学者も少なくなかった。例えば、詩人の姜瞬（一九一八～一九八七）は、朝鮮語と日本語による詩作と翻訳をしており、詩集『朝鮮部落』『災松』『姜舜詩集』などを残している。

なお、一九四八年に書いた「パンチョッパリの歌」では、朝鮮人の父と日本人の母の間に生まれた、いわゆる「朝鮮と日本のゆがめられた歴史の落し子」である在日朝鮮人のアイデンティティに対する問いかけが強調されている。

ぼくは
朝鮮と日本の
ゆがめられた歴史の落し子
実感をもたない祖国愛と
母の国の過去を裁く批判のあいだで
ぼくはパンチョッパリ
ぼくは
半朝鮮人なのか？

半日本人なのか？

つまり、ここには、在日朝鮮人文学者として、いかに生きるべきかと言う、作者自身の実存的苦悩があらわれているのである。そして、「パンチョッパリの歌」は次のように、締め括られている。

ぼくには純血がない
だがぼくは
ぼくのやり方で
祖国をしっかり抱きしめる
ぼくはもう
パンチョッパリではいられないのだ

「ぼくのやり方で祖国をしっかり抱きしめる」という言葉が象徴しているように、ここには、日本語だけではなく、朝鮮語による詩作・翻訳を実践していく姜瞬ならではの祖国に対する抱き締め方（愛情）が示されているように思われる。

では、金達寿の場合はどうだろうか。一〇才の時に日本へ渡った金は、日本語の読み書きも知らないまま、納豆売り、くず拾いなどをしながら変則的に小学校に通い、言葉を覚え倶楽部取やら『廃品文庫』少年利用して、学友に教えられたりしながら文字を覚え、次第に「物語」の世界に魅かれて、『世界文学全集』や『現代日本文学全集』をむさぼるように読み始めたという。つまり、金にとって日本語を学ぶことそのものが、文学に対する目覚めであったのである。このように、少年期から日本語で日常生活を過ごした彼は、巧みな言語表現を必要とする文学作品を朝鮮語で書く能力を持ち得なかった。言い換えると、金にとって朝鮮語は、「後裔の街」の昌倫と同様に、自ら努力して学習しなければ上達できないものであったのである。けれども、終戦後の金には、もう一度、母国語にたちもどることに努力し、それを創作の主要な手段とするチャンスはあった。しかし、金は自分の文学の道を日本語で貫いた。それはどのような意志に基づいてなされたのだろうか。

『金達寿小説全集一』（筑摩書房、一九八〇）の「著者うしろがき」（「わが文学と生活（三）」）をみると、金は、日本語による創作を始めるようになった動機を次のように述べている。

志賀直哉が描いている自分自身を中心とした人物のほとんどは、地を這うような生活者である私などとはまったくちがって、生活には少しも困らないそういうブルジョアばかりだった。しかしにもかかわらず、私はその作品を読んで感動した。

それはなぜか。そこには、共通の人間的真実が描かれているからである。その真実はどのような生活をしている者にも、朝鮮人、日本人と限らないどこのだれにも共通のものとしてある。そうだ、おれは自分たち朝鮮人のそれを書くのだ。そしてそれを、日本人の人間的真実に向かって訴えるのだ、と私は考えたのである。

廃品のなかで見つけた『現代日本文学全集』の「志賀直哉集」に夢中になって、強い感動を受けたと言う金は、それらの作品が感動を与えてくれる理由は他ならぬ「共通の人間的真実」を描いているからだと考えた。その「共通の人間的真実」を朝鮮人の境遇から見いだそうとしたとき、当然金は、朝鮮人がそのような境遇におかれているのはなぜか、ということを問わなくてはならなかった。

金が、戦後初めて世に出した「後裔の街」が、被植民地人としての体験を吐き出し、さらには、朝鮮語をはじめ、民族との違和に悩みながらも、徐々に民族意識を強めていく高昌倫を通して、「朝鮮的なるもの」「民族的なるもの」を追求していたことは、朝鮮人としての自己確認から戦後を出発しようとした金達寿の文学的姿勢が窺われるのではないか。それが、朝鮮語ではなく日本語によるものであったとしても、「民族の平等」や「人間同士の理解」のために役立てようとした文学的姿勢は、その後の連作『玄海灘』[14]や『太白山脈』[15]に続く、金達寿文学の基本的なテーマであり、言い換えると金ならではの祖国や民族に対する「抱きしめ」であったのである。

四．民族の戦いを歌い上げる―許南麒

金達寿と並ぶ代表的な在日朝鮮人文学者であり、詩人である許南麒（一九一八～一九八八）は、金と同様に『民主朝鮮』や『新日本文学』を舞台に活動を広げて、一九四九年に『朝鮮物語』（朝日書房）を、そして翌年には『日本時事詩集』（朝日書房）を出版した。『朝鮮冬物語』は、「朝鮮風物詩」として『民主朝鮮』に連載した長編詩を中心に再編したもので、後に許は次のように述べている。[16]

わたくしは、主に一九四五年の秋から、一九六〇年頃まで、朝鮮語による詩作とともに、日本語の詩作も並行してやってきた。

わたくしのつもりでは、日本語の詩は、朝鮮のおかれている位置と境遇とを、なるべく多くの日本人にわかってもらうためのものであった。

許南麒は、日本語による詩作の理由を「朝鮮のおかれている位置と境遇とを、なるべく

多くの日本人にわかってもらうため」であったと述べている。ここには、金達寿と同様に、朝鮮民族の境遇を日本語という表現手段を通して日本人の読者に伝える、という使命感に似たような思いが先行されていたことが分かる。しかし、同じく朝連や新日本文学会に所属し、左翼作家として戦後を迎えた許と金の間には、文学活動における微妙な違いがあった。日本語を表現手段として選び、最後まで日本語による執筆を貫いた金と違って、許は、日本語だけではなく、朝鮮語による詩作や翻訳も手掛けており、さらには、小・中学校における民族教育にも積極的に関わった。[17] 詩作内容においては、長い間被植民地人として抑圧され、虐げられてきた朝鮮人の境遇をうたったものが多く、全詩集を通じて「闘う抒情」といったものがみなぎっている。[18] 長編詩「朝鮮冬物語」の冒頭に置かれた「傷だらけの詩にあたえる歌」を例にあげてみよう。

おまえたち
傷だらけの　おれの詩たち、
やせおとろえた二つの羽根と
いたずらにきょろきょろする
二つの触角をもった
繃帯だらけの　おれの詩たち、
くちさきには
異国製の　頑丈な猿ぐつわがはめられ
手足の一つ一つには
あしかせ、てかせ、
がちゃがちゃと
鎖の音も　ものものしく軋む　おれの詩たち、

おまえたち
傷だらけの　おれの詩たち、
いまこそ起き上がれ
いまこそ肩を組み
一列にならべ、
おれたち　傷つけられた者、
おれたち　虐げられた者の

ときが来るのだ、
いまこそ鎖をならして立ち上がれ、

「傷だらけの詩にあたえる歌」は、まさに「頑丈な猿ぐつわ」にはめられ、朝鮮語でものを言うことも書くことも禁止されてきた「傷だらけ」の朝鮮人が、いまこそ立ち上がって、日本の革命に参加していくことを呼び掛けているように聞こえる。左翼系作家であるだけに、政治性が優先されているようにも思われるが、実際において、許は、一九五〇年、日本共産党の内部で起きた分裂の際に、徳田球一や野坂参三が率いる「所感派」の立場を取って、それまで活動していた『新日本文学』から『人民文学』へと活動の舞台を変えていた。

一九五〇年一月六日、コミンフォルム（モスクワの共産党・労働党情報局）の機関誌に「日本の情勢について」が掲載され、当時、日本共産党の指導方針として採用されていた平和革命路線が徹底的に批判されたことへの対応をめぐって、日本共産党は、徳田球一らの「所感派」（主流派）と、宮本顕治を中心とする「国際派」（反主流派）に分裂して、深刻な対立状況に陥った。結局、所感派の主導のもとで平和革命路線は放棄され、反米と社会主義革命に向けた「武装闘争」へと方針変更を行うことになる。それを受けて、戦後、民主主義文学運動の結集体として活動していた新日本文学会の会員も分裂して、一九五〇年一一月に『人民文学』が刊行された。この時期から、「所感派」の立場をとった許南麒は『人民文学』に、「国際派」の立場をとった金達寿は『新日本文学』に、それぞれ詩や小説を発表していくようになる。

朝倉新太郎[19]は、許南麒の詩集『朝鮮冬物語』について、許南麒自身が「この地域を、こんどは、何処かの国の植民地となし、国を売ることを企らむ奴等のするなりにまかせておくつもりなのか。君達は？」と呼びかけているように思えてならないのである」と述べている。このような評価は、主に一九五一年前後のＧＨＱ占領下に置かれていた被圧迫民族としての日本民族の問題や、民族の解放といった言説が盛んになっている中で、活用される場合が多かった。では、このような評価について許南麒自身は、どのような態度を見せていたのだろうか。

許南麒の「詩ビラ・其他―民族詩の問題の一つとして」（『文学』、一九五三・一）を見ると、彼は日本がおかれている状況を次のように述べている。

いま、わたくしがここで言う「民族詩」という言葉は、いま日本で叫ばれている「国民文学」という言葉と同じ意味を、ただわたくしの祖国である朝鮮で使われている述

語で言ったにすぎない。しかし、わたくしは「国民文学」とか「国民詩」と言う言葉よりも、「民族文学」とか「民族詩」と言った方がはるかに内容を正しく伝えているように思える。それは「民族」と言う言葉が、われわれ朝鮮人の耳には、「独立」とも「統一」とも「平和」とも「自由」とも聞えるからである。だからわたくしは「民族詩」と言う言葉を使う。（中略）いまの日本の現状から見る場合、民族の独立と平和を闘いとろうとする側の詩人や作家が風刺でもって、こういう険しい現実を笑い過してしまおうとする態度については甚だ危険なものを感ずる。

許南麒は、「民族」という言葉は、「われわれ朝鮮人の耳」には、「独立」とも「統一」とも「平和」とも「自由」とも聞える、と言っている。つまり、強力な相手（ＧＨＱ）から「平和」と「自由」を勝ち取るためには、詩人や作家が、真正面からぶつかって行き、怒り、「民族の独立と平和」のために闘わなければならないことを強調しているのである。

このような言説は、当時の日本で論議されていた「国民文学」の問題と結びつく主張であった。つまり許は、一九五一年、竹内好の「近代主義と民族の問題」（『文学』、一九五一・九）が発端となって、日本国内で「民族」や「国民」の問題が浮上していることを念頭におきながら、朝鮮の「民族」と日本の「国民」が、「独立と平和」のために「共闘」していくことを呼び掛けていたのである。このように、許は、全詩集を通してまさに「闘う抒情」といったものを歌い上げた。

梁石日は、「方法以前の抒情―許南麒の作品について」（『ユリイカ』、二〇〇〇、一二）の中で、「確固とした思想性に支えられ、論理化されたものではなく、ただ漠然と、湧き出る心情をそのまま歌い流すといった調子なのだ」と許南麒の詩を批判的に述べているが、晩年の無条件的な金日成賛美は別として、前述した「傷だらけの詩にあたえる歌」や植民地朝鮮における独立運動の記憶をうたった、叙事詩『火縄銃のうた』（朝日書房、一九五一）など、許南麒の詩にあらわれる「闘う抒情」は、民族の完全な独立と平和を願う在日朝鮮人の心に響き渡っていたに違いない。

おわりに

金達寿の『日本の中の朝鮮文化』（講談社、二〇〇一）をみると、金が、まだ帰化する前の張赫宙を訪ねたときのことが書いている。同行したのは、許南麒と李殷直など、後に朝鮮総連の幹部となる左翼系の青年たちである。当時、一九〇五年生まれの張が四〇代前半

であったとすれば、彼らはまだ二〇代の後半で、解放された祖国に対する熱気にあふれた青年たちであった。金らは、高麗神社に参拝したのち、酒を飲んだ勢いでその近くに住む張の家に押しかけたのである。その夜、許南麒は酒に酔って「木浦の哀しみ」を歌いだした。それを聞いた張赫宙の日本人妻は、急に張の肩に顔をもたせかけて泣き出し、見ると、張も泣いていたという。このようなエピソードを振り返りながら金は、「いずれにせよ、悲劇の作家張赫宙もまた、民族の子だった」と後述している。しかし、彼らの関わりは酒に溺れたその夜きりで、再び会うことも連絡を取ることもなかったようである。

後に許南麒は、「売族者の運命」（『平和』、一九五二・一一）のなかで、張のことを次のように述べている。

> 張赫宙は、わたくしの見るところでは非常に小心な人のようである。そしてその小心さの故に、彼は自分の立場を固執することが出来ず、始終あっちへ押され、こっちへ引きずられして来たようだ。そしてそういう小心さの附随心理として、何時も何かに襲われているような被害妄想狂に陥ちいり、ときには「朝鮮人が何時も自分を殺害しょうとして、家のまわりをうろついている」とか、「集団で押しかけて来た」とかと言うような、常識では考えられない発表もするようになるのではないかと思う。（中略）わたくしは、張赫宙が、別に民主的な立場に立って貰ってもいいから、他人の差金でもって動くロボット的存在ではなく、確固たる自分の見解と頭脳で働く人間であって貰いたいのである。

「売族者の運命」は、『日本週報』に掲載された張の「元朝連系同胞に訴える」（『日本週報』、一九五二・七）に対する抗議文として書かれたものであった。許は、この文章のなかで、張の主体性の弱さを指摘し、「彼は同民族でも同胞でもなく、かえってアメリカ人やイギリス人などよりも、朝鮮を語る場合適任者ではないとも言える存在」であることを強調して述べている。

本章で見て来たように、終戦直後の張は、知識人の戦争責任を追求する文学状況のなかで、「民族」を書いて植民地期における自らの弱さを告白し、自己批判をも重ねていた。一方、金達寿と許南麒は、その文学活動における若干の違いはあったものの、お互い在日朝鮮人民族団体である朝連に所属しながら、在日朝鮮人の民族運動に携わっていた。もちろん、張も終戦直後には、在日朝鮮人民族団体（朝連・民団）と一時期（一九四七年頃）に限って関わりを持っていた。しかし、その関係は長く続かず、むしろ張はその関わりのなかで、自民族の強い民族意識に異質感を覚えるようになったという。今まで、終戦直後に

おける在日朝鮮人と張との関係は、詳しく検証されていなかった。

従って次章では、在日朝鮮人民族団体と張赫宙が具体的にどのような関わりを持っていたのか、戦後における張の足どりを辿りながら、その関わりの中で抱くようになった不満と反抗心がどのようなものであったかを考えてみたい。

注

(1)「春香伝批判座談会」(『テアトロ』、一九三八・一二)

(2)辛兌鉉「春香伝上演を観て」(『朝鮮』、一九三九・一二)

(3)金鶴童「張赫宙の『嗚呼朝鮮』『無窮花』論—6.25 戦争の形象化に見える作家の民族意識」(『日本学研究』、二〇〇八・五＊韓国語)

(4)「新日本文学会の綱(草案)」(『新日本文学』創刊準備号、一九四六・一)

(5)許南麒の「売族者の運命」(『平和』、一九五二・一二)

(6)樋口雄一『日本の朝鮮・韓国人』(同成社、二〇〇二)

(7)保高徳蔵「日本で活躍した二人の作家」(『民主朝鮮』、一九四六・七)

(8)白川豊『朝鮮近代の知日派作家、苦闘の軌跡』(勉誠出版、二〇〇八)

(9)『民主朝鮮』(一九四六・四～一九五〇・七)は、在日朝鮮人達によって刊行された総合文化雑誌である。発行人は韓徳銖、編集人は金達寿。朝連の支援下で刊行された雑誌で、思想的には左翼系にあたる。

(10)高榮蘭『「戦後」というイデオロギー』(藤原書店、一九一〇)

(11)金達寿の「後裔の街」は、『民主朝鮮』に一九四六年四月から一九四七年五月まで連載されて、連載終了後の一九四八年に朝鮮文芸社から著者初の単行本『後裔の街』として出版された。なお、一九四九年には、世界評論社から同題で再出版している。

(12)林浩治『戦後非日文学論』(新幹社、一九九七)

(13)金達寿「『玄海灘』について、あるサークルへの答」(『金達寿評論集上　わが文学』、筑摩、一九七六)

(14)「玄海灘」は、『新日本文学』の一九五二年一月号から、翌五三年の一月号まで連載。一九五四年一月五日、加筆して筑摩書房より長編単行本として刊行。

(15)「太白山脈」は、『文化評論』の一九六四年九月号から六八年九月号まで連載。(途中、六五年八月号・六六年八月号・六七年一〇号の四回休載)翌一九六九年五月三〇日、加筆訂正のうえ筑摩書房より長編単行本として刊行。

（16）注（12）と同じ。

（17）許南麒は、一九四六年、川口朝聯小学校の校長に就任、一九五一年には神奈川朝鮮人中学校の教務主任に就任するなど、在日朝鮮人の民族教育に多く関わっている。

（18）出海渓也「解説」『〈在日〉文学全集２・許南麒』（勉誠出版、二〇〇六）

（19）朝倉新太郎「許南麒詩集　朝鮮冬物語」（『新日本文学』、一九五一・七）

第二章　在日朝鮮人民族団体（朝連、民団）との関わり

はじめに

張の代表的な自伝的長編『遍歴の調書』（新潮社、一九五四）を見ると、「第三国人団体が、私を民族叛逆者だから懲罰を加へるといつて私のところへ大勢で来るといふ動きがあり、怯え切つた私は表て向きの仕事を差控へてゐた」という一節がある。ここでいう「第三国人団体」とは、在日朝鮮人民族団体のことを指しており、「表て向きの仕事を差控へてゐた」とは、この頃の張が実名を使わないで執筆活動をしていたことを指す。

終戦によって植民地支配から解放された在日朝鮮人は、帰国の斡旋や日韓人間の摩擦防止、生活の福祉保証などを掲げて、一九四五年一〇月一五日に在日本朝鮮人連盟（以下朝連と略称）を結成した。朝連は現在の「在日本朝鮮人総聯合会」（略して総連）の前身であり、一年後に設立された在日本朝鮮居留民団（以下民団と略称）とは政治的に対立関係にあった。そして、親日文学者の張は、民族主義を掲げて結成された朝連と民団からは、ともに歓迎されない存在であったと言える。このように、張の戦後における活動及び帰化までの道のりを考える際に、在日朝鮮人（民族団体）との関わりはきわめて重要な意味を持っていると言わざるを得ない。

本章では、戦後における張赫宙の足跡をたどりながら、在日朝鮮人との関わり、及びその関わりのなかで抱くようになった不満と反抗心が、どのようなものであったかを検証する。加えて、一九五〇年前後の日本国内における朝鮮人問題とマスコミの動向にも注目しながら、在日朝鮮人に対する不満と反抗心がどのように帰化に結びついたのか、できるだけ張の内面の動きに寄り添って考えてみたい。

一．戦後の歩み

戦後、在日朝鮮人作家たちは、主に在日朝鮮人民族団体や新日本文学会に所属して、朝鮮民族の権利獲得や民族教育の普及といった民族運動に基づく活動を展開した。例えば、在日朝鮮人文学者の嚆矢と呼ばれる金達寿（一九一九～一九九七）は、戦後早くも『民主朝鮮』の編集者となって「教育問題」や「朝鮮解放」の特集号を発刊するなどして、民族運動に取り組んだ。詩人の許南麒（一九一八～一九八八）も、『民主朝鮮』や『新日本文学』

を中心に活動を広げて、一九四六年には川口朝聯小学校の校長に就任、一九五一年には神奈川朝鮮人中学校の教務主任となって、在日朝鮮人の民族教育に関わっている。

一方、張は戦後早くも執筆活動を再開したが、その内容において、前述した在日朝鮮人作家達とは対照的であった。

林浩治[1]は、終戦直後に書かれた『孤児たち』（萬里閣、一九四六）について、他の在日朝鮮人文学者とは正反対に、「張赫宙は空襲で痛めつけられた日本人を悲しんでいる」と述べ、短編集である『ひとの善さと悪さと』（丹頂書房、一九四七）については、「朝鮮人が主な役割を果たしていない短編も多いし、そうでなくても同胞に対する共感や、民族文化にたいする誇りは存在しない」と指摘している。

一方、金鶴童[2]はこの二冊の作品について「張が朝鮮民族ではない日本人たちの終戦直後の惨状を描き出したと言っても、素直な作家的感受性を取り戻した結果の産物であることは認められる」と述べ、戦後における作家のヒューマニスト的な姿勢を評価している。しかし、このような見解は、そのような作品しか書くことができなかった張の特殊な立場についてまでは言及していない。

張は、一九四九年九月八日に朝連が解散させられると、戦後に在日朝鮮人の間で生起した一連の事件に触れた文章を発表する。その中で「在日朝鮮人批判」（『世界春秋』、一九四九・一二）は、在日朝鮮人民族団体の成立と朝連解散までの成り行きを辿りながら、戦後、自ら朝鮮や朝鮮人に対する著作の執筆を避けていた理由について、次のように述べている。

> 終戦後の言論の自由の中で、私は朝鮮に関係ある小説を殆ど書いていない。しかも、一番沢山感じ、言いたかつたのは、やはり朝鮮である。しかし、その多くは批判であり不満な感想ばかりで、その文章が活字になつた後の波紋を予想すると、不安になり恐怖を感じた。私は筆を折り、朝鮮に眼をふさぎ、口を緘し、おざなりのことしか云わなくなつた。

右の引用からわかるように、張は戦後の混沌とした状況のなかで、祖国である朝鮮と日本における在日朝鮮人たちの動向を注意深く観察していた。しかし、そもそも戦前の親日活動によって、在日朝鮮人社会で不遇の位置に置かれていた彼は、それらに対する「不満な感想」を公けにすることで、さらに自らの立場が悪くなることを嫌い、敢えて朝鮮や朝鮮人について書くことを避けていたのである。

このように、戦後における張の文筆活動を考える際に、在日朝鮮人との関わりはきわめて重要な意味を持っていると言わざるを得ない。従って、次節ではまず張が在日朝鮮人（民

族団体）とどのような関わりを持っていたのかを検証していく。

二．在日朝鮮人（民族団体）との関わり

一九四六年七月号の『民主朝鮮』には、戦前から張と関わりを持つ二人の日本人作家の文章が掲載されている。まず、保高徳蔵は「日本で活躍した二人の作家」という文章のなかで、一九三〇年代に張が、民族差別を批判するプロレタリア文学ばりの作品から、風俗描写のエキゾティシズムに傾斜した作品へと、小説の傾向を変えたことについて、「その頃勇敢に所信を発表しつゞけた作家なり批評家は大抵弾圧の波に捲込まれてゐたのであるから、良識もあり熱情もあるが、一面に於いて弱気の張君としては、朝鮮出身といふハンデギ（ママ）ヤツプもあつて、身の保全を考へるならば、かうなるより他に道はない」と述べている。

続いて、石塚友二（「交友関係から」）は、「なるほど張赫宙氏は日本文壇に於てその生国以上の迎へられ方はしたであらう。しかし、それは同氏が祖国を裏切つてのことゝ断ずるのは早計に過ぎるであらう。冀くば、独立朝鮮文化の速かなる復興のために、同氏の如き有能の作家は、これを迎へ入れるに過去の小感情に捉はれざらむことを切に祈るものである」と述べて、戦後にあらためて在日朝鮮人文学者達と張との関わりを促している。

これに対して、編集長である金達寿は「編集室から」のコメントで、次のような謎めいたことを述べている。

> 今月はとくに保高徳蔵氏と石塚友二氏の文章に関連して、同胞張赫宙氏に一言したい。君はわれ〳〵が君をこのやうにみてゐるこれらの文章を「ぼつ」にしないで、掲載したことに対して一つの感じを抱くものと思ふ。しかしわれ〳〵は君のその「感じ」を追求して、われ〳〵の「短所」を繰返さうとは思はないのである。加藤清正の著者野口稔氏、君も新生しなくてはならない。君が久し振りに故国へ帰つたとき、ふたゝびあの笑福旅館[3]に投宿することも出来ないのだから。創建に連載する「民族[4]」の（まだ一回であるが。）率直さには好意を持つ。かんぜんに出直してくれ。健筆を祈る。

この文章の真意を量ることはなかなか難しいが、キーワードとみなされる「新生」という言葉と当時の朝鮮文壇の動向とを結びつけて、考えてみたい。

日本の植民地支配から解放された朝鮮で真っ先に問題されたのは、親日派の処分問題であった。特に朝鮮文壇において、植民地下で筆を折らなかった文学者達は追放、または自己批判を余儀なくされた。同誌の編集部は「朝鮮文壇の動向」において、ソウル（京城）で

創刊された『人民』創刊号の文藝時評の内容を引用しながら、「新生朝鮮の文壇は、まづ民族叛逆的な日本帝国主義の戦争遂行に協力した似而非文学者の追放から、仕事をはじおてゐる」ことを強調して述べている。

このような朝鮮文壇の動向を強調しながら、それとは相反している二人の日本人作家の文章を「ぼつ」にしないで、掲載していることの意味は何だろうか。憶測するならば、それは『民主朝鮮』と言う雑誌の性格と深く関わっているように思われる。そもそも『民主朝鮮』は、「朝鮮人に対する日本人の誤った認識を正す」[5]という趣旨で刊行された雑誌であった。つまり、編集長の金は、張に対する日本人の誤った認識に対して新生朝鮮文壇の動向を強調しながら、張の反民族的な文筆活動に対する朝鮮民族の怒りは、そう簡単に消えるものではないことに言及していたのではないか。

終戦直後の張は、新日本文学会への加盟を試みたり[6]、朝連や民団を訪ねたりするなどして、自分の活躍場所を模索していた。そのような張の行動を、在日朝鮮人の動向に通じた金も知っていたはずである。金は、張の親日行為に理解を示している日本人の文章を掲載することで張が抱くかも知れない希望をあらためて否定しながら、自民族を裏切って日本の侵略戦争に直接手を貸した彼が、自分の過ちを深く反省して新しく生まれ変わること（「新生」）を求めたのであろう。そして、その前提としたのは、「民族」のように植民地下における自らの卑屈さを率直に描くこと、つまり、文学者としての自己批判にほかならない。人間の真実を描くことが生命である文学者にとって、自己批判は再出発の源泉として認識されていたであろう。しかし、他人による強制的な自己批判の要求は、張にとって脅迫になりかねなかった。

張の自伝的作品「脅迫」[7]（『新潮』、一九五三・三）には、朝連を訪れた「私」（長光星）が、そこの学生らに自己批判を求められる場面がある。「私」には、彼らの発言に対する多くの言い分があった。しかし、それはあくまでも植民地時代に「私」が置かれていた個人的な境遇に関わっている。それを理由にあげたところで、彼らが求めている政治的な立場に対する答えにはならないであろうし、かえって彼らの激情を煽る結果を招いて、暴力に繋がる恐れもある。そこで「私」は、自分の考えを自由に表現できないことに苛立ち、相手（在日朝鮮人）に対して強い不満と反抗心を抱いたのであった。おそらく、このような主人公の苛立ちと暴力に対する不安は、当時における作者張赫宙の内面の反映であった。

では、戦後間もない時期において、張と在日朝鮮人民族団体（朝連、民団）は、実際にどのような関わりを持っていただろうか。張の「われわれの立場から」（『日本週報』、一九

四九・九）によると、彼が朝連の事務局をはじめて訪れたのは、一九四五年一〇月頃である。朝連が一〇月一五日に結成されているので、結成してすぐの訪問であったことがわかる。しかし、前述した「脅迫」の内容からも窺えるように、張は朝連から歓迎される存在ではなかった。

しかし、ここで注目したいのは、戦後間もない時期における朝連の親日派に対する認識には、前述した金（達寿）の発言からも窺えるように、決して過去の親日行為を糾弾するばかりではなく、「悪質の者以外は、過去を問わず、ただ今後を問題にする」[8]という、ある意味で寛容な視点も含まれていたことである。つまり、張の「新生」に向ける努力次第によっては、朝連との関係を改善できる糸口はあった。しかし、張は敢えてその道を選ばなかった。いや、戦後間もない時期は、自分の活躍の場を求めて、いったんはその道に進もうとしたが、祖国や民族に受け入れられるまでの大変さを体験し、いち早くあきらめたと言わざるをえない。ちなみに「脅迫」によると、張は一時期、埼玉における朝連分会の顧問として仕事をしていたとも見られるが、その事実については確認ができない。

一方、張は民団の前身である「新朝鮮建設同盟」を訪問して、後に民団の団長になる朴烈と会うなど、民団系の人とも戦後早い時期から関わりを持っていた。そして『民団新聞』の編集顧問として創刊（一九四七・二・二一）から関わって、同年の一一月までは仕事をしていたと見られる。[9]しかし、民団での仕事は張にとって苦痛であった。張は署名入りの記事を書くことができず、編集顧問としての仕事以外には、団員との関わりもあまりなかったようである。

「脅迫」は、民団との決別について、紙面の余白埋めに「幽霊名」で朝鮮の歴史を唯物史観風の筆づかいで書いたことが「団員の忌諱」に触れて、そのような保守主義にはついていけないと思い、編集室を立退いた経緯を伝えている。これを裏付けるように、「という筆名で書かれた「朝鮮歴史講座―第一章　上古史」が、『民団新聞』（一九四七・二・二八）に掲載されている。そして、著者は上古史を第一章とし、連載するつもりであったと見られるが、実際には一回で打ち切りになっている。

この他、宋恵媛（「在日朝鮮人文学史―一九四五年～一九七〇年―韓国系団体・グループの文化・文学活動―」『在日朝鮮人史研究第三四号』、二〇〇四・一〇）によると、『民団新聞』の創刊号から数回にわたって連載された「四十年の嵐」と『自由朝鮮』に掲載された「妻」の作者「黒丘」は、張赫宙のことであるという。これらの作品は、張が民団と関わりを持っていた短い時期に書かれたもので、ともに植民地期に行われた民族的蔑視と差別

問題について書いている。資料不足のため、全ての内容を確認することはできないが、[10]実際の妻である野口佳子と同居し始めた頃（一九三七年）の体験をもとに書いたと見られる「妻」には、民族的差別に対する張の屈折した様子があらわれている。

主人公の昌五は、妻と別れさせようと企む叔父の行動に、民族上の差別感と苛立ちを感じていた。そして、それらを発散できるはけ口が見つからないまま、自己卑下から自己嫌悪に陥っていた。つまり、彼にとって差別対象になっている朝鮮民族は、劣等感を呼び起こす否定的な価値付けの対象であり、民族間に起こる差別問題は、ただ自分を不幸にさせる要因としか考えられないのであった。

張は、植民地下の体験をもとに「妻」を書いたと思われるが、主人公の怒りは支配者である日本にというより、むしろ朝鮮人である自分に向けられている。そして、このような朝鮮人であることの後ろめたさは、作品上だけではなく実際の民団との関わりにも現れていた。朝連と違って、「過去はとも角、これから祖国建設に盡して下さい」[11]と、自分を受け入れてくれた民団での仕事は、金銭的に好条件であったというだけではなく、再出発できるチャンスでもあった。しかし、親日文学者という前歴によって、在日朝鮮人社会では何ら発言権を持つことができなかった張は、表に出て活動することもできず、そのような自分の立場に不満を抱いていたと見られる。そのような不満は、団長以下幹部が日課のように愛国歌を合唱し、国旗に敬礼し、母国の再建を祈って黙祷するなどの朝礼の儀式を日本の真似のように思うなど、在日朝鮮人の言動の全てに至るものであった。

前述したように、このような不満と反抗心は、暴力的な仕返しに対する恐怖とともに、戦後間もない時期に朝鮮・朝鮮人に対する言論を自ら封じる理由になったと考えられる。しかし、阪神教育闘争[12]を初めとする在日朝鮮人と日本警察の衝突と、朝連が解散させられたことに伴って、日本のマスコミによる朝鮮人攻撃が始まると、張の在日朝鮮人に対する不満は、そのはけ口を与えられるようになる。

三　マスコミによる朝鮮人攻撃と張赫宙

張が、戦後における在日朝鮮人の言動に対する批判的な文章を初めて書いたのは、『民論』に掲載した「民族随想」（一九四八・一〇）である。この文章が掲載される約五ヶ月前に神戸では、阪神教育闘争が起こり、多くの在日朝鮮人が検挙された。張は、この事件を含む朝鮮人の行動について、「気短かで、忍耐に乏しく、附和電同（ママ）するといわれた、わが民族の

欠陥を、わが同胞は自ら證明してしまつた」と述べている。そして、『民論』の編集部は「編集者のことば」で、「張赫宙氏が久しぶりに筆をとつた。母国朝鮮を知りわが日本を知る同氏の今後の筆に期待する」とコメントを付けて、戦後三年あまりの沈黙を破り、自民族のことを語り始めた彼の今後の活躍に期待した。この期待どおりに、張は朝連が解散した時から、戦後在日朝鮮人の行動に対する見解を示す一連の文章[13]を書いたが、その多くは批判的な内容であった。そして、それらの文章は、主に朝連が解散になった一九四九年と、日本共産党が武力闘争を宣言して、その担い手として活動した在日朝鮮人（朝連系）に対する取締りが激しくなった一九五二年に、集中している。

この中で、朝連解散直後に書いた「在日朝鮮人批判」を見ると、張は「民族の性格」を「政治屋が多すぎる」「怒つては爆発する」とみなし、在日朝鮮人（民族団体）の犯罪や思想問題を批判的に述べている。戦後の関わりによる不満が集約されているように見られる、この「在日朝鮮人批判」は、たとえば同月の『世界評論』に掲載され、朝連が「生活の指導・改善の運動」といった民族団体として果して来た役割を高く評価していた金達寿の「在日朝鮮人の運命」などとは、まるで対照的であった。

このような張の「在日朝鮮人批判」に対する反論は、とても激しいものであった。たとえば、姜魏堂（「朝連の思い出―張赫宙氏の所論を駁す」『民主朝鮮』、一九五〇・五）は、「日本の読者に与える氏の「主観的な見方」の影響を恐れる」と言った上で、張の在日朝鮮人に対する所論の殆どが短見に過ぎないことを指摘している。

また、一路옹（おん）（「犬野郎張赫宙は何を吠えたのか」『解放新聞』、一九四九・一二・三＊韓国語）は、張赫宙が在日朝鮮人に対する悪宣伝をしているとし、その理由について「これは、最近毎日のようにラジオや新聞で宣伝される日本政府の朝鮮人対策遂行を効果的に推進するのに、吉田の演説や殖田法務総裁の説明だけでは不足しているからだ。そこに朝鮮人の立場からそれに賛成して立証する方法が必要になるのだ。自称朝鮮人大家の一文は、無知な群衆の耳目を惑わすのに効果が百パーセントであるため、この役を張が担当させられたのだ」と述べている。

この二人の発言に共通するのは、「在日朝鮮人批判」に書かれているマイナス的な朝鮮人像は、親日派の張赫宙による「主観的な見方」に過ぎず、それを全ての在日朝鮮人のことであるかのように悪宣伝をした背景には、当時における政治とマスコミの戦略が強く働いていたという認識である。では、当時の一般的な在日朝鮮人像とは、いったいどのようなものであっただろうか。それを考えるうえで、「在日朝鮮人の生活と意見」（『中央公論』、

一九五二・九）という座談会の内容は示唆的である。そこで大宅壮一は、「朝鮮人と共産主義、朝鮮人と火焔ビン、朝鮮人とやみ、朝鮮人と犯罪というふうに、常に密接に結びつけて印象され、強く頭に入っている、これを解きほぐす仕事はたいへんですよ」と述べている。これは、一九五二年の時点で既に「不法悪質な第三国人」としての朝鮮人の表象が定着していたことを示す一例である。このような朝鮮人による不法行為は、朝鮮人によって自発的になされる場合もあったが、日本共産党の所謂軍事活動の一環として、その指導を受けて行われる場合も多かったという。(14)

終戦後、徳田球一、志賀義雄、宮本顕治らの釈放によって復活した日本共産党は、占領下の「平和革命論」がコミンフォルムや中国共産党から批判を受けると、「民族の独立のために全人民諸君に訴う」（一九五〇・三・二二）を発表して、占領軍と対決していくことを公けにした。こうして、第四回全国協議会（一九五一・二）では、「軍事方針」が正式に決定され、第五回全国協議会（一九五一・一〇）以後、それはさらにエスカレートして、五二年五月の「血のメーデー事件」、六月の「吹田・枚方事件」、七月の「大須事件」などで頂点に達していく。在日朝鮮人もこの「軍事方針」の先頭に立って実力闘争に突き進んでおり、結局、日本社会のなかでより孤立させられることになったと言える。

この時期になると、日本のマスコミも一斉に在日朝鮮人の暴力事件を扱うようになっていた。たとえば『読売新聞』のデータベース（「ヨミダス歴史館」）を検索すると、一九五二年の朝鮮人の「犯罪・事件」の記事は、五月に二六件、六月に二六件、七月に一六件が見られる。その内容は、たとえば「大阪で49名検挙／5・30記念日デモ」（五・三一）、「松本で警官隊と乱闘　朝鮮人ら裁判所襲う／長野県」（六・二八）、「資金獲得が狙い　北朝鮮系の上野襲撃事件」（七・一五）など、各地における朝鮮人のデモや暴行事件を報じるものであった。

さらに、『日本週報』の一九五二年七月二五日号は、在日朝鮮人問題を特集している。表紙には、大きな見出しで「朝鮮人虐殺の愚を招くな」と書かれ、その「虐殺」の字は赤く印刷されている。また、内容をみると、共産党を除く各党の代弁者が、日本各地において北鮮系朝鮮人の暴力事件が頻発していることを強調して、弾圧も強制送還も当然であると、口をそろえて言っている。そして、それに調子を合わせて、朝鮮人の自粛を説いていたのが、張赫宙であった。張は「元朝連系同胞に訴える」の中で、「「日本」は朝鮮人の日本でないということ。「日本」は朝鮮人にとつて外国である」ことを強調して述べている。さらに、関東大震災当時の恐怖すべき「鮮人虐殺」が再び繰り返されれば、何の罪もない一般

同胞に災いが及ぶであろうという懸念を説いていた。

なお、同誌には張以外に、当時民団の顧問格として働いていた権逸も、「人として恥しからぬ態度をもて」という一文をよせていた。権は、民団の立場を踏まえて左翼系朝鮮人の自制を求める一方、在日朝鮮人の大部分が食べていけないという現実、すなわち失業問題を含んだ「生活の問題」こそが在日朝鮮人問題の核心になっていることを強調して述べている。これに比べると、張の「元朝連系同胞に訴える」は、朝鮮人問題のわかりやすい現象として浮かび上がっている治安の面だけを大きく捉えて、在日朝鮮人の行動を糾弾していたとも言える。

このような張に対して、伊豆公夫（「在日朝鮮人の運命」『解放新聞』、一九五二・八・九）は、「これは全く事実をゆがめ、日本人と朝鮮人のあいだを離間し、あわよくば、日本人に「対鮮自警隊」をつくらせ、大震災の悲劇をくりかえさせようとする陰謀である」と言い、「張赫宙氏の言っていることは、朝鮮人でもない、日本人でもない権力者にへつらい、その下で尾をふるあわれな犬の姿だ」と非難した。伊豆の発言からは、マスコミの報道にのって、朝鮮人の自粛を無条件に要求している張に対する怒りが感じられる。確かに、張の発言には、自分の体験の範囲に限定された「主観的な見方」が多く見られる。つまり、事件の現象面を追うばかりで、その原因となる朝鮮人の生活と地位に対する洞察が欠けていた。

当時の在日朝鮮人は、祖国が戦争状態にあるという理由から、日本に留まった人が多かった。そのような彼らにとって、日本国内における生活と法的地位の確保は、自らの生存権にかかわる問題であった。在日朝鮮人の多くが、朝連や民団に属して民族運動を展開したのも、このような生存権の危機を感じたからであったと言える。そのような在日朝鮮人にとって、公けに朝鮮人の犯罪や思想問題を並べて批判的に述べる張の行動は、マイナス的朝鮮人像を日本人の読者に印象づける危険性を含んでいたのである。

このように、朝鮮人でありながら、日本人の伊豆よりも朝鮮人に対する理解が欠けていたと言ってよい張に対して、許南麒[15]は、「彼は同民族でも同胞でもなく、かえってアメリカ人やイギリス人などよりも、朝鮮を語る場合適任者でないとも言える存在である」と述べた。そして、朝鮮の心を持っていない張が、朝鮮或いは朝鮮人に対する文章を書くことを強く批判しながら、彼の文章が日本読者に与える悪影響を憂慮する一方、『日本週報』のように、それを利用している一部の「商業ジャーナリズム」をも批判した。

確かに、『日本週報』の編集部は、張の文章に「民族のこころを知るものは、やはり同民

族より確かなものはないともいえよう。（中略）同胞によせる両氏（筆者：張赫宙と権逸のこと）の切々な訴えは、われわれ日本国民にとつても、心うつものがあろう」と言う飾り文句を付けて、読者を強引に説得しようとしていた。

さらに、『読売新聞』に発表された「朝鮮同胞に告ぐ」（一九五二・七・一五）には、「これは「一部在日鮮人が他人の国で騒ぐのはいたずらに反感をそゝるばかりだ」と日鮮平和を希う一人の朝鮮人の立場から訴えた切実な叫びである」という飾り文句が、「他人の国で騒ぐな　逆効果を生むテロ行為」と言う、刺激的な見出しと共に添えられていた。

このような例を見ると、当時のマスコミが張を表に出して利用していた部分も少なくなかったと言える。そして、張がたとえ「一般在留同胞を愛し、同胞の身に災いなかれ」と祈りつつ、一連の文章を書いていたのだとしても、これを利用するマスコミによって、その多くは朝鮮人のマイナスイメージに結びつけられ、そのことを憂慮する在日朝鮮人との関係は、ますます悪化していったのであった。

四．心の相剋とその行方

張は、「脅迫」の主人公を通して、在日朝鮮人に対する批判的な文章を書く時に、朝鮮人としての「愛族心」はあったものの、一方において在日朝鮮人民族団体との関わりの中で感じた不満と反抗心、或いは「日本側に立つのだといふ心」があり、そのような「二重の心理」が曖昧になって、「愛族心」が通じなかったと言っている。つまり、彼は民族に自らを同一化することができないまま、朝鮮人のことを書いていたということである。

このような張の心理状態をいち早く察知していたのは、数百年前に日本に定住したという祖先をもつ、姜魏堂（「朝連の思い出―張赫宙氏の所論を駁す―」『民主朝鮮』、一九五〇・五）であろう。姜は、前述した張の「在日朝鮮人批判」について、「「同族を愛すればこそ」の悪まれ口であることが、私にはよくわかる」と言い、日本人として生まれた自分と親日家の張との共通性を認める反面、「にも拘らず私は、そうした自分の感情とは別に厳存する「もう一人の自分」――単なる現象だけから性急な結論を作つて偉そうな口を利くことは、そのもう一人の私が許さないその「もう一人の自分」が、氏と私とではまるで違うようだ」と言っている。

前述した張の「愛族心」を「朝鮮の心」として見た場合、「日本側に立つのだといふ心」は、「日本の心」としてあらわすことが出来る。日本人として生まれた姜は、「日本の心」

を持つ親日派の張とは近似する面があることは認めるものの、そうした自分の感情とは別に現存する「もう一人の自分」、すなわち「朝鮮の心」については、張との相違をはっきりさせている。

この「朝鮮の心」と「日本の心」の錯綜した関係については、戦前から戦後に至る張の生涯の全体を通して、考察すべきであることは言うまでもない。そして、ここで戦後のみに注目した場合でも、張の「朝鮮の心」は、極めて屈折した一面を持っていた。それは、前述した「妻」の主人公がそうであったように、戦前から抱いていた朝鮮人としての後ろめたさ（劣等感）に起因している。さらに、自分の親日行為を批判する在日朝鮮人への不満と反抗心は、彼の「朝鮮の心」を覆い隠して「日本の心」への決着を促すものであったと言える。そして、その帰結が、帰化であったと言ってよい。

『読売新聞』（一九五二・一〇・一二）に掲載された張の帰化の記事は、「浦和発」が「全国版」に、「南北両鮮に容れられず　滞日廿年宿願の手続き」の見出しと共に掲載された。そこでは、張が『嗚呼朝鮮』（新潮社、一九五二）を通して韓国政府の腐敗を暴露したことが問題になって、韓国では「民族反逆者」として逮捕状まで出る一方、『嗚呼朝鮮』の取材に交付されたパスポートも取消される運命になったことが、まず強調されている。そして、そこには、張の談話と見られる一文が含まれている。それは、「日本人になろうとして日本の文壇で長く活躍していた私です」と始まって、「明治の昔日本を愛し松江に住みついたイギリスの作家小泉八雲のようにこれからも日本文壇で大いに働きたいと思っています」と締めくくられている。

『読売新聞』は、朝鮮民族にとって危機的な時期に民族を離れる知識人に興味を持ち、さらに読者の関心を引くために、帰化の状況と張の抱負を大きく報じたのであろう。しかし、この記事は当時張に刻みつけられていた「民族反逆者」としてのレッテルを、一層強く浮かび上がらせた。それは、彼の帰化が朝鮮戦争のさなかに行われたこととも無関係ではない。

朝鮮戦争は、一九五〇年六月二五日に始まって、一九五三年七月二七日になって、やっと休戦協定が成立した。三年におよぶ戦争の結果は悲惨なもので、開戦当時朝鮮の全人口は約三千万だったが、戦争で失われた人命は、うち三百万とも四百万ともいわれる。張は、『毎日新聞』と『婦人倶楽部』の後援で、二度にわたり朝鮮に赴いて、その紀行文を日本のマスコミに寄せていた。しかし、その内容は、当時日本に伝えられていなかった戦争の現実を、客観的に追うものが多かった。特に、一回目の取材をもとに書いた『嗚呼朝鮮』

には、韓国政府の腐敗を暴露した部分（国民防衛軍事件など）[16]があって、朝鮮人の間では、それが祖国を売り物にしたとみなされ、彼に対する憎しみが増していたのである。

このような状況のなかで、張の立場をより窮屈にしたのは、日本国内で施行された外国人登録法であったと考えられる。サンフランシスコ平和条約（一九五二・四・二八）の発効によって、占領期までは日本国籍をもつとされた在日朝鮮人は、一律に外国人としての管理に移行させられた。このことは、祖国と同民族に憎まれる存在であった張にとって、自分の立場を守ってくれる盾（日本）を失ったことと同然であったはずである。このような法的地位の変化によって、ありうべき強制召還の恐怖が、長い間日韓の狭間で揺れ動いた心の相剋にピリオドをうったのであろう。そして、張は外国人登録法の施行から約五ヶ月後に帰化して、野口稔（筆名：野口赫宙）となったのである。

おわりに

ここまで、戦後間もない時期における張赫宙と在日朝鮮人との関わりを検証し、その関わりのなかで抱いた不満と反抗心が、主に一九四九年と一九五二年に活字化されていたことを確認した。この時期には、吉田政府による在日朝鮮人の取締りが厳しくなっており、マスコミもほとんど取り締まる側の立場に立って、朝鮮人が関わった事件を、犯罪として大きく報じていた。このようなマスコミの朝鮮人攻撃に、自らの不満と反抗心を重ねて手助けをしたのが、張赫宙であった。張がマスコミを通して主に語った内容は、戦後在日朝鮮人の暴力と思想の問題を批判的に論じて、朝鮮人の無条件の自粛を求めるものであった。すなわち、マスコミの側からすれば、朝鮮人インテリである張を招いたことによって、在日朝鮮人に対する取締りに根拠を与える効果が得られたことになる。

張は、そのような文章を書いたのは「同胞の身に災いなかれ」という「朝鮮の心」もあったと言う。しかし、戦前から抱いていた朝鮮人としての後ろめたさ（劣等感）、或いは戦後の関わりによる在日朝鮮人に対する不満と反抗心が心の壁になって、結局張には、自民族に自らを完全に同一化することはできなかったということができる。かくして、自民族との連帯感を保つことができなかった彼は、民族の異邦人としての自分の存在を確認した果てに、「日本の心」（帰化）に帰着するしか他に道はなかったのであろう。

しかし、「当然の帰結」として受け止めていた帰化は、心の葛藤の終焉ではなかった。張の自伝的短編「脅迫」をみると、帰化後の「私」は安定した存在としてではなく、さらなる

内的不安を抱いた存在として描かれている。その内的不安の深層を把握することは、帰化前後における張のあり様を考えるさいに欠かせないといえよう。

次章では、張の自伝的小説「脅迫」の作品分析を通して、帰化前後における張赫宙を考えてみたい。

注

(1)林浩治『戦後非日文学論（新幹社、一九九七）

(2)金鶴童「張赫宙の日本語作品と民族」（国学資料院、二〇〇八＊韓国語）

(3)一九一一年に日本人がソウル南大門の近く（南山の入口）に開業した旅館。植民地期はもちろん、一九六〇年代まで、ソウルの名物旅館として知られた。ここで金は、いわばソウルへの関門ともいうべき場所にあるこの旅館に、張がもはや昔のように投宿できない、つまり、錦を飾って祖国に帰られる立場ではないことを、強調していたと考えられる。

(4)張赫宙「民族」（『創建』、四～六月・連載三回で中絶）

(5)金達寿「雑誌『民主朝鮮』のころ」（『李刊三千里』、一九八六・冬）

(6)許南麒の「売族者の運命」（『平和』、一九五二・一二）によると、一九四六、七年頃の張は「新日本文学会に加盟しようと思ったが、断られた」としょんぼりしていたという。

(7)「脅迫」は小説の形式を借りているが、殆ど実話と同様な内容である。従って、本章では主人公の発言や行動が事実であるかどうかを、本作の内容に照らして確認しながら、終戦直後における張の心理状況を分析した。

(8)張赫宙「民族随想」（『民論』、一九四八・一〇）

(9)張は、一九四九年九月に書いた「われわれの立場から」（『日本週報』）のなかで、『民団新聞』の編集顧問をしていた頃を「一昨年十一月」と記している。

(10)黒丘（張赫宙）作「四十年の嵐」は、『民団新聞』の創刊号（一九四七・二・二一）から連載されており、八回（一九四七・六・三〇）までは確認済みであるが、いつまで連載されたのかは不明。また「妻」は、『自由朝鮮』の創刊号から四回（完）にわけて連載されたと見られる。現在、三回と四回（一九四七・九、一〇）は掲載を確認したが、一、二回は未確認。ちなみに、メリーランド大学で編纂した『占領軍検閲雑誌目録・解題』（雄松堂書店、一九八二）によると、『自由朝鮮』の創刊号である一巻は、一九四六年八月に、二号は一九四六年九月に刊行されている。

(11)張赫宙「在日朝鮮人批判」（『世界春秋』、一九四九・一二）

（12）一九四八年四月一四日から二六日にかけて大阪府と兵庫県で発生した在日朝鮮人と日本共産党による民族教育闘争。阪神教育事件とも呼ばれる。

（13）・「われわれの立場から」（『日本週報』、一九四九・九）

・「在日朝鮮人批判」（『世界春秋』、一九四九・一二）

・「朝鮮人の騒擾について」（『新大阪』、一九五二・七・二）

・「朝鮮同胞に告ぐ」（『読売新聞』、一九五二・七・一五）

・「元朝連系同胞に訴える」（『日本週報』、一九五二・七）

・「朝鮮人の反省」（『東京新聞』、一九五二・七・二八、二九、三〇）

（14）篠崎平治「最近における在日朝鮮人の不法行為の発生状況について」（『警察時報』、一九五二・一〇）

（15）注（6）と同じ。

（16）朝鮮戦争中の一九五一年一月に、韓国の国民防衛軍司令部の幹部らが、国民防衛軍に供給された軍事物資や兵糧米などを横領した事件。張は『嗚呼朝鮮』にこの事件を描いたことによって、在日朝鮮人から、いっそう批判された。

第三章　実存的不安をめぐる作者の軌跡―張赫宙「脅迫」論

はじめに

「脅迫」（『新潮』、一九五三・三）は、終戦直後から帰化までの経緯を書きおろした自伝的短編である。張の分身とみなされる「私」（長光星）は、在日朝鮮人から帰化を糾弾する脅迫状を受け取ったことをきっかけに、このような状況を招いた理由を、戦前からの記憶をたどりながら語っていく。その中には、在日朝鮮人民族団体（朝連、民団）との関わりをはじめ、彼が「親日」的とみなされる立場や帰化を選んだ内的必然なども、かなり詳しく語られている。

白川豊[1]は、「脅迫」と「張赫宙の実際の経歴を対比してみると時間系列的にはやや再構成しているものの、ほとんど実話的な作品である」としたうえで、「張はもともと自己弁明を小説の形で書く作家であるが、この作品もその一つの典型である」と述べている。白川は「脅迫」を「自己弁明」の作品であるとみなしているが、本作における「私」の自己認識からは、他者に向けた単なる「自己弁明」にとどまらない、内面的な深まりが感じられる。「私」は、周りの環境に揺れ動く不安定な存在として描かれている。このような「私」の自己認識の過程と、不安感の深層を把握することは、当時における張（のあり様）を考える際に欠かせないと考える。

本章では、主人公「私」と張の自己認識の過程を重ねみることを通じて、終戦直後から「帰化」に至るまでの自己認識のなかで現実的な不安がより深い実存的不安に変わっていく過程を考察する。加えて、その過程の果てに逢着した「民族」「国家」の壁を乗り越えたいという意図が、「脅迫」執筆前後の時期における張の仕事に、どのように反映されたのかということも考えてみたい。

一．現実的不安と内的不安

張赫宙は、植民地期に日本文壇にデビューした最初の朝鮮人作家である。[2]彼は、その動機について「朝鮮の民族ほど悲惨な民族は世界にも少いでせう。（中略）私はこの実状をどうかして世界に訴へたい。それには朝鮮語では範囲が狭小である。日本語はその点、外国に翻訳される機会も多いから、どうしても日本の文壇に出なくてはならないと思ひました。」

と述べた。この言葉のとおり、「餓鬼道」を含む彼の初期作品は、主に植民地期に様々な迫害を受けていた朝鮮人の悲惨な生活を描いており、その一部は、エスペラント語や中国語に翻訳された。[3]

しかし、日本プロレタリア文学運動の解体と転向の時代を迎えるや、張は、「私の所属してゐる民族の種々の境遇、それに基いて起る種々の現象」を描くことより、「個人の生存欲に基いて起る各種の本能」を描くことの方が「より高度」な芸術世界であると公言し、[4]「餓鬼道」の世界と決別した。その後、彼は、日中戦争開戦の翌々年である一九三九年二月、「朝鮮の知識人に訴ふ」を書いて、当時、南総督府が打ち出していた「内鮮一体」政策に賛同する見解を示した。そして、一九四〇年以後は、次々と日本の植民地政策に迎合する作品を発表し、終戦後に帰化して野口稔（筆名：野口赫宙）になった。

「脅迫」は、右のような前歴を持つ「私」が、終戦後、在日朝鮮人民族団体との関わりのなかで、自分の異質さを自覚し、帰化に至るまでを描いている。

張は、朝連の解散（一九四九・九・八）に対する見解を述べた「在日朝鮮人批判」（『世界春秋』、一九四九・一二）のなかで、「親日家」の自分が、終戦直後に朝連に狙われて「被害を妄想」するまでになったと明かしたうえで「その混乱した姿を書けば、立派な小説になる。何れ書かれる時期もあろう」と述べている。即ち、当時の自分の「混乱した姿」をモチーフにした小説の執筆を意図していたのである。しかし、戦前における親日的な発言や創作によって、在日朝鮮人社会のなかで不遇の位置に置かれていた彼は、自分の感想を自由に表現することができなかった。そのような張が、帰化を期にしてようやく「混乱した姿」を描く「脅迫」を執筆したのである。そこには、どのような思惑があっただろうか。

「脅迫」の冒頭部で、帰化した「私」は、「お前は実に民族の裏切者だ、もう我慢出来ないのでお前を消すことに決意した」という「暗殺通告状」をもらい、恐怖に襲われて、思わず身震いをする。そして、しばらく家を離れることを決め、温泉に向かう途中で「朝鮮訛り」の乗客を「刺客」と錯覚するなど、暗殺の不安に怯えるのである。

しかし、このような差し迫った不安は、実は小説の後半部では、大分軽減されている。結末で温泉に到着した「私」は、「サクヤモキヨウモイジ　ヨウナシ」という妻の「電報」を読み聞かされ、「やれ〳〵」と思いながら熱いお湯に体を沈めている。

「脅迫」は、まず、脅迫されるという状況設定によって、「私」の現実的不安を表出している。これは、実際に帰化後、それまでよりさらに多くの脅迫状を受けるようになった、張の不安な心理を作品にあらわしたと言える。しかし、彼が持っている不安はそれだけで

はなかった。

「脅迫」によると、「私」は、一時期、『民団新聞』の編集顧問として携わっていた。「私」が民族意識が濃厚である民団での仕事を受け入れたのは、何かの理念や思想を持ってのことではなかった。もっと具体的に言うと、民団は、週三回で最低生活費が得られる好条件の「職場」であり、「叛逆者」の罪に問われる立場の改善に役立つので、その仕事を受け入れたのである。つまり、「私」は「反民族行為処罰法」[5]（「脅迫」のなかでは「叛逆者法」と書いている）の制定によって、処罰される危機から逃れるために、やむをえず民団の仕事を受け入れたことになる。

しかし、実際に張赫宙が民団で仕事をしていたのは、一九四七年のことで、朝鮮で「反民族行為処罰法」が公布されたのは、その約一年後の一九四八年九月二二日であった。つまり、「脅迫」では、「反民族行為処罰法」→「民団での仕事」の順になっているが、実は「民団での仕事」→「反民族行為処罰法」の順であったのである。実際、張は、アナーキストの友人に連れられて、民団の前身である新朝鮮建設同盟を訪問（一九四六年の三月頃と推定される）して、後に民団初代団長となる朴烈と会うなど、民団系の人々とは戦後早い時期から関わりを持っていた。そして『民団新聞』の編集顧問として関わったのは、創刊（一九四七・二・二一）からであり、一九四七年一一月までは仕事をしていたと見られる。[6]すなわち、「反民族行為処罰法」が制定された頃には、張と民団との関わりは既に終わっていたのである。

この事実関係と照らし合わせて考えると、民団での仕事と「反民族行為処罰法」の間の関連性は希薄になる。もちろん、「反民族行為処罰法」が制定される以前からも、在日朝鮮人社会の中では朝連が中心となって、「親日派狩り」[7]が行われていた。

しかし、「張赫宙は親日家だからいけない」といった朝連と違って、民団の団長である朴烈は、「過去はとも角、これから祖国建設に盡して下さい」と、温かく彼を受け入れてくれた。[8]終戦直後の張は、「朝鮮の文学のために大いに働きたい」[9]と望んでいたので、民団の仕事に携わるようになった動機を敢えて言うなら、解放を迎えて、朝鮮あるいは朝鮮文壇との関係の足場をもつためであった可能性が高い。にも関わらず、「脅迫」において、「反民族行為処罰法」と関連付けて、民団に関わるようになった状況を説明したのは、読者に知られたくない内的不安があったからであると考えられる。

この内的不安は、「脅迫」の冒頭部に現れている現実的不安とも関連性が希薄である。何故なら、暗殺の現実的不安はその恐れる対象を在日朝鮮人に限定しているからである。在

日朝鮮人（民族団体）と「私」の葛藤の原点は、戦前における親日活動にあった。さらに、朝鮮戦争の最中に祖国を捨て、帰化の道を選んだことが、身辺の危機を脅かす現在の状況を招いたのである。

このような在日朝鮮人との関係からだけ見るならば、民団で仕事をするようになった過去の記憶を変える必要はなかったと思われる。つまり、張には、現実的不安以外に、過去の記憶を歪曲するしかないという内的不安があったのである。では、それはどういうものであっただろうか。

以下、「私」の自己認識過程を通して、その深層に迫ってみたい。

二．自己認識①――「弱気な自分」

「脅迫」の物語は、暗殺予告状を受けた「私」が、温泉に向かう間に、このような状況を招いた理由を求めて、過去の記憶を想起するところから始まっている。そして、想起される過去は、戦前と戦後に分けることができる。では、戦前の「私」はどのように語られているのか、まず「私」の太極旗に対する「観念」から見ておきたい。

終戦直後、朝連事務局に太極旗が誇らしげに立っているのをみて「私」は、「罪を犯したのだといふ観念」があると述べる。その「観念」とは、太極旗にまつわる幼少年期の記憶にかかわる。当時の「私」は、太極旗を恐れていた。いや、太極旗そのものをというより、太極旗を作った者を逮捕すると言って、町の保守派の老人たちを苦しめる憲兵を、そして太極旗を持って万歳を叫んでいる私達に銃口を向ける巡査を恐れていた。「私」は、その後、一時期祖国への思いから三・一独立運動に参加したが、武力鎮圧する巡査に恐怖して、その思いを貫くことができなかった。「私」は、独立運動で最後まで自分の志を貫いた英雄たちを尊敬したが、決して自分は祖国のために命を惜しまぬ愛国者ではなかったのである。このような「私」の家に家宅捜査があって、家中の太極旗が絶えてから、「私」の心から祖国の思いも薄れかけていたのである。

その他、戦前の回想では、菊池寛についても語られている。

大東亜文学会のための準備委員会に集まった時、菊池寛は、朝鮮総督府の高官がいるにも関わらず、「朝鮮人に日本語のことを國語と云はせるなんて可笑しいよ。吾々日本人だつて日本語と云つてるぢやないか」と、とうとうと自分の意見を述べた。「私」は、これに同感して痛快だと思う一方で、困った立場の官史に気兼ねをして、到底菊池のような真似は

できないと思ったのであった。

この太極旗と菊池寛にまつわる二つのエピソードは、主に権力あるいは武力を持つ者に逆らうことができない「弱気な自分」を強調するものである。さらに、このような自己認識は、戦後と現在の「私」にも、続いてあらわれている。

次の引用は、終戦後に朝連分会の人達が、「民族叛逆者で、反動の、日本小説家」の家を壊すと言って、やって来たときの様子である。

災難を覚悟して、待つた。が、恐怖は依然心で渦を巻き、手足の痺れで呼吸が苦しくなつた。それを意識して、自分の臆病がこの時また非常に醜く映つた。

「私」は、「臆病」な存在であると共に、そのような自分を「非常に醜く」思っている。そして、このような自己嫌悪の意識は、現在の「私」にも見られる。

車内は混んでゐた。大勢ゐる乗客の中に、刺客が紛れこんでゐるやうな錯覚が起きた。私はその自分が厭で、もう一度その脅迫状をとり出して読んだ。（中略）これはいやがらせだ、と思ひながら、私は脅えた。やつぱり暫く家を明けたはうがよいと考へた。それにしてもかう脅える自分が醜い。

暗殺予告状を受けた「私」は、大勢いる乗客の中に、刺客が紛れ込んでいるような錯覚を起こし、そのように恐れる自分をやはり「醜い」と思っている。つまり、「弱気」で「臆病」な「私」という自己認識は、戦前から現在まで一貫しているのである。しかし、終戦を期にして「弱気」になる対象が、戦前は、憲兵や巡査であったものが、戦後には在日朝鮮人民族団体に変わっている。そして、戦前の「私」は、憲兵や巡査に対抗できない「弱気な自分」を素直に認めている反面、戦後の「私」は、在日朝鮮人民族団体に立ち向えない自分に強い不満を持ち、自己嫌悪に陥っているのであった。

三．自己認識②――「母国語を持ってない異質な自分」

伊藤氏貴[10]は、「自己像は自分による自分の評価であるにもかかわらず、必ず自己の外部を経由しなければならない」といい、「外部からの問いかけがない限り、我々はわれわれ自身の自己評価を意識しない」と述べている。では、戦後の「私」は、在日朝鮮人達からどのような「問いかけ」を受けていただろうか。

次の引用は、朝連事務局を訪れた時、そこにいた学生との会話である。

「（前略）あんたに民族精神があつたならば、あんたは同胞文人のために、筆を折る

べきであり、日本語強制に反対すべきであつたと思ふ。」「さういふ政治力はわたしにはありません。わたしにはわたしの文学がありました。わたしの文学は日本語で始まつたんです。（後略）」

終戦直後、誇らしげに立っている太極旗に魅かれて、朝連事務局を訪れた「私」は、民族精神の有無と、植民地期の日本語強制に対する責任を問われる。その「問いかけ」に「私」は、「わたしには私の文学がありました。わたしの文学は日本語で始まつたんです」と反論した。

しかし、「私」は、この「日本語で始まつた」「わたしの文学」に自信がなかった。その理由について「私」は、日韓併合前の「赤坊の言葉」を知らないことが、下手な日本語しか書けない原因であると考え、「日本語に対する裏づけ」を取るために「日本人の心」で日本語を語ることにして、戦時中には「短期入営」や「みそぎ」も率先してやったと述べている。つまり、協和運動とか内鮮一体運動という朝鮮人の日本化の観点からすれば、彼の行動は一つの標本のように見られる結果となったのである。しかし、「私」としては、日本語に対する熱意から日本精神を追求するようになっただけで、そのような行動がたまたま当時の植民地政策と一致しただけだということである。

一見、自分勝手な自己合理化の解釈であるが、張が言葉に関して異常な執着心を持っており、日本語の勉強においても、人一倍の努力をしてきたのは、彼の知人の言葉によって確認することができる。[11]

しかし、このような「計画的な、打算的な勉強のし方」や、彼の生き方を理解してくれる者は、誰もいなかった。「私」は、偽りのないことを語っているにも関わらず、それを繰り返し述べることで根拠が薄らぐような錯覚を起こしたり、ありのままの自分が否定される現実に不満と嫌悪感を覚えたりする。そして、朝鮮民族の異質な存在である自分を明らかにする必要性に、ますます迫られるのであった。その一歩として「私」は、「母国語」と「母国」を持っていない自分を強調して、次のように述べている。

ふとそれは彼らが上手に使へる母国語が裏づけになつてゐるからであり、その母国が背景になつてゐるのだとわかつた。日本語と朝鮮語の両方共下手な私が、母国といふものを持たないのが、ふと惨めに見えた。

朝連事務局でリンチの危機から救い出してくれた高正義と再会した「私」は、実に下手な日本語を使うにも関わらず、恥じることもなく堂々とした態度をとっている高と、そのような彼に誠意をもって接客する女性従業員を見ながら、戦前と変わっている状況に戸惑

いを感じている。そして、高と違って確固とした「母国語」と「母国」を持たない自分を、異質な存在として感じる。

高は、「私」を「民族叛逆者」であると罵った朝連事務局の人たちとは違って、「私」の初期作品を高く評価し、いずれ祖国に帰って、朝鮮語文学のために活躍することを望んでくれた人である。「私」は、高の思いやりに「母国の私に対する愛情」を感じるが、彼と自分とでは、祖国を思う感情に隔たりがあることにも気づいていた。高は、朝連を脱退してから新しい団体を作り、祖国建設の情熱に燃えている存在であるが、「私」は日本人でも朝鮮人でもなく、どこにも安住できない消極的な性格の人間にすぎなかった。そのような「私」に、戦後における在日朝鮮人たちの強い民族意識は、旧帝国主義や軍国主義の真似のような利己主義にしか感じられず、考えれば考えるほど混乱をまねくだけで、納得できない異質なものであったのである。

このような異質感から「私」は、突破口を模索するようになるが、徐々に朝鮮人としての民族性について思いなずむより、自分の中にある異質（日本的）な要素を強調していくに至る。

次の引用は、その過程をあらわしている。

私は心臓が縮まり、息が苦しくなる。俺はほんとに民族叛逆者だとその時また自分を非難するやうに見た。（中略）委員長の心には、愛族精神と階級意識が、まつすぐな一本條となつて通つてゐる。偉いと思つた。そして、俺はやつぱし売族者だとはつきり考へた。（中略）それから、あんたはやつぱり日本びいきだなあと歎いた。私はその時、私は単に日本びいきではなくて、日本そのものだ、それは・・・咽喉まで出かかつたが、はたとそれを叩き、ひつこめた。

朝連分会の顧問として仕事をしている間、焼酎密造の取り締まりで、村の朝鮮人が被害を受けたことに申し立てをする場面で、「私」は「民族叛逆者」→「売族者」→「日本そのもの」という順に自己認識を推し進めている。前述した「私」の言葉を借りれば、「私は朝鮮語と日本語と半々の生活」をしており、高や委員長のようなきちんとした「母国語」と「母国」を持たない存在であった。つまり、「私」は、朝鮮人としての「民族性」に欠けていたのである。

「私」が自己認識を推し進めていく過程をみると、「母国語」を持たないという自覚は、朝鮮民族としてのアイデンティティを損なう大きな要因としてあらわれている。しかし、五才まで朝鮮語の環境で育てられ、その後は「朝鮮語と日本語と半々の生活」を送った「私」

にとって、「母国語」（朝鮮語）への道は、初めから閉ざされていたわけではなかった。もちろん、植民地期の言語政策により、日常生活において日本語が強制されていたとしても、朝鮮語は自分の意志によって充分に学習できたはずである。[12]

このことを考えると、「母国語」を持ってないという「私」の自己認識は、そもそも朝鮮民族としてのアイデンティティを獲得しようとする意志の欠如が招いた言い訳にしか聞こえないのである。

四．実存的不安へ

前述したように、朝鮮民族に対する「私」の異質感は、「民族叛逆者」→「売族者」→「日本そのもの」という自己認識の段階を踏んで変化していく。これは、相手（日本）に同質化される（或いはされたい）という「私」の自己陶酔的な意思の表れであるといえる。言い換えれば、「私」は、朝鮮民族にとって異質な存在でしかありえない自分をきっぱりと捨てて、「日本そのもの」として生まれ変わろうとしているのであった。そして、このような意識には、戦後における在日朝鮮人民族団体に対する不満と反発が潜在していた。

「私」は、在日朝鮮人社会のなかで否定される自分を、民族のくびきから解放するために、「弱気な自分」と「母国語を持ってない異質な自分」を強調するという自己合理化をおこない、その結果、帰化を「当然の帰結」として自覚するに至る。しかし、「脅迫」の後半部をみると、帰化は「当然の帰結」であったにも関わらず、「私」は安定した存在としてではなく、さらなる内的不安を抱いた存在として描かれている。この内的不安の実態は、帰化の噂を聞いて駆けつけてきた崔の言葉と高の手紙を通して明らかにされる。

崔は、「私」の帰化が「意外ですな」といい、こんなことをしても何も変わらないことと、「私」が朝連に狙われていることを伝える。さらに、高は、「祖国が動乱最中で最も不幸な時に祖国を捨てることの非人情もさることながら、きのふは韓国人、今日は日本人野口、明日はアメリカ人ジョージになるやうな変節漢では、貴下は日本国民にすら信頼されず愛されないでありませう。第一、如何に帰化が許されても、貴下が朝鮮人であることを否定する者はゐなからうし、日本人は決して自分と同じ日本人だとは思ひませんよ、全く馬鹿なことをしたものですよ。」と、「私」の生き方を責める。

崔は、朝連分会の人で同郷人であることから「私」を災難から救ってくれた。一方、高は朝連事務局のリンチの危機から助けてくれ、後に民団での編集の仕事まで紹介してくれ

た。「私」は、この二人の恩人を「故郷」と「母国」の「愛情」を体現する存在として受け止めていた。しかし、「私」の帰化は、このような「愛情」とも離れることを意味している。さらに、自分を「日本そのもの」であると信じ込んでいたところで、日本人はそのような自分を受け入れてくれるのかという不安感は、「私」の生き方に対する実存的不安を抱かせるのであった。

一見、「脅迫」は、冒頭部から叙述される「暗殺」の現実的不安から、主に「私」と在日朝鮮人民族団体における葛藤関係と、戦前の親日活動に対する「自己弁明」の作品として見られる。しかし、なぜ「自己弁明」をしなければならないのか、あるいは誰に対する「自己弁明」であるのか、ということを考えると、そのような行為の裏にある欲求、あるいはその対象を把握することは、作品に寄せる作家の意図を読み取る端緒になるだろう。

前述したように「脅迫」の冒頭部にあらわれている「現実的不安」においては、その対象は在日朝鮮人（民族団体）になっている。では、後半部にあらわれている「実存的不安」はどうだろうか。

「脅迫」の掲載誌である『新潮』の目次をみると、「脅迫」は、「日本語しか語り得ぬ韓国知識人が解放後数々の微妙な迫害に耐えて行く孤独な物語」と紹介されている。「日本語しか語り得ぬ」というところが、やや誇張されているように思われるが、張はまさに「日本語しか語り得ぬ」、「日本そのもの」としての自分を、読者に承認してもらいたかったのではなかっただろうか。「脅迫」が在日朝鮮人向けの雑誌ではなく、『新潮』に発表されたことからも、自分を承認してほしいと思う相手を日本読者に求めていたことが窺われる。彼としては、帰化をした以上、日本社会に受け入れてもらわなければ、真の関係を築くことはできないと思ったのであろう。

このような考えのもとには、彼に対する世間の冷たい視線もあったと考えられる。実際、日本人のなかには、張のように「朝鮮人たることを止めて完全に日本人化」している朝鮮人を「薄気味悪く」、または「いやらしく」思う人も少なく存在した。[13] このように考える日本人がいるということは、朝鮮人であることをあきらめて、日本人として生まれ変わろうとした張が、再び「民族」や「国家」の壁に遭遇したことを意味する。

高の手紙の内容に対する叙述を最後にして、過去に対する想起は終わり、「私」は温泉に到着してお湯に体を沈める。そして、「民族とか国とかが、なにかわからなくなるやうな気がして、人間をこんなに不幸にするやうなものに偏執する人間が愚かだ」と思うなど、熱いお湯にそのような「不幸」を洗い流そうとしている。

ところで、日本文学のなかで温泉は、「超現実の世界へと変わってゆく奇蹟の場面」[14]として語られることがしばしばである。「脅迫」で、「私」が温泉に行って、熱いお湯に自分の「不幸」を洗い流そうとするのは、民族・国家といった自分を取り巻く境遇から逃れたいという意思の表れであったかも知れない。さらに言うと、朝鮮人である自分を捨てて日本人として生まれ変わろうとした張が、日本社会に入ってから感じる孤独感と、実存的不安を超越したいという思いが、温泉を旅の終着地に選ばせたとも考えられるのである。

では、このような意思は、「脅迫」執筆前後における張の仕事にどのように現れているだろうか、以下、一九四八年頃から多く書かれている児童向け著作に焦点を当てて述べることにする。

五．新しい文学への挑戦—児童向け著作

「脅迫」によると、「私」は、民団を辞める頃に「知己」を得た児童雑誌の編集者から、いくつかの読みものを頼まれていた。ちなみに、一九四八年前後から携わっていたとみられる、この児童向けの作品についての先行研究は、現在までほとんどない。

例えば、生前の張と書信のやり取りをした白川豊[15]は、張が「野口実という名で「少女小説」や「少年小説」など、長編三編を含めて多く書いた」と述べているが、その実態に対する調査はしていない。なお、白川は、張赫宙の戦後作品を三期（一期：一九四五～五三年、第二期：一九五四～七五年、第三期：一九七六年以後）に分ける際に、児童向けの作品を第二期の作品として述べている。しかし、筆者の調査によると、張の児童向けの作品は一九四八年から一九五三年までに多く見られ、白川の分類に従うと、第一期に該当するのである。

前述したように、「朝鮮語と日本語と半々の生活」をして来た「私」は、「五歳から前の赤坊の言葉を知らないことが、下手な日本語しか書けない原因」だと思い、自分の子供と一緒に育つようにして、「日本人の心」で日本語を語ることを目指していた。では、実際に張は、この「日本（日本人）の心」を具体的にどのように考えていただろうか、帰化の二ヶ月まえに書かれた「朝鮮人の反省」（『東京新聞』、一九五二・七・二九）のなかで、彼は次のように述べている。

その「日本の心」を、書物の上ばかりでなく、奈良地方に保存されている古美術の中に見出した時の歓びは大きかった。それら古美術の中に「百済」や「新羅」の美を

学ぶと同時に、それが「日本の美」へ発展し変化してゆく過程と、遂に日本的なものへの創造の形に完成されたのを見て、私自身の「朝鮮」と「日本」が融合して、新しいものの生れる可能性を示唆されて、希望を持つた。私のたゞ今の勉強はその目標に向つて居り、私の場合正しいと信じる。

つまり、張は、古美術の中で、「朝鮮」と「日本」が「融合」して、「新しいもの」が創造されたことを見て、自分が目指すべき文学像を定めていたのである。このような「私の文学」に対する意気込は、短編集『愚劣漢』(富国出版社、一九四八)の「はしがき」でも確認することができる。そこで、張は、「終戦を堺(ママ)にして、私の文学には、はつきり一つの線をひいておかなければならなくなつた」としたうえで、「私は今後は多く日本を書き、日本に観点を置いて、新しく文学を創めなくては、ならない」と述べている。

この『愚劣漢』に収められた五篇[15]の短編は、プロレタリア文学の路線から離れた張が、朝鮮人のエキゾチックな面白さを浮き彫りにして書いた風俗小説である。これらは、朝鮮人の醜悪を描いたと、朝鮮では非常に反感を買ったが、日本では評判となり、日本における張の作家的地位は確立された。張は、この時期の作品を再刊行することを期にして、自分が目指すべき新しい文学への心構えを新たにしたのであろう。そして、これと相まって増えている児童向け著作は、このような新しい文学の第一歩であったと考えられる。

終戦後、多くの作家達が生活のために、児童向け著作に携わっており、張の場合も、新しい文学の試みである以前に生活の方便としてそうした可能性も排除できない。けれども、「脅迫」における「私」の児童向け著作へのあり方を考察すると、彼は、その仕事に、特別な思いを持っていたと考えられる。

「脅迫」によると、民団と決別する頃から携わるようになった児童向け著作は、「私」に「日本語の中に戻り、書斎の人になり切ることに郷愁」を感じさせてくれた。また、「民族意識が特異な雰囲気」を作っている朝連分会の集まりで「私」は、書きかけの原稿用紙のことを考えながら、「彼らはみな日本の児童で日本語しかしらない。作者は日本の風習と生活を裏附けて書かなければならない」と思い、「日本人になりきる」と考える。しかし、この考えはすぐさま「いや、さういふことを意識すれば駄目である。書斎に入りつきり(ママ)になれば、私は自分を何民族とも何人とも考へないですむ」と入れ替わるのであった。

「書斎」は、民族や国家を超越して「私の文学」だけを考えることができる特別な空間である。その空間に入りきりになって、日本語しか知らない児童の心で著作に取り組むということは、「五歳から前の赤坊の言葉を知らないことが、下手な日本語しか書けない原因」

であると思い、日本語を完成させてよりよい「私の文学」を求めていた「私」にとって、「日本の心」を知るために格好の仕事であった。

張は、一九四九年九月、朝連が解散されるまで、朝鮮或いは朝鮮人に対する言及を控えていた。それは、戦前における親日活動が在日朝鮮人社会のなかで多く非難され、不遇な立場におかれていたからである。そのような環境のなかで、彼は常に「日本の心」と「朝鮮の心」の間を揺れ動く存在であったと言える。

従って、一九四九年から急激に増えている児童向け著作は、自分がおかれている状況及び心の葛藤から逃れたい（超越したい）ために、「書斎の人」になりきった結果ではなかっただろうか。つまり、この時期（一九四九）における児童向け著作は、彼が持っていた内外の「不幸」から逃れたい欲求が、「私の文学」に閉じこもる形としてあらわれたとも考えられるのである。

おわりに

ここまで、まず「脅迫」における現実的不安と実存的不安を「私」の自己認識過程を通して検証し、次にそのような不安を超越したいという意思が、張赫宙の仕事にどのようにあらわれているのかを児童向け著作にみてきた。

終戦直後に在日朝鮮人民族団体（民団、朝連）と関わりを持っていた張は、常に日韓の間で「心の相剋」を感じており、その解決として選ばれたのが帰化という行動であった。しかし、帰化は、彼が持つ「作家的特長」と存在価値を失わせるという結果を招いた。自伝的短編「異俗の夫」（『新潮』、一九五八・五）によると、張の分身とされる「私」は、「出身の特殊性」と「書くものの民族性」が珍しいから実力以上に認められてきたことを述べ、「それを塗りつぶして、同化へと方向を変えたことから、作家的特長を失い、そして下り坂へ向つた」と認識している。「脅迫」と「異俗の夫」の間には、約五年の年月が流れている。その間に、早くも「脅迫」にあらわれている実存的不安は、現実のものになっていたのである。

終戦後、朝鮮人としての民族性と、それを語る資格に欠けていることを自覚した張に、残されていたのは日本語であった。日本語を用いることで、戦前以来の「日本の心」の追求の延長線上に、もはや「翻訳的小説」[17]の水準にはとどまらない、「私の文学」が可能になるはずであった。彼にとっては、これが実存的不安から逃れるための唯一の希望だった

のである。そして、この希望を実現したいという思いが、児童向け著作の執筆に繋がったと考えられる。

しかし、「朝鮮」という「特殊性」「民族性」を自ら捨てた彼に対して、皮肉にも日本の読者の関心は冷めていった。帰化後、野口赫宙に筆名を変えて活動をし始めた一九五四年以降は、作品の数も段々減っている。このような「下り坂」に危機感を持ったのか、張は時代の流行に即して、社会小説、或いは推理小説にも積極的に取り組んだ。[38] しかし、それでも大勢いる日本人作家の中で注目されることはなかった。

これまで見て来たように、「脅迫」は「自己弁明」だけの作品ではない。すなわち、戦前、戦中の親日活動、あるいは戦後の帰化への言い訳に留まらず、これらにともなう実存的不安を「私の文学」をもって乗り越えようとした、張赫宙の意思の軌跡をよくあらわした作品である。そして、その帰趨を見定めるためには、先に述べたように、児童向け著作が一九四八年頃から急増したという事実に、まず着目する必要があるのではないか。

次章では、張赫宙の児童向け著作の執筆背景及び作品分析を通して、張がこの仕事を通して目指そうとした文学的方向性を考えてみたい。

注

(1)白川豊『朝鮮近代の知日派作家、苦闘の軌跡』(勉誠出版、二〇〇八)

(2)任展慧「張赫宙論」(『文学』、一九六五・一一)

(3)注(2)と同じ。『追われる人々』は、単行本としてポーランドで出版され、チェコスロバキアでは、短編集『少年』が、同じくエスペラント語に翻訳・出版された。また、中国では『権という男』、短編集『山霊』が、それぞれ中国語に翻訳・紹介された。

(4)張赫宙「わが抱負」(『文藝』、一九三四・四)

(5)「韓日併合に積極的に協力した者」、あるいは植民地期に親日活動を行い「朝鮮民族に害を及ぼした者」を、反民族行為者であると見なして、その売国売族をした者たちを粛清して民族精気を掲揚するとの趣旨で作られた法。『民族正気の審判―反民者解剖版―』(革新出版社、一九四九・四＊韓国語)

(6)張赫宙「われわれの立場から」(『日本週報』、一九四九・九)

(7)張赫宙「在日朝鮮人の内幕」(『新潮』、一九五二・三)

(8)張赫宙「在日朝鮮人批判」(『世界春秋』、一九四九・一二)

(9)張赫宙「噫・朝鮮の運命」(『東京新聞』、一九四五・一〇・二三)

(10)伊藤氏貴『告白の文学』(鳥影社、二〇〇二)
(11)保高徳蔵「日本で活躍した二人の作家」(『民主朝鮮』、一九四六・七)
(12)張赫宙は、日本文壇にデビューする前に、朝鮮語の作品を朝鮮の新聞、雑誌に何度も投稿していたが、没になることが多く、それで日本語創作を志したとみられる。また、日本文壇にデビューしてからも、「虹」(『東亜日報』、一九三三・九・二〇～一九三四・五・一)、「三曲線」(『東亜日報』、一九三四・九・二六～一九三五・三・二)、「黎明期」(東亜日報』、一九三六・一・四～八・二七)などの、朝鮮語作品を書いている。
(13)岩上順一「朝鮮作家に就て」(『民主朝鮮』一九四六・八、九)
(14)川村湊『温泉文学論』(新潮社、二〇〇七)
(15)白川豊「張赫宙の生涯と文学」(『人文論総』、二〇〇二・八＊韓国語)
(16)「権という男」(一九三三・一二)、「ガルボウ」(一九三四・三)、「葬式の夜の出来事」(一九三四・八)、「十六夜に」(一九三四・九)、「愚劣漢」(一九三五・三)の五編を所収。
(17)野口赫宙「異俗の夫」(『新潮』、一九五八・五)
(18)張の小説の発表数は、張赫宙として活動した一九五三年が八篇であったのと比べて、野口赫宙に筆名を変えた一九五四年から五九年までは、年に三～七篇、その以後からは、一～三篇に減少している。また、社会小説の代表作には、結核や癌といった難治の病を扱った『黒い地帯』(新制社、一九五八)と『ガン病棟』(講談社、一九五九)があり、推理小説には『湖上の不死鳥』(東都書房、一九六二)がある。

第四章　日本語への回帰―「私の文学」を求めて

はじめに

張赫宙（本名：張恩重、一九〇五～一九九七）は、一九三二年、朝鮮農民の悲惨な状況を描いた「餓鬼道」をもって、日本文壇にデビューしたが、一九三九年頃からいわゆる「親日」的な作品に傾斜し、終戦後の一九五二年には日本に帰化し、野口稔（筆名：野口赫宙）となった。

従来の張赫宙は、右のような前歴の故に植民地期における代表的な親日文学者として注目された。そのため、張が親日に傾倒していく過程、或いはその過程におけるアイデンティティの錯綜が考察の対象になる場合が少なくなかった。

一方、近年においては、戦前だけではなく戦後の活動にも視野を広げて帰化前後の創作活動が注目されているが、ＧＨＱ占領時代の資料の不足のため、帰化に至る張の思考と作品の実態が明らかにされたとは言い難い。

例えば、白川豊が言及した張赫宙の「少女小説」「少年小説」は、その刊行先や時期すら明確にされていないのが現状である。第三章で述べたように、張は一九四八年から五三年にかけて多数の児童向け作品を書いた。戦前には殆ど児童向け著作に手を染めていなかった張が、終戦直後に多数の児童向け著作に関わった理由は何だったのだろうか。

本章では、終戦直後における児童文学界を概観すると共に、張の児童向け著作が同時代における読者（子供）の欲求に相応するため、いかなる作品を試みたのかを考察する。さらに、張がこの仕事を通して求めた「私の文学」がどのようなものであったかについて考えてみたい。

一・占領下の児童文学

一九四五年八月、日本の敗戦によって戦時中（特に一九四四、五年）には完全に衰退していた児童文学は、再びよみがえって活動を開始した。戦時統制により休廃刊となった『幼年倶楽部』の復刊のほか、『赤い鳥』、『子供の広場』、『銀河』などと言ったいわゆる知的・良心的児童雑誌[1]が次々に創刊され、その総数は一九四六年までに百誌を越えていたと言われる。

しかし、右に挙げた児童雑誌は創刊時それぞれほぼ三万部の売れ行きだったが、一、二年のうちに激減し、三、四年のうちに消滅した。[2] それではなぜ一九五〇年を境に、良心的児童雑誌は早くも不振・停滞期を迎えたのだろうか。

古谷綱武は「児童文学への要望」（『児童』日本児童文化協会、一九四七・七・一）の中で、戦後児童文学の問題点を次のように指摘している。

> 露骨にいえば、なによりも、とにかくおもしろくないのである。おもしろくないものがよまれないのはあたりまえのことであつて、子供たちが、ほんとうに夢中になつてよまないような作品のなかに、いかによき意志がこめられていようとも、そんなものは一人合点にすぎない。

古谷の「おもしろくない」という指摘は、単なるストーリのおもしろさを指摘するものではなかった。それは、作品が与えてくれるたくさんの内容が、子供の心の中にとどまって、一つの「種子」のように成長していく「生命力」を持たないこと、即ちその「生命力」こそ、読者（児童）を夢中にさせる要素であることに言及したのである。

終戦直後の児童文学者らは、その仕事の本質が子供の感じ方、考え方を正しく導いていく「教師」でなければならないと考えた。前述した良心的児童雑誌も新しい民主主義に相応するため、「教育性」「文学性」に富んだ児童文学の普及を目指したのである。しかし、このような児童雑誌は早くも経済的行き詰まりを見せ始めた。一九四七年の秋頃から四八年にかけて、ものすごい勢いで増え始めた大衆児童雑誌（漫画や少年少女向け雑誌など）の出現で、文学的な読物中心の良心的児童雑誌は急激に売れ行きが落ちていったのである。既存の児童文学者らは読者離れの原因が低俗な娯楽雑誌のせいだけではなく、これまでの作品が子供を引き付ける魅力に欠けていたことを認識し始めた。さらに、その問題を児童文学者の内部の問題として反省すべきであるという声も出てきた。

その先頭に立っていたのが、高山毅である。高山（「児童文学の危機」『新児童文化』、一九四九・一一・一五）は、児童文学の危機を、「保守反動的な児童読物の氾濫」のせいだと考えることは「自己の責任を棚上げしておこうとするような態度」であると指摘したうえで、児童文学の危機は作品よりもむしろ、児童文学者自身の「情熱」のなさ、意識の低さに根本的な問題があると述べた。さらに、「児童文学の中心は次第に童話から少年少女小説へと移行しつつある」ことに言及したのである。

児童文学を童話と少年少女小説に分けた場合、童話は小学校低学年を対象とした場合によく、小学校高学年以上は少年少女小説を好むと言ってよいだろう。その場合、高山が指

摘した児童文学の移行（童話→少年少女小説）は、児童文学の主な読者層の年齢が以前より上がっていることを示している。これは、戦後の学校教育法である六・三制[3]の実施によって、日本の義務教育が六年から九年に伸びたことと無関係ではないと言えよう。つまり、国民教育の整備によって児童の読書力が向上（読書週間がはじまったのもこの年である）し、児童文学はますます学年別、あるいは性別に分化・拡大されたのである。

このような時期に、既存の児童文学者らは童話だけではなく、少年少女小説を書くため（または、当時少年少女小説に新しく参戦してきた純文学作家、大衆作家との競争に生き残るため）に、創作方法上の努力と修業が強く求められるようになった。実際、一九四八年一一月、毎日出版文化賞に選ばれた竹山道雄の『ビルマの竪琴』をはじめ、戦後に注目された児童文学[4]の多くが少年少女小説に入るジャンルであったことは、当時における少年少女少説への関心の高さを窺わせる。

『ビルマの竪琴』は、竹山が唯一執筆した児童向けの作品で、『赤とんぼ』に一九四七年三月から一九四八年二月まで掲載された。この物語は、ビルマで亡くなった日本軍の霊を慰めるため、僧侶となってひとりビルマに残る決心をした水島兵士の姿を描いているが、あくまでも戦争を主題とした作品になっている。しかし、そこには子供の関心を引くスリルを味わうことはできても戦場の血生臭さや残酷さは殆ど見られない。むしろ素材に使われた歌と水島による竪琴の演奏は、兵士たちの心を慰め、作中の危機を避けさせる役割を果たしていた。

吉田精一（「ビルマの竪琴」『生活学校』、一九四八・九）は、芸術（音楽）を通して残酷な戦争の情景を押さえている作者の「用意の手法」と明るくて澄んだ「文章」を絶賛しながら、「この作品に於て最も見るべきは、作者の気稟、或は作者のモラル」であると述べた。つまり、作者の人格のりっぱさ、精神の深さがこの作品の芯を成しているとのことである。

戦後、良心的雑誌の不振・廃刊が残した教訓は、主に「児童文学は中味で子供達に支持されなければならない」ということであった。しかし、一方において「おもしろさ」をねらうあまり小手先の技術が先行され、その面白さが生まれる必然の思想が置き去りにされることを憂慮する声も多かった。そのような時期に、戦争から目をそらさず、ビルマに残る水島兵士の姿を通して、戦争責任の自己追及[5]をしようとした竹山の『ビルマの竪琴』は、新しい児童文学創造の手掛かりとして、またはその可能性を内包した作品として注目されたのである。しかし、『ビルマの竪琴』を世に送った『赤とんぼ』をはじめ、良心的児童雑誌の続く廃刊は、結局、児童文学全体の不振・沈滞に繋がった。このような時期に出版界

は新作を待望するより、旧作を整理する方向に転換し、少年少女向けの文庫や業書の発行を盛んに行った。日本の児童文学を集めた新潮社の『小国民文庫』、小峰書店の『日本童話小説文庫』、三十書房の『日本童話名作選集』の他、世界の名作古典を集めた『世界お伽文庫』（小峰書店）などがそれである。

さらに、「日本児童文学者協会」[6]（以下、児文協と略称）は、協会所属の作家（一九四九年一二月末までに入会の会員）の戦後作品（一九四八年四月～四九年一二月まで）の一部を選んで、『日本児童文学選』を出している。同書の「年間第三集」（児童文学者協会編　桜井書店、一九五〇・一二・五）の「あとがき」をみると、「営利主義と不純な俗悪な旧観念の抱合による低文化の横行は、ゆるすべからざることである」とし、児童文学の向上・普及のため、「文学教育運動」を展開していく協会の立場を明らかにしている。

一方、これとはやや立場を異にして後に創立（一九五五・五）されたのが「日本児童文芸家協会」（以下、児文芸と略称）であった。児文芸は、大衆児童文学を悪書とする動きのなかで、少年少女向けの娯楽的な出版の「質的向上」に努力して、当時の児童文学に関する様々な「問題を取り上げて検討していく」ことを協会の主な仕事として定めていた。[7]そして、児文芸の機関誌である『児童文芸』の創刊号（一九五五・八・五）と同時に発行された会員名簿には、野口赫宙の氏名が記されている。児文芸は、児文協のイデオロギー傾向にあきたらなかった人や、その児文協に誘われなかった芸術派の人たちが、他の大衆的な少年文学分野の人と結集して立ち上げた協会であった。そして、児文芸の大衆文学の作家たちは後に、偕成社の冒険・探偵小説シリーズ、時代小説シリーズ、実録時代小説シリーズ、少女小説シリーズ、ユーモア文庫に執筆することになる。[8]

しかし、張が実際に児童向け著作を多く書いた時期は、主に一九四八～一九五一年までで、児文芸の会員になってからは機関誌である『朝の笛』に短編「山ににんじん」（一九五七・五）を書く以外に殆ど児童向け創作をおこなっていなかった。では、なぜ張の児童向け著作は一定期間（一九四八～一九五一）に集中的に行われ、その後は書かれなくなっただろうか。

本章では、張が終戦直後（戦後の出発点）に携わっていた児童向け著作における文学的可能性を探るとともに、そのあり方の方向性について考えてみたい。

二．張赫宙の児童向け著作

前述したように、張の児童向け著作に関する先行論は殆どなく、その刊行先や時期も明確にされていないのが現状である。従って本章ではまず、張の児童向け著作を整理し、それがいかなる出版意図を持った刊行先から出されたものであるかを手掛かりに、張の児童向け著作の性格を考えてみたい。

張の戦後児童向け著作[9]は以下のとおりである。

（単行本）

①『やまめ釣る子』（大日本雄弁会講談社、一九四八）

②『恩を返したツバメ』（羽田書店、一九四九）

③『異国の嵐』（「野口實」名義、偕成社、一九四九）

④『港の聖花』（「野口実」名義、偕成社、一九四九）

⑤『流れの旅路』（「野口實」名義、偕成社、一九五〇）

（短編）

⑥「からすの会ぎ」（『少国民世界』国民図書刊行会、一九四七・五）

⑦「心きよらかに」（『少女世界』富国出版社、一九四八・一二）

⑧「憂いは晴れて」（『少女世界』富国出版社、一九四九・一）

⑨「鈴慕のしらべ」（『少女世界』富国出版社、一九四九・三）

⑩「祈りの百合」（『少女』光文社、一九四九・七）

⑪「歌う山彦」（『小学六年生』小学館、一九四九・七）

⑫「愛のマンドリン」（『少女世界』富国出版社、一九四九・九）

⑬「写真物語：雨がっぱのゆくえ」（『小学三年生』小学館、一九四九・九）

⑭「嵐もすぎて」（『小学五年生』小学館、一九四九・九）

⑮「聖なる友情」（『中学生の友』小学館、一九四九・一〇）

⑯「湖水の歌」（『小学五年生』小学館、一九五〇・二）

⑰「花咲く愛情」（『小学五年生』小学館、一九五〇・五）

⑱「幸運のピエロ」（『少女クラブ』講談社、一九五〇・七）

⑲「ゆずりあい」（『小学四年生』小学館、一九五一・一）

⑳「愛のおとずれ」（『小学五年生』小学館、一九五一・一）

㉑「友情の波」（『小学四年生』小学館、一九五一・二）

㉒「幸福のエンゼル」（『女学生の友』小学館、一九五一・四）

㉓「信子のいのり」（『小学五年生』小学館、一九五一・六）

㉔「三十八度線にも太陽がある」（『太陽少年』妙義出版社、一九五三・六、八、一一＊未見）

㉕「沈清物語」（『少女クラブ』大日本雄辯會、一九五三・一二）

㉖『世界少年少女文学全集第25巻・東洋編1』（創元社、一九五四・六・一五）＊野口赫宙。「朝鮮童話集」として八編（「日の神と月の神」「歩いてきた山」「鬼の金棒」「とらを生けどったうさぎ」「金のおのと鉄のおの」「天女ときこり」「恩をかえしたつばめ」「シムチョンィ物語」）を訳す。

㉗『世界少年少女文学全集43巻・東洋編5』（創元社、一九五六・七・五）＊野口赫宙。朝鮮童話集として三編（金南天「明るい朝」、安懐南「まぼろしの母」、李泰俊「城北だより」）を訳す。

㉘「山ににんじん」（『朝の笛』朝の笛社、一九五七・五）＊野口赫宙

右の目録からわかるように張は、一九四八年から五三年にかけて多数の児童向け作品を書いた。まず、単行本について見てみよう。

①『やまめ釣る子』は、講談社の新企画として出版された「評判のよい少年読物」シリーズ（全十二冊）の中の作品である。一方、②『恩を返したツバメ』は、朝鮮の昔話である「恩を返したツバメ」「トラをいけどったウサギ」「オニのかなぼう」「龍宮の母」を所収した短編集である。この他、帰化名である野口稔の「稔」を「実」（實）と変えて出版した③『異国の嵐』、④『港の聖花』、⑤『流れの旅路』は、偕成社が出した少女小説シリーズである。まず、このシリーズの広告によって、三作の内容を確認したい。

・『異国の嵐』：母の遺骨を胸に異国を流浪する妹、踊子となり母の帰国を待つ姉、悲しき再会の物語

・『港の聖花』：踊子となり母を尋ねる孤児道子、悲しき運命の幾波瀾を越えゆく涙と友情の物語

・『流れの旅路』：病む母を療養所に残して唯一人、まだ見ぬ父を尋ねて流浪千里、少女転落の一大悲曲

一九四六年に児童図書専門の出版社として出発した偕成社は、一九四九年七月、組織を改めて株式会社となった。そしてこの年に少女小説のシリーズを刊行したのである。張がどのような経緯で偕成社のシリーズに作品を書くようになったのか定かではないが、『偕成社五十年の歩み』（偕成社、一九八八・六・二〇）によると、同年の四月、偕成社は「偉人物語文庫」を創刊しており、その著者は児童文学者だけではなく、「大人の作家、学者、評

論家」など広い範囲に及んだ、という。このような偕成社の意向から考えると、すでに講談社から少年小説（『やまめ釣る子』）を書いた経験がある張に執筆依頼が舞い込んだ可能性は十分考えられる。

この三作は、傍線の「悲しい再会の物語」「涙と友情の物語」「少女転落の一大悲劇」という広告文言からも察せられるように、如何にも御涙頂戴の少女小説であることがわかる。児童読物の実態調査を行った乾孝（「児童文学の問題」（『文学』、一九五一・八）によると、少女向けの単行本の場合、もっぱら「かわいそうな話」として概観できる「少女涙物」が高学年（小学校五、六年生）の少女たちに圧倒的な人気を占めていたという。このことを考えると、上の三作は当時における少女達のニーズにこたえた筋を工夫して書いたことが分かる。

しかし、この少女小説に対する同時代評はかなり否定的であった。例えば、坪田譲治[19]は一九五〇年の『文芸年鑑』で、「少女小説といふものが、今年非常な流行を見せたけれども、文学としてとり上げていいか、疑問に思へ、一まづこれにふれなかつた」と述べている。さらに、槇本楠郎[20]は「感情遊戯にすぎないセンチメンタルないわゆる「お涙ちょうだい」の少女読物」を、純粋な児童文化（文学）を脅かす「非文化」的な産物として取り上げていた。つまり、両氏とも一九四九年に大流行した少女小説を、商業主義の俗悪な読物と見なしていたわけである。

もちろん、両氏は児文協の会員で戦後の児童文化を指導する立場から、大衆的読物（漫画、冒険小説、少女小説など）の氾濫を憂慮していたであろう。しかし、前述した高山毅（「児童文学の危機」）の指摘のように、戦後の良心的児童雑誌が続いて廃刊に及んだ原因は、「保守反動的な児童読物の氾濫」だけではなかった。つまり、当時の児童文学には、新

しい民主主義の時代を生きる読者（児童）の読書欲を充たす興味に乏しかったのである。この興味の欠乏が、結局小説家の作品を求めるようになって、小説家の大衆児童文学への参入を可能にしたといえよう。そして、張が講談社や偕成社など、幅広く大衆児童文学を手掛けていた刊行先から、短期間に何冊も児童向け著作（単行本）を刊行できた背景にも、同じく児童文学における新しい感興を求める声が強く反映していたのである。では、実際に張は、小説家に求められた児童文学の新しい興味を、どのように見出していただろうか。

次節では、張の短編を例に挙げて考えてみたい。

三．児童向け著作における新しい興味性（可能性）

本章の冒頭部にまとめた著作目録をみると、張の児童向け短編は、一九四九年には『少女世界』に、そして、それ以後は小学館の学年別児童雑誌への掲載が多いことがわかる。『少女世界』（富田出版社）は、一九四八年一一月に創刊（終刊は、一九五六年七月以後と推定される）[12]した少女向け雑誌で、主な読者は中学生の女子であった。張は、この『少女世界』に、⑦「心きよらかに」、⑧「憂いは晴れて」、⑨「鈴慕のしらべ」、⑫「愛のマンドリン」の四編を書いている。その中、「鈴慕のしらべ」は朝鮮の古典である春香伝の翻案である。張の翻訳・翻案については、次節で触れることにして、ここでは、まず『少女世界』から出された三編について述べることにする。

この三編は、主人公である少女の葛藤と悲しみが、いわゆるハッピーエンドで終わる少女小説である。そして、そこには、復員、戦犯といった戦争がもたらした負の遺産が題材として描かれている。しかし、ここで注目すべきは、復員、戦犯といった同時代の問題が作者の戦争批判認識からというよりも、ただ少女達のセンチメンタルな感性を引き立たせる役割に過ぎなかったことである。例えば、「心きよらかに」の主人公であるトシ枝は、シベリアからの復員でボロ姿の俊助を「可哀想な人」と思い、学友たちから「ルンペン」の友達であるとからかわれるにも関わらず、俊助の味方になる。

一方、「憂いは晴れて」の良子は、戦犯の濡れ衣を着せられた父親の逮捕を悲しみ、また「愛のマンドリン」の静子は、戦争で腕をなくした兄の絶望を悲しむ。このように、主人公の少女たちは、戦争が残した不幸を背負っていく登場人物を「可哀想」（あるいは残念）と思い、彼らが遭遇している現実問題の改善（再出発）に向けて行動するやさしい心の持ち主であった。即ち、これらの作品は、主に戦後の再出発をテーマにしていたのである。

そして、このような再出発への意気込みは、直接戦争を体験した登場人物（復員）の発言からも確認することができる。

例えば、「心きよらかに」の俊助は、復員後に携わっていたペンキ絵の仕事をやめた理由について「ほんものの、絵が描きたいよ。すばらしい芸術を生みたい」と将来の夢を語る。さらに、「愛のマンドリン」の兄は、戦争で腕をなくし、バイオリンができなくなったことに腹を立てるが、新宿の道端で偶然見かけた「お怪我の兵隊さん」らが演奏する音楽を聞いて、「おれは生きるぞ。必ずいい作曲をする」と、再出発を誓うのであった。これらの短編で再出発の契機になっている「芸術」と「音楽」への言及は、掲載誌である『少女世界』誌の性格に合わせた結果であると考えられる。『少女世界』には、編集部が「音楽派」であると自称するほど、「音楽歴史、世界音楽名作物語などという美しい物語や小説」が多く掲載されていた[13]。

なお、『少女世界』には、自社の広告以外に『ポプラ社』や『偕成社』など、他社の広告が多くみられる。そして、『少女世界』に掲載された作品が、以後偕成社から出版される場合も少なくなかった[14]。『少女世界』と偕成社の関係は定かではないが、右のような関係から憶測するならば、偕成社から少女向けの単行本を三冊も書いた張が、『少女世界』へ短編を書くことは難しくなかった（逆の場合も同じ）と考えられる。

一方、張は小学館からの学年別児童雑誌にも多様な学年（四～六年生）の少女向け読物を書いた。学年別雑誌は、児童向け読物の中でも発達段階に応じた読者の対象をはっきりと想定した出版物である。つまり、作者は読物の執筆において、対象になっている児童の読む心（意欲・興味動機）をはっきり掴んで執筆しなければならない。では、張はどのような内容で児童の心をとらえようとしていただろうか。

⑭「嵐もすぎて」は、母が危篤であることを知らされて芸能大会への出場を諦めていた早苗が、友達とまわりに助けられて、次回の大会に出られるようになった知らせに嬉し涙を流すところで物語は終わっている。また、⑲「ゆずりあい」は、芸能大会の学校代表に選ばれた敏子が、母の病気のために納豆売りをする秀子に代表の座を譲るという、少女達の友愛を描いた物語である。この二編でモチーフにしている「芸能大会」は、まさに執筆当時における少女たちの興味（娯楽）の反映であった。終戦後、荒廃した日本に活力を与えるために、ＮＨＫのラジオ放送が企画した「のど自慢素人音楽会」（一九四六年一月一九日開催、以下「のど自慢」と略称）は、後に「のど自慢素人演芸会」に改題（一九四七・六）され、全国的に人気を呼んだ。

『アサヒグラブ』（朝日新聞社、一九四六・三・二五）は、この「のど自慢」に参加する人々の様子について、「日比谷の放送会館が、時ならぬ時に大群衆に取り囲まれるのが近頃の異風景」と伝えている。つまり、老若男女を問わず全国的な娯楽番組として「のど自慢」は高い人気を得ていたのである。このような「のど自慢」の人気は、当時の児童文化にも影響を与えて、一九四七年一一月一六日には、戦後初の全国児童合唱ラジオコンクールが開催された。さらに、時代を共にして「リンゴの唄」「港シャンソン」を歌い、天才少女歌手と称賛された美空ひばりの登場（一九四八年、一一歳）は、同年代（小学校四、五年）の少女たちに「芸能大会」への関心をより高めさせたのである。張は、このような執筆当時における少女たちの関心を巷きつける内容を題材にして、少女向け読物を書いたと見られる。

このように、学年別雑誌に掲載された張の児童向け著作は、当時における児童たちの興味、或いは友情・友愛を描いたものが多く、児童に即して客観的に考えようとする作者の努力が認められる。しかし、現実生活の現象を描くだけでは、読み物としての面白さは平板なものになりがちであった。ましてや親たちに「教育的」で「ためになる」ことを売りにしていた学年別雑誌の場合は、児童生活の本質に対する洞察が常に求められていたのである。

張は、児童ならではの児童性を見出すため、自ら「日本の風習と生活を裏附けて書かなければならない」という必要性を感じていた。そして、このような考えは「異国人の心ではとてもその物語は成立しない」というところまで発展していたのである。[15]

もちろん、このような考えの裏には、戦後における張の作家的立場が多く関わっていたのも事実である。戦後の張は、戦前の親日行為のゆえに、在日朝鮮人の間で多く批判され、脅迫まで受けていた。その噂が出版界にも流されて、彼は仕事上の制約を受けざるを得なかったという。実際、偕成社から出版した単行本の執筆名が「野口実（實）」になっていたことや、当時（終戦直後）の著作に異なる著作名が使われたことからも、終戦直後における張の作家的立場がピンチに陥っていたことを窺わせる。

このように、張は自らの作家的地位が危うくなっていた時期に、児童向け著作に関わっていたのである。それは、単純に大人の文学界で仕事をもらえなくなっていた作者が、職業的選択の一つとして報酬目当てに児童向け著作に携わっていた、と考えることも可能であろう。しかし、いかなる理由で児童向け著作に手を染めたのであれ、一旦その仕事に取り組んだからには、その分野で認められたいと思うのが執筆者としての本音であろう。特に作家としての地位に危機感を抱いていた張の場合、当時のピンチを乗り越える突破口として児童向け著作に突き進んでいった可能性は高い。

実際において、児童向け著作に携わるようになった一九四八年頃の張の文章には、自らの文学に対する変化を求める発言が多く見られる。例えば、一九四八年出版した短編集『愚劣漢』（富国出版社）の「はしがき」をみると、張は「終戦を堺（ママ）にして、私の文学には、はつきり一つの線をひいておかなければならなくなつた」としたうえで、「私は今後は多く日本を書き、日本に観点を置いて、新しく文学を創めなくては、ならない」と述べている。ここで示されている目指すべき「私の文学」は、主に「日本を書き、日本に観点を置いて」始められる「新しい文学」である。つまり、「日本の風習と生活を裏付けて書かなければならない」児童向け著作は、張が目指すべき「私の文学」の方向と通じていたのである。張は戦後小説家に求められた児童文学の新しい興味の要求に、自らの文学が新しく生まれ変わる可能性を重ね合わせて、児童向け著作に携わっていたのだろう。

では、当時の張が児童向け著作を通して目指した「新しい文学」とは、具体的にどのようなものであったのだろうか。次節では、張赫宙の翻訳・翻案に着目して、当時の張が目指した「新しい文学」の方向性について考えてみたい。

四．「新しい文学」の方向性

前述した著作目録をみると、張は、児童向け著作を旺盛に書き始めた一九四九年に、短編集②『恩を返したツバメ』や、⑨「鈴慕のしらべ」など、朝鮮の読み物を翻訳・翻案した作品を発表した。これらの作品は原本に即した内容というより、文学作品の筋や仕組みを用いて分かりやすく日本風に書き改めた翻案と言えるものである。[16] 短編集『恩を返したツバメ』の「あとがき」をみると、張は朝鮮に昔から語り伝わってきた読物のタイトルや内容を自ら「ほどよく、すじを加えたり変えたりして、よみよいように、分かりやすいように」したことを断わっている。つまり、これらの作品には媒介者である張の解釈がかなり多く反映されていたのである。

同年、『少女世界』に掲載した「鈴慕のしらべ」(「春香伝」の翻案)を例にあげてみよう。この物語のなかには朝鮮を連想させるような表象が殆ど用いられていない。読者の理解を助けるための挿絵（山口将吉印画)をみても、登場人物の服飾や髪形などが年代・国籍不明で、東洋の昔話であることしか見当がつかない。さらに、『少女世界』の読者層である中学生が読みやすいように、漢字には多くのふりがながふられていたにも関わらず、唯一名前を与えられた主人公は、「春香」と漢字で表記されているだけで、読者が朝鮮読みの「チュニャン」や日本語読みの「しゅんこう」ではなく、「はるか」の物語として読んだとしても差し支えない。

なお、「鈴慕のしらべ」は、そのタイトルからもわかるように、媒介者である張の解釈が色濃く反映されていた。その中でも注目したいのは、登場人物の身分の表記が主に日本の平安時代（七九四～一一八五）になっていることである。例えば、主人公の春香は平安時

代に歌舞を演じる芸者である「白拍子」の娘に、そして春香の恋人である「若様」は同じく平安時代に犯罪・風俗の取り締まりなどを担当した「検非違使」に設定されている。しかし、このような設定は「春香伝」の時代性から考えると、大幅に異なっていた。もともと「春香伝」は、唱劇から文学にもちこまれたもので、作者も、正確な年代もわからず、また多数の異本がある作品である。その大体が、主に李朝末期[3]（一六七五～一八〇〇）の作品であるから、日本の時代区分からすると、およそ江戸時代（一六〇三～一八六八）に当たる。

鄭大成の『『春香伝』日本語翻案テキスト（一八八二～一九四五）の系統学的研究」（『日本学報』、一九九九・一二＊韓国語）によると、日本語に翻訳・翻案された「春香伝」のなかで、春香は主に元「妓生」（芸者）であった月梅の娘に、そして、恋人役の李夢龍（若様）は、両班（貴族）の身分で、後に「御史」（地方官の監察を秘密裏に行った国王直属の官吏。朝鮮では暗行御史とも呼んだ）の地位に就く人物として訳されていた。なお、「春香伝」の戯曲（『新潮』、一九三八・三）を書き、以後数回に渡って「春香伝」の翻訳に携わった張も、春香を「まだ妓生の籍にも入っていず」と、未然の「妓生」に、そして若様は「御史」に訳していた。

もちろん、外国の文学作品を児童向けの翻訳・翻案にするためには、日本の子供たちが読みやすいように、ことばの記号を同じ言語（日本語）の記号に置き換える作業が大事である。しかし、当時の児童に平安時代の「白拍子」や「検非違使」は、決して分かりやすい設定ではなかった。にもかかわらず、なぜ張は時代を遡って平安時代の物語として「春香伝」を改作したのだろうか。そこには、「春香伝」の正確な伝達を重視するというより、媒介者である張ならではの認識が強く反映されていたと考えられる。では、当時の張が「春香伝」の翻案を通して伝えようとしたメッセージとはどのようなものであっただろうか。張の同時代の文章を踏まえて考えてみたい。

終戦直後に書いた「日本国民に寄せる」（『創建』、一九四六・三）によると、張は日本人と朝鮮人の体質の近親をはじめ、原始道徳の類似を強調しながら、平安朝の日本の姿に接して「日本が最も崇高な姿となった時代であったことが解った」と述べている。つまり、張は、平安時代（それ以前も含む）の文化に接して、美しくて明るい日本の本原の精神（日本の心）を見出していたのである。張の見解によると、日本の歴史を通じてこの時代程外国文化と精神の摂取に積極的だった時代はなく、またそこには無限の「包容と理解と愛」があったという。それが、徳川鎖国と維新後の軍国ですっかり破壊されたために、日本人

の民族的欠陥（短気、行過ぎ、優越感、包容性の欠陥など）があらわれるようになったということである。

長い間日本語による創作を続けてきた張は、良い日本語は「日本の心」を体得することから生まれてくるものであると考えた。その「日本の心」を知り尽くすために、戦前には若い世代の日本人が顧みない日本の伝統（初詣やみそぎなど）まで積極的に身につけようとしたのである。そのような彼が、奈良や京都に保存されている平安時代の文化に接して、ようやく「日本の心」に対する答えを見つけたのであった。すなわち、張はそこで、百済や新羅の美を学ぶと同時に、それが発展・変化して、遂には「日本の美」として完成されていくのをみて、彼自身の「朝鮮」と「日本」が融合して、新しいものに生まれ変わる可能性を示唆されたのである。[18]

このことを考えると、「春香伝」の翻案に「鈴慕のしらべ」というタイトルを付けた理由も理解できる。「鈴慕のしらべ」の「鈴慕」とは、尺八古典本曲の曲名で、「鈴慕」に寺や地方名を冠した曲が多数あり、同一原曲が伝承系統により変化して多くの異曲を生んだと言われる。つまり、張は「鈴慕」と同様に多くの異本がある「春香伝」を、「日本の心」が最もよくあらわれている平安時代の物語として改作することで、「朝鮮」と「日本」が融合して新しいものに生まれ変わる可能性を試そうとしたのではないか。

戦後、戦前の親日行為によって祖国や在日朝鮮人社会のなかで不遇の立場に置かれていた彼は、実生活において、民族や国家といった自分を取りまいていた様々な不幸から逃れて（超越して）「私の文学」だけに集中したい願望が強かった。その思いが「私の文学」をはじめ、自ら生まれ変わることを強く望んでいたと言える。つまり、戦後の児童向け著作は、当時における様々な不安を乗り越えて、前に進もうとする作家張赫宙の再出発の試みであったのである。

おわりに

ここまで、戦後における児童文学界の状況を踏まえて、一九四八年頃から急増する張赫宙の児童向け著作の内容を検討した。さらに、張が児童向け著作を通して目指そうとした文学的可能性と、「春香伝」翻案を通して見られる「新しい文学」への方向性について考察した。張の児童向け著作には、戦後の再出発をテーマにしたものや、当時の児童たちの関心を反映した読物が多く見られる。

このような児童向け著作の背景には、あきらかに戦後の児童文学界に対する新たな興味と、それを支える大衆雑誌出版産業の地盤があったといえよう。つまり、そういう商業ジャーナリズムによって、終戦後、政治と文学論争が展開された大人の文学界で仕事をもらえなくなった張が、短期間において多数の児童向け読物を著作することができたのである。しかし、張は単純に金銭的報酬だけを執筆の目的にしたのではなかった。言い換えれば、彼はその営みを通して、「私の文学」が生まれ変わることを強く望んでいたと言うことができる。その思いが新しい自己に対する内面的な理由づけを必要としたのであろう。つまり、「私の文学」が新しく生まれ変わる可能性を、日本文化の流れの中で再確認することで、自らの存在意義を確かめようとしたのである。

しかし、当時の張に求められた世間の期待は、張が目指そうとした文学的志向とは逆方向を向いていた。それは、張の児童向け著作の動向からも確認することができる。前述した著作目録をみると、張の児童向け著作は一九五一年を境に急激に減っており、それ以後は創元社刊行の『世界少年少女文学全集』に掲載した「朝鮮童話集」の翻訳が主になっていた。創元社の『世界少年少女文学全集』は、戦後、新しく区切られた「少年少女」期に、地域割による各国の文学を把握し、「教養」を「形成」させるべく生み出されたものであった。[19]

一九五二年に帰化した張は、この『世界少年少女文学全集』で二回にわたって東洋編の「朝鮮童話集」を担当している。[20] しかし、これらの翻訳には「児童物になるよう多少あらためたり」はしたものの、「春香伝」の翻案で見られるような改作は行われていなかった。これは刊行先である創元社の方針によるもので、創元社の社長である小林茂は、創元社の雑誌『創元』五〇号（世界少年少女文学全集刊行一周年記念号、一九五四・二、三）巻頭の「ごあいさつ」で、「作品選択の一定水準、その体系、原作の忠実な翻訳、熟した表現、用語用事の注意、そして造本の完璧に及ぶ限りの注意」を払ったことを明らかにし、それが「この全集が自らに果たした責任」であると述べている。つまり、戦後の「読書運動」を通して完訳こそ良いものとする児童文学の流れのなかで、創元社は、「原作の忠実な翻訳」を通して、児童たちが広く世界を見る眼を養っていくことを目指していたのである。

このような創元社の立場から考えると、「朝鮮童話集」の担当に最もふさわしい訳者は、「原作の忠実な翻訳」はもちろん、それを日本の児童が分かりやすいように、日本の立場に基づいて解釈できる者であったはずである。即ち、張（野口）に求められた文学的期待というのは、朝鮮と日本が融合して「日本の美」として新しく発展していくものというよ

り、朝鮮と日本の心を知り、相互の差異を照らし合わせてくれる存在であったと言える。このような「私の文学」のあり方に対する認識のずれは、朝連解散（一九四九）と朝鮮戦争勃発（一九五〇）以後、張が朝鮮を代表するインテリとして日本のジャーナリズムに迎えられたにも関わらず、帰化して野口稔（筆名：野口赫宙）になってからは、その存在感が薄れて、作品の数も減っていったことからも確認することができるだろう。

戦後、作者としての立場に危機感を抱いていた張にとって、「私の文学」に対するあり方を再認識し、新しい自己を見出していくことは、再出発に向ける必然的な行為であった。そのような意味で張の児童向け著作は、戦後における張赫宙の再出発の試みとして位置付けることができるのである。

注

（1）主に純児童文学に関わる雑誌のこと。大衆児童文学を通俗・俗悪と捉え、それに対しての「良心的」という意味づけである。

（2）『赤とんぼ』は一九四八年の一〇月に、『銀河』は一九四九年の三月、『子供の広場』は一九五〇年三月に終刊になった。

（3）日本の義務教育制度。戦後、新しい学校教育法（一九四七・三）の下で、義務教育は六年制の小学校の後に三年制の新制中学校が加えられた。

（4）石井桃子『ノンちゃん雲に乗る』（大地書店、一九四七・四）、平塚武二『太陽よりも月よりも』（講談社、一九四七・八）、筒井敬介『コルプス先生汽車に乗る』（季節社、一九四八・四）、福田清人『岬の少年たち』（講談社、一九四七、八）など。

（5）鳥越信（『日本児童文学』建帛社、一九九五）は、竹山道雄が「ドイツ文学の学徒としてナチズムを憎悪し、また教師として多くの教え子を戦場に送ったことの反省を直接のモチーフ」にして、「第二次世界大戦後のモラルを追求しようとした」と指摘している。

（6）児童文学者協会は、戦後東京やその近郊に住んでいた児童文学者及び評論家が集まって、一九四六年三月一七日に結成された、いわゆる芸術的児童文学の全国組織である。ここに所属していた児童文学の作家たちは、戦後創刊された良心的児童雑誌を舞台に、創作活動を展開した。

（7）中澤夫『児童文芸　』創刊号（一九五五・八・五）の巻頭

（8）根本正義『占領下の文壇作家と児童文学』（高之堂出版社、二〇〇五）

（9）本著作目録は、拙稿「〈脅迫〉論―実存的不安をめぐる作者の軌跡―」（『昭和文学研究』、

二〇一一・三）に掲載した作品目録を訂正・追加したものである。

（10）坪田譲治「二十四年の児童少年文学」（『文芸年鑑』、一九五〇・六）

（11）槇本楠郎「増大する児童文化の危機」（『教育と社会』、一九四九・三）

（12）日本文芸家協会編『文芸年鑑』の一九五六年度版（新潮社、一九五六・六）の「便覧Ⅳ少年少女幼年雑誌」には、『少女世界』の記載はあるが、一九五七年度版（新潮社、一九五七・六）には記載がない。このことから、終刊は一九五六年七月以後と推定される。

（13）『少女世界』の増田靖子は、「少女の友の座談会に出席して」（『少女世界』、一九五〇・一二）において、「『少世』は、音楽派というか、とても音楽に関するものが多いのです」と述べている。実際、『少女世界』には、「世界音楽物語」（一九四九・五）が付録されているなど、音楽歴史や世界音楽名作物語が多く掲載されていた。

（14）注（8）と同じ

（15）張赫宙「脅迫」（『新朝』、一九五三・三）

（16）短編集に所収されている「恩を返したツバメ」は朝鮮の「興夫伝」を、「龍宮の母」は「沈清伝」であり、「鈴慕のしらべ」は「春香伝」の翻案である。

（17）許南麒訳『春香伝』（岩波書店、一九五六）の解説。

（18）張赫宙「朝鮮人の反省―“日本の心の体得”」（『東京新聞』、一九五二・七・二九）

（19）佐藤宗子「「少年少女」の時代―戦後における「教養形成」の対象」（『千葉大学教育学部研究紀要』第五七巻・二〇〇九）

（20）創元社『世界少年少女文学全集』は、地域割りで構成されており、第一期（一九五三・五～五五・四）が全三二巻、第二期（一九五五・五～五六・一一）が全一八巻、そして第二部（一九五六・一二～五八・五）が全一八巻になっている。このうち張の「朝鮮童話集」は、第一期「東洋編（1）」と第二期「東洋編（5）」に収録されている。

第五章　祖国に対する愛情のゆれ―『嗚呼朝鮮』論

はじめに

張赫宙『嗚呼朝鮮』（新潮社、一九五二・五）は、日本国内では朝鮮戦争をはじめて「本格的に小説化」[1]した作品である。張はこの作品の出版から約五ヵ月後に日本に帰化して野口稔（筆名：野口赫宙）になった。張の帰化を報じた『読売新聞』[2]には、張の談話と見られる次のような一文が掲載されている。

> 『（中略）〝嗚呼朝鮮〟は祖国朝鮮の真実の姿を作家として言論の自由に従って執筆したつもりです、それに逮捕状が出されるとは全く腑におちないことです、母国と決別するのは一抹の寂しさはありますが祖国を日本に見出すため帰化の手続きをとったわけです（中略）』

「逮捕状」という言葉からわかるように、ここには『嗚呼朝鮮』の内容に対する祖国からの反感が読み取れる。そして、そのような事態になったことに納得できない張の苛立ちが直接或いは間接的に帰化と結びついたことが窺える。

白川豊[3]は『嗚呼朝鮮』の執筆動機を「表」と「裏」に分けて、「表」の動機は戦争の実相をできるだけ「客観的に描写」することであったが、「裏」のそれは、朝鮮戦争という舞台を借りて、自身の「自己弁明」をすることであったと述べている。これに対して金鶴童[4]は、『『嗚呼朝鮮』は、取材を通して得られた情報を活用して執筆したもので、自らの行為に対する弁明及び合理化を図るために執筆された他の自伝的作品とは異なっている」と、白川に反論したうえで、朝鮮戦争の文学的形象化を通して民族の悲しみを描いた張の「民族愛」を強調している。しかし、このような「自己弁明」或いは「民族愛」を抽出する見解は、いずれにせよ小説の主人公のみに照らした作家（張赫宙）論に留まっており、執筆時の時代背景と、それに伴う同時代評をふまえていないと言ってよい。[5]

張允馨[6]は右のような先行研究の問題点を指摘した上で、『嗚呼朝鮮』が同時代の読者にどのように受け入れられていたのかを追究し、「小説の中の敵はアメリカだ」という結論に達している。

しかし、『嗚呼朝鮮』における米軍のイメージは、例えば戦災民救済事業をやっている具氏の「吾々が頼るところは、結局は美軍の他にはない」という発言からもわかるように、韓国軍から見放された戦災孤児に粉ミルクを援助してくれるありがたい存在である。さら

に、生活のため「ＵＮマダム」（いわゆる淫売のこと）に転落した英子ですら、「（中略）あの方達は、わが韓国のために大事な方々よ！援韓物資が来なければ、この国は一日で涸渇して、滅んでしまふのよ（中略）」など、米軍に対する感謝の気持ちを述べている。そもそも『嗚呼朝鮮』の主人公である聖一は、朝鮮戦争が勃発する直前までアメリカ留学を目指して英語の勉強に夢中であった青年なのだから、この作品を通して読者がアメリカを「敵」と見なした可能性は薄いと言わざるを得ない。

一方、「作者が暴露し告発しているものは北鮮側・韓国側の両方にわたっている（ただし作者は国連軍に対しては筆を折っている）」[7]、「その眼は自国民にのみ向けられていて、この戦乱のもう一つの面には眼を覆っているようだ」[8]と書いた同時代評は、張（允のとは相反する読みの可能性を示唆している。即ち、むしろ『嗚呼朝鮮』については、朝鮮戦争が対立する二大勢力の政治的色彩を帯びていたにも拘らず、そこまで作者の筆が及んでいないことが、多く指摘されていた。

本章では、右のような先行研究を補いつつ、同時代評を丁寧に読み直す作業を通して、朝鮮戦争を形象化した『嗚呼朝鮮』が孕む問題を考察する。そのうえで、そのような作品を執筆した張赫宙という人物について、改めて考えてみたい。

一．執筆背景及び同時代評

朝鮮戦争は一九五〇年六月二五日に勃発し、一九五三年七月二七日に休戦協定が結ばれて、現在に至っている。張は『毎日新聞』の後援で、一九五一年七月から約一ヶ月間、朝鮮に滞在しながら取材を行った。そして、その内容を『嗚呼朝鮮』に反映させる一方で、ルポルタージュとして『毎日情報』その他の雑誌に寄せた[9]。その中で、「祖国朝鮮に飛ぶ（第一報）」を見ると、祖国に行く理由を次のように述べている。

> 艱難の最中にある数百万同胞の訴えの代弁者になつて上げたいという熾烈な希望が私をふるい立たせた。（中略）戦災民の哀れな姿をルポルタージュに、小説に書いて外国の同情をひこうという意向であつた。

「艱難の最中にある数百万同胞の訴えの代弁者になつて上げたい」という言葉には、祖国と同胞に対する愛情が漂っている。そして、このような愛情は、早くも「嗚呼朝鮮」（『新潮』、一九五二・二）と「避難民」（『新潮』、一九五二・五）にあらわれた。この二作は、それぞれ長編『嗚呼朝鮮』の第一部と二部にあたる。これに第三部「絶望の彼方」を後に

加筆したのが『嗚呼朝鮮』であり、この際に第一部は「ゴルゴタへの道」と改題された。

まず、「嗚呼朝鮮」の同時代評を確認してみよう。北原武夫は「文藝時評」[10]で次のように述べている。

> この作品には、少し酷評すれば、事件はあるが文学がないのである。（中略）文体などというものは、こゝには全くなく、まして文学的リアリティなどはゼロであつて、たゞ素材だけで読ませるに過ぎない。というよりも、はつきり言えば、こゝにあるのはたゞジャアナリズムだけであつて、人間の問題ではないのである。恐らく、作者自身にもあるまい。

北原は「嗚呼朝鮮」について、「事件はあるが文学がない」と言って、「文体」や「文学的リアリティ」を持たない文学は文学ではないと強調している。これとは反対に、同じ「文藝時評」[11]のなかで北原は、武田泰淳作「美貌の信徒」（『中央公論』、一九五二・二）について、「武田氏独得のヒネリの利いた重量感のある文体は、表面に現代の少女の軽薄な生活図を描き、その中にこの思想乃到は批判精神を巧みに溶け込ませ、これを立派に文学的リアリティにまで盛り上げるのに成功している」と称賛している。つまり、作品において「素材と観念」を融和して「文学的リアリティ」を構成するには、何より作家の「文体」（思想や批判精神）の力が必要であることを強調しているのである。これは「嗚呼朝鮮」への酷評とは対照的である。即ち、北原は朝鮮戦争の実情（各事件）を客観的立場に基づいて叙述している作家（張赫宙）の思想や批判精神の曖昧さを問題にしたのである。

「嗚呼朝鮮」に対する右のような批評は、「祖国同胞の戦乱下に骨肉相はむ悲劇を現代的政治が弱小民族にもたらす必然の運命劇と断じている作者の根本態度には、多くの疑義がある」という平田次三郎[12]の発言からも確認することができる。さらに張の微妙且つ曖昧な立場を汲みとって「気がねが作品を傷つけていることを同情をもつて見なくてはならない」と言っている本多顯彰[13]も、作品に対する根本的な問題意識は、前述した二人の評論家と同一線上であったと言える。そして、このような同時代評はそのまま第二部の「避難民」にも続いていた。しかし、ここで注目すべきは、一方において作者の平和への悲願と戦争の非人間性に対する抗議が評価されていた点である。

例えば、「同胞への深い人間愛と、戦争にみられる人間の野獣性にたいする激しい憎悪と怒りとが、この作品を人間の忠惨に対する絶望からその一歩手前で救っている」[14]、「この作品を『二十五時』的転落から救っているものは、作者の祖国統一への熱望であり、平和への烈しい欲求だ。（中略）作者の訴えは、もっと温いヒューメンな共感を、われわれに求め

ている[15]」といった同時代評は、金（鶴童）が指摘した作者の「民族愛」を裏付けている。

しかし、『嗚呼朝鮮』を単純に「民族愛」の作品とみなし、作品全体に横たわっているジャーナリスティックな性格を無視して論じることはできない。『嗚呼朝鮮』が題材とした各事件は、当時、ＧＨＱ占領下の日本では、その内容は詳しく報じられていなかった。つまり、作者は意図的に各事件の真相をストーリーに取り込むことによって、読者の欲求を満たしていたのである。『嗚呼朝鮮』が、前述したような文学作品としての不評にもかかわらず、初版から半月後に早くも二刷[16]が出るほどの好評を博していたのはそこに理由があったと考えられる。そして、さらにその背景には、ＧＨＱの検閲を経ざるを得ない報道への不信感と、再軍備に向けて舵を切った日本が再び戦争に足を踏み入れるのではないかという不安があったのではないか。

一九四九年の中国革命と翌年の朝鮮戦争、そして日本共産党の武装闘争とＧＨＱによるその弾圧（『アカハタ』の停刊やレッドパージ等）など、当時の日本の内外の状況は、朝鮮戦争を単に隣国の惨事として見過すことを許さなかったのである。これに起因する不安は文学界にも反映されて、朝鮮戦争を背景にした作品が発表された[17]。例えば堀田善衛の「広場の孤独」は、若い新聞記者の目を通して、当時における日本人の心情を鋭く描いている。それは、動乱情報を伝える電文のなかで北朝鮮軍を「敵軍」と訳す事に対する主人公の迷いが象徴するように、自国の意志を失いつつアメリカの反共軍事基地として戦争に「コミット[18]」して行く現実への迷いと不安だと言ってよい。

『嗚呼朝鮮』がこのような時期に出版されたことを考えると、朝鮮取材に基づいて本格的な戦争状況を描いたこの小説に対する読者の期待は大きかったに違いない。「今度の事変をはじめて本格的に小説化した点で注目される[19]」「朝鮮動乱の南北側の感情の実相がうかがえて、ためになった[20]」といった同時代評は、まさに『嗚呼朝鮮』のジャーナリスティックな性格が効を奏していたことを窺わせる。

しかし、朝鮮戦争中に起った各事件の真相を報告すること、単にそれだけが作者の執筆意図ではなかったことは、前述した張の朝鮮取材の動機と、第二部「避難民」に対する同時代評から確認した。では、作者の祖国に対する愛情は、作品のなかでどのように表れていただろうか。張が『嗚呼朝鮮』を出版した直後に帰化したことを考えると、祖国への愛情は作品の中で様々な形に揺れ動いたはずである。

本章の狙いはその様相を確認し、その意味を考察することである。そのために、まず着目しなければならないのは、朝鮮取材を通して「祖国朝鮮の真実の姿」を目の当たりにし

た作家の心情が、作品を通してどのように表現されたかということであろう。

次節では、朝鮮戦争の真相を暴露したと言っても過言ではない『嗚呼朝鮮』の内容を、もう少し詳しく検討していく。

二．祖国朝鮮の真実の姿

『嗚呼朝鮮』には、主人公の聖一が人民軍として韓国軍と戦い、次は韓国軍として人民軍と戦う、その間に戦争の悲惨と政治の腐敗とを十分体験し、意識的に目覚めていく過程が描かれている。即ち、この作品が暴露し告発する対象は、人民軍と韓国軍両方にわたっていると言ってよい。

それではまず、人民軍に対する作者の訴えを見てみよう。人民軍占領下の人民裁判で多数の市民が「反動」とみなされて処刑される光景を目の当たりにした聖一は、人民軍に徴集されまいと天井裏に身を隠すが、親友の密告で人民軍にされてしまう。人民軍の小隊長は「一日も早く人民の生活を安定」させるためには「この国を正しいもの」の手に渡すべきだと訴えた。聖一は小隊長の真剣さに引かれて、一緒に戦うことを決める。しかし、人民の解放のために戦うはずの人民軍は、大田刑務所において多数の囚人を「反動」と決めつけて惨殺した。聖一は殺されかけている女子学生と婦人を見て妹と母を思い出すが、教導の怒鳴り声で引金を引いてしまう。

このように、人民を解放するという名目で戦争を起こした北朝鮮は、言論の自由を認めず、その方針に反する者は皆「反動」と見なして無惨に殺した。大田刑務所右翼囚人（警察、軍人、公務員など）の虐殺事件もその一つである。これは、一九五〇年九月、国連軍の仁川上陸作戦によって戦況が不利になった人民軍が、後退の直前（一九五〇年九月二五日から三日間）に刑務所に収監された警察、軍人、公務員などを集団処刑した事件で、殺された囚人の多くは、刑務所内にある井戸の中に放り込まれたという。[21]

人民軍はソウル占領後、軍人や警察、或いは右翼団体や政党の幹部などを敵と見なして処刑した。なお、中道的な人物に関しては人民に編入される者と、そうでない者とを区別したが、その過程において実施された人民裁判と密告制度は、北朝鮮の体制に異議を持つ市民を「反動」として死に至らしめた。『嗚呼朝鮮』は、このような人民軍占領下における「反動」摘発の矛盾と虐殺の実態を告発していたのである。

そして、このような告発の対象は人民軍だけではなく、韓国軍にも及んでいた。人民軍

が後退した後、ソウルを奪還した韓国軍は、人民軍に協力した者に「附逆罪」（反逆罪）を適用し、「附逆」者狩りを始めた。韓国軍の捕虜になった聖一も、「附逆罪」に問われて、民事裁判に回される。聖一は、移送の途中に脱出するが、またも韓国軍の憲兵に捕まれ、今度は国民防衛軍に配属される。同じく国民防衛軍にされてしまった元教員の安は、「正直者は馬鹿を見る。真理だね。良心を誤魔化して、北鮮か韓国か何れかへ片寄ればよかったんだよ。それが出来ないのは、良心だ。しかし、その良心に頼ってゐては、いつか滅びる」と述べる。ここには、南北のどちらかに付いて最後まで運命を共にしないままでは、両方の敵にされてしまうという、戦災民の哀れな現実が投影されている。

さらに、『嗚呼朝鮮』には、人民軍を韓国軍に見間違えて「大韓民国万歳」を唱えた直後、慌てて「人民軍万歳」に出直す部落民や、韓国軍や人民軍のどちらに対しても「来たからには、負けるな。負ける位なら、来ないでもらひたい」と切実に願う部落民の哀れな様子が描かれている。そして「反動」や「附逆」とみなされてしまうことに怯えて避難を選んだ人にも、悲しい運命が待っていた。すなわち、第二部を通して描かれている避難民の多くは、寒さと飢え、或いは空爆の犠牲になっていたのである。

このような厳しい現実を生き抜くしかない戦災民の哀れな姿こそ、『嗚呼朝鮮』を通して張が訴えたかった「祖国朝鮮の真実の姿」であり、言い換えれば、そのような「祖国朝鮮の真実の姿」を作品を通して代弁することが、祖国と同胞に対する張の「愛情」であったと言える。

ところで、もう一つ触れておきたいのは、直接人民軍と韓国軍を比較する場面において、韓国軍に対する不信感の表現がより際立っていることである。例えば、人民軍に配属された聖一が後退の際に出会った部落の老人は、「お前ら人民軍はわしは好きぢや。去年の冬にも遊撃隊が来たが、下男のやうによく働き、愉快な連中だつた。けれども、韓国軍と来たら雞を煮て出せの、白米を食べさせろのと、さながら火賊だつた」と言っている。さらに、人民軍と韓国軍の接戦地域であった智異山近くの部落民は「人民軍は部落を犠牲にしてはいけないのだと、必ず遠くへ出て戦つてくれました。国軍が勝つて入つて来ますと、さあ大変です」と言うなど、韓国軍の非人間性がより甚だしく描かれている。

このような部落民の口から明かされる韓国軍の非人間的な行為は、直接祖国（韓国）の現状を見て来た作者の見解によるものであろう。しかし、面白いことに、朝鮮取材のルポのなかには、韓国軍による悪事の記録より、むしろ人民軍支配下における反共の証言が多く書き込まれていた。ところが、張は「私は必ずしも共産軍の悪口を書くために渡韓した

のではなかつた」[22]と言って、避難民の証言をルポとして記録してはいるものの、すでに日本にも伝わっている反共の記録にあまり興味を示さなかった。かえって取材中に張の関心を引いたことは、自由民主主義を建前にしている韓国政治及び韓国軍の不正と腐敗の実態であった。

張は、韓国行きの飛行機のなかで政治家の梁と出会い、李承晩政府の政治信念を聞いた。そして、「渡韓後に、南韓の将来について、暗い考えをもつて帰るのではないか。それは絶望となつて、私に苦悩を強いるのではないかと考えていただけに、梁氏の話は明るい希望となつた」と述べて、祖国の未来を明るく考えた。しかし、取材に応じた戦災民の大半が、不正と腐敗尽くめの現政府に信望を持ってないことが分かり、希望は段々絶望に変わっていく。そして、李承晩政府における役人の無能と腐敗を激しく憎むようになるのであった。

このような張の怒りは、そのまま作品に反映されて、『嗚呼朝鮮』の第二部における居昌良民虐殺事件と国民防衛軍事件の描写に繋がったと考えられる。居昌良民虐殺事件とは、一九五一年二月九日から一一日にかけて慶尚南道居昌郡にある智異山で韓国軍が共産匪賊のパルチザンを殲滅するためとして、無実の市民を虐殺した事件である。一方、国民防衛軍事件は、国民防衛軍司令部の幹部らが、軍に供給された物資を横領し、数十万の国民兵を飢え死にさせた事件で、張はこの事件の張本人である金潤根の死刑を朝鮮取材中に知った。つまり、張は、取材時に大きく騒がれていた韓国軍の非人間的な行為の記録をジャーナリズムの観点に基づいて作品に取り入れたのである。

しかし、ここで注目したいことは、二部の後半部において、韓国軍の腐敗と不正を余るほど見てきた聖一が、韓国の「ブルジョア民主主義」に幻滅を抱き、北に向かう仲間達と違って、南に残ることを決めたことである。これは、小説の冒頭部から巨大な機械に押しまくられるように、自分の意志を喪失したまま流されてきた聖一が、初めて自分の意志を明確にした場面である。ここで、南が意味するものは「自由」であった。聖一は、不正と腐敗はあるものの、それに向けて戦うことができる自由を求めて、南に残る決意をしたのである。それでは、南に残る決心をした聖一は、以後、どのような境遇に直面していただろうか。引き続き第三部の内容に沿って述べることにする。

三．変えられた結末

聖一は母の行方を追って鳥山に辿り着くが、母はもう死んだ後であった。さらに、戦災

孤児の面倒を見てきた「伝道婦人」（女性伝道師）は、多数の孤児を聖一に託して亡くなってしまう。戦災民救済事業をやってきた具氏は、「数百萬の戦災民！これを救ふことが、共産主義に対する自由主義の勝利」だと確信し、今の仕事を続けていることを聖一に告げる。聖一は具氏と同じく戦災孤児の面倒を見続ける決心をして、米軍にミルクなどの支援を訴える一方、チゲ（物資を背負う際に用いる朝鮮伝統の器具）のミニチュアを米軍に販売し、その収益によって孤児院の自活を目指す。

ここで、言及されているチゲ制作と米軍への販売は、朝鮮戦争中に活躍したチゲ部隊をモチーフにしていたと考えられる。チゲ部隊は、物資補給や負傷者の運搬を担当された民間人の特集部隊で、チゲの形がアルファベットのAに似ていることから「A-Frame Army」と呼ばれた。チゲ部隊の労務者達は、チゲを主な運搬手段として険しい山岳と 深い谷水を渡って国連軍に戦闘物品及び食料を運んだという。[23]『嗚呼朝鮮』には、このようなチゲ部隊に助けられた米軍が、ピンチを勝利に導いてくれたチゲに感謝して小型のチゲを帰国の記念品として買い求める様子が描かれている。

このような展開は「戦災民の哀れな姿をルポルタージュに、小説に書いて外国の同情をひこうという意向」を持っていた作者の意図とも相応する展開であると言える。しかし、『嗚呼朝鮮』の後半部をみると、孤児達と共にするという聖一の希望は、再び絶望に変わっていた。それは、聖一が元人民軍で国民防衛軍の脱走兵であったことが公になって、再度、韓国軍に捕まることになったからである。聖一の従兄である永吉（永吉は、韓国軍の少尉であった）は、「性格のはつきりしないものは、いつでも損をする」と言って、はっきり「敵」を見ても、奮い立たない聖一のあいまいな性格が彼を不幸にさせたと指摘する。

聖一の周辺人物の多くは、各々の「敵」をはっきり見ていた。不正と腐敗が蔓延る韓国政府が人民の「敵」であると断言して、「命ある限り戦ふ」と言った人民軍の小隊長がそうであったし、北朝鮮に潜り込んで人民の哀れな実情を見てきた従兄の永吉は、人民軍を「敵」としてはっきり定めていた。さらに、南北の間で迷いを感じていた永哲と安は、国民防衛軍事件における韓国軍の腐敗を決め手に人民軍の方を選んで行ったのである。しかし、聖一だけは、最後まで自分の政治的立場をはっきりさせることができず、迷い続けた。

そのような聖一に永吉は、立場をはっきりさせるチャンスとして、巨済島に収容されている共産捕虜の内幕を探ってほしいと提案する。しかし、聖一は、永吉の提案を断って、「何ものにもまきこまれまい」と固く決意した。そして、その「厳正中立」の信念は彼にとって一つの「主義」となっていたのである。これは、戦争に振り回されてきた聖一が最

終的に下した結論である。つまり、聖一は南北のどちらも味方に選ばなかった。それは、言い換えると、どちらも敵にまわしたことになる。では、聖一が最終的に選んだ「厳正中立」の決意が意味するものは何だっただろうか。

聖一と同じく南北の間で迷いを感じ続けた永哲と安は、聖一に口をそろえて「正直者は馬鹿を見る」と言った。二人が言う「正直者」、それは「良心」の声に従う者である。つまり、永哲と安は、「良心」を誤魔化して南北の何れかへ片寄らないでは、いつか滅びるしかない現実を聖一に語っていたのである。このことを考えると、結局南北のどちらも選ばなかった聖一の「厳正中立」の決意は、「良心」の回復として受け取ることができる。しかし、「良心」を保って行くためには常に命がけの勇気が必要であるが、聖一はそのような勇気の持ち主ではなかった。

収容所に送られた聖一は、自分をスパイとして利用しようとする韓国軍の少尉に「自分はぐうたらな人間です。臆病でお役に立ちませんのが、申訳ないと思ひます」と出来るだけ卑屈に見せかけてその場を逃れようとする。さらに、自己批判を要求する人民軍に対しては、リンチに怯えて命令に従うしかないのであった。

このような、後半部におけるストーリーの展開をみると、朝鮮戦争を通して聖一が求めた「自由」と「良心」は、結局、権力の前で何も意味を持たなくなるのであった。そして、『嗚呼朝鮮』の末尾をみると、朝鮮戦争の停戦会談において、聖一が収容されている巨済島の捕虜交換問題が重要な議題になっていることが強調されながら、孤児院に帰りたい聖一の「不安はまた深刻である」と締め括られている。

では、なぜ作者はいったんは主人公を希望に導きながら、再び絶望に追いやったのだろうか。まず考えられることは、『嗚呼朝鮮』の執筆期間中に何度も騒がれていた巨済島捕虜収容所の暴動事件を、張が作品に取り入れるために、作品の内容を変えた可能性である。

巨済島捕虜収容所は、朝鮮戦争中に捕虜となった人民軍を収容するために、ＵＮ軍が設置した収容所で、実際に捕虜収容の業務が始まったのは、一九五一年の二月からであった。当時、巨済島には一三万二〇〇〇名あまりの捕虜たちが収容されており、その中では北朝鮮や中国に帰ろうとした共産捕虜と、聖一のように自分の意志とは関係なく人民軍に徴兵されたため、北朝鮮には帰ろうとしない反共捕虜に分かれて、深刻な対立が生じていた。日本では、一九五二年四月まではこの巨済島における捕虜の暴動事件を本格的に報じていなかったが、一九五二年五月七日、収容所の所長であるドッド准将が捕虜たちの人質にされるという事件が起ってからは、頻繁にその推移が報じられるようになった。

『嗚呼朝鮮』がこの拉致事件をふまえていないことと、初版の印刷日が五月二七日であることを合わせて考えると、張が一九五二年の二月と三月に起きた暴動事件を参考にして作品の後半部を書き直した可能性を否定できない。つまり、張は、休戦会談の重要な議題にもなっていた巨済島捕虜暴動問題を作品に取り入れるために、戦災孤児と共に祖国の不運な運命を乗り越えようとする主人公の希望を絶望に変えたのではないか。このような後半部における性急な事実の持ち込みによって、せっかく盛り上がった希望の力が失われ、『嗚呼朝鮮』が文学的感動のない、不安な朝鮮の現状報告にとどまったという印象は否めない。

ここで、前述した北原の「事件はあるが文学がない」という同時代評が蘇ってくるわけだが、一度は文学作品としての完成を目指していながら、再びどうしようもない朝鮮の現実を浮き彫りにして終ってしまうこの物語が持つ同時代的可能性は何であろうか。本稿ではその可能性を、祖国に対する愛情のゆれという観点から論じることにする。

四．愛情のゆれ

近年、鳥羽耕史（『１９５０年代―「記録」の時代』河出書房新社、二〇一〇）らがあきらかにしているような、ジャーナリズムが蔓延する一九五〇年代の文壇状況と、『嗚呼朝鮮』に対する同時代の期待を確認してみよう。

前述したように、一九五〇年前後の日本は、国内外に様々な問題を抱えており、それは社会的不安として広まっていた。当時のジャーナリズムでよく見られるルポルタージュの流行もこのような社会の不安が生みだしたものであったと言える。

堀田善衛[24]は、何かの事件に際して、あるいは何か特殊なことのある場所へ文学者が派遣されることのなかに含まれる期待は、「文学者が人間中心の思考観察の専門家」であるからだと述べている。そして、その報告が読者の心を動かすためには、報告者自体が「どれだけ揺り動かされたか、その深さ、その度合」が人の心を打つ根本のものになると力説した。

このことを考えると、『毎日新聞』をスポンサーとして行われた張の朝鮮取材と、それによって書かれたルポルタージュや『嗚呼朝鮮』に対する同時代の期待は、あれこれの事実を手際よく並べただけのものではなかったはずである。そこには、同胞としての愛情を持って観察した事実を、作者ならではの文学的感性を持って表現すること、つまり、日本のジャーナリズムとは違う観点から記述される事実を知り、その事実のなかを生きる人間と

の情緒的共感が求められたのである。

このような情緒的共感は、当然それを表現する主体、すなわち作家張赫宙の人間観や認識、そして、表現方法によって、その度合いが変わってくるわけだが、『嗚呼朝鮮』は、前述した北原の「事件はあるが文学がない」という同時代評から見られるように、文学的作品としての評価は低いものであった。その原因として多く指摘されたのは、作者の「気がね」に対する問題である。

田口東一郎[25]は、『嗚呼朝鮮』における作者の政治的立場が非常に微妙且つ曖昧であることを指摘した上で、「勿論作者が朝鮮の人であり、占領下の日本に生活し、その国の雑誌に発表するという非常に微妙な立場には同情するが、作家にとって一つ一つの作品が現実とのギリギリの対決でなければならないとするならば、この曖昧さは素材の性格から、やはり作家の責任として追求されなければなるまい」と述べて、当時における張の政治的立場の曖昧さが作品を傷つける要因であることに言及した。

田口が言っているように、『嗚呼朝鮮』の主人公は、確固たる自分の意志や思想を持たない、非常に曖昧な性格の所有者として描かれている。そして、そのような主人公の姿は、戦後における張の様子とも重なっていた。戦後、戦前の親日行為によって在日朝鮮人社会のなかで多く非難された張は、在日朝鮮人民族団体（朝連・民団）から多数の脅迫状を受けて「被害妄想[26]」するまでになったという。

本論文の第三章で述べたように、この時期（終戦から帰化前後）の張は、在日朝鮮人からの脅迫に対する「現実的不安」と共に、祖国を捨てて帰化する自分を日本社会が受け入れてくれるかどうかという「実存的不安」を抱いていた。つまり、彼は精神的にも思想的にも、様々な意味で自立することができず、日本における自分の立場に関わるすべてのことに多かれ少なかれ「気がね」をしていたと見られる。

このような作家の「気がね」によって執筆された『嗚呼朝鮮』の主人公は、自分と同様に自立した認識を持たない主人公であった。つまり、張は南北いずれの政治的立場もとらず、その間を生きぬくしかない戦災民に焦点を合わせて、この作品を書いたのである。

しかし、先に発表した「嗚呼朝鮮」と「避難民」は、隣国の戦争状況に対する疑問を晴らしてはいたものの、人間の生きる道を深く考える文学作品としては不評であった。その原因として指摘された作者の「気がね」に関する問題は、引き続き第三部の執筆に取り掛かっていた張にとって、相当のプレッシャーになっていたはずである。なぜなら、その指摘で求められた最も肝心なことは、張のイデオロギーをはっきりさせることであり、その

表明が今後における張の立場を示すものとして世間に受け入れられるからだ。このことを考えると、第三部における主人公の決意と行為の行方は、同時代における張の認識を示すものとして重要な意味を持つと言えるだろう。

前述したように、戦争に振り回されてきた聖一は政治的立場を求める二回の岐路において「自由」と「良心」を求めて行動した。ここでいう自由とは、強制や脅迫されることなく、自分の意志に従い行動できる環境を意味する。これは、戦後二分化した在日朝鮮人社会の狭間で両方に気がねをしなければいけなかった張が、実生活のなかで何よりも切実に求めたものであったと言える。このような自由への希求が、同じく自由を奪われた戦災民の哀れな姿に心をうたれて、数百萬の戦災民を救うことが「共産主義に対する自由主義の勝利」だという具氏の姿勢に直結したのであろう。そして、その具氏に導かれて、祖国の「絶望を食ひとめてくれるものは、この仕事だ」と思い、戦災孤児の救済活動を行う聖一の行動からも、同じく同胞に対する作者の愛情が見えてくるのである。

しかし、このような同胞への愛情は当時において殆ど受け入れられなかった。かえって朝鮮取材に基づいて書いたルポルタージュと『嗚呼朝鮮』の第一、二部は、戦争における各事件と韓国政府の不正・腐敗を扱ったことで、祖国を売り物にしたという批判を浴びたのである。さらに、韓国から逮捕状が出されたという噂まで流れて、当時の張はかなり身辺に不安を抱いていたと見られる。

張は朝鮮戦争に関わる自分の文章が祖国と在日朝鮮人社会から批判を受けるにつれて、祖国や同胞に対する文章を書く資格に欠けていることを自覚した。このような認識が、結局『嗚呼朝鮮』の後半部において、朝鮮民族が生きる道を力強く提示することを不可能にし、代わりに戦争状況における時事問題に沿った写実的な描写によって末尾を締め括らせたのではないか。つまり、聖一が収容所に送られる過程において下した「厳正中立」の決意は、同時代評で多く指摘された『嗚呼朝鮮』の問題（作者の自意識や気がね）に対する張の答えとして読みとれるのである。

しかし、いくら聖一が「厳正中立」の決意をしようが、相変わらず二分化して対立している収容所内にあっては、その決意を貫くことはできなかった。それと同様に、張自身も決して対立している祖国の現実から完全に独立することができないことを知っていた。それだけに休戦会談の重要な議題になっていた巨済島捕虜暴動事件をどうしても作品のストーリーに取り込みたかったのではないか。つまり、『嗚呼朝鮮』の後半部におけるストーリーの転換（希望→絶望）からは、執筆時における作者の微妙な立場ゆえの（祖国に対する）

愛情のゆれが見えてくるのである。

おわりに

ここまで、同時代における『嗚呼朝鮮』の問題（作者の自意識や気がね）をはじめ、朝鮮戦争を目の当たりにした張の祖国への愛情が作品の中でどのように表れていたかを、当時における作者の立場に重ね合わせて考察した。

朝鮮戦争を形象化した『嗚呼朝鮮』は、当時の日本にあまり伝わらなかった時事的事件を多く描いており、その中でも韓国政府や軍の不正・腐敗に対する叙述が目立っている。それは、張のジャーナリスト的姿勢によるものと言っても過言ではないが、同時にそのような知られていない事実こそ、朝鮮民族を幾重にも苦しめる「祖国朝鮮の真実の姿」である点を考えると、作者の訴え（怒り）は、やはり同胞に対する愛情から発したと言える。

しかし、主人公の希望が絶望に変わる後半部をみると、当時における時事的問題（巨済島捕虜暴動事件）を取り上げているので、読者の関心を引くには十分な展開であると言えるが、祖国や同胞に対する作者の愛情は感じ取れない。

もちろん、捕虜として不安な毎日を送る聖一の日課も、朝鮮民族が置かれた境遇であることは間違いない。しかし、戦争の悲惨と政治の腐敗とを十分体験した聖一は、絶望的な状況の中で自分が生きる確かな希望を掴んでいた。にもかかわらず、あえてその希望を再び絶望に変えていくこの物語からは、祖国と同胞に対する愛情というより、むしろ日本のジャーナリズムに近い距離感が浮き彫りにされているだけである。

ここには、『嗚呼朝鮮』の出版後に帰化する張赫宙の案外に正直な心情が示されているのではないか。つまり、聖一が良心の声に従って決めた「厳正中立」の決意は、南北のどちらにも巻き込まれまいと決めて祖国を離れようとする作者の決意にも読み取れるのである。しかし、国籍がどう変わろうが、民族の裏切者と罵られ、暗殺予告の脅迫状が舞い込む張の日常は、決して祖国の対立と動乱から離れることができなかった。

張は帰化の許可証（一九五二・一〇・一七）を得たばかりの一九日に、二度目の朝鮮取材（一〇月一九日～二八日）を試みる。この取材をもとに書いた「ルポルタージュ朝鮮」（『群像』一九五三・一）には、『嗚呼朝鮮』を「動乱の表面の現象を追ひ過ぎ、些かジャーナリスティックに取扱つたきらひがあつて、自ら不満を覚え、反省も出来てゐたので、もつと純粋なものの形に、民族の哀しみを表現しなければならないのだと、別の長編にと

りかかつた際」であると述べている。この「別の長編」というのは、『無窮花』（大日本雄弁会講談社、一九五四）を指しており、この作品には若い少女である玉姫が人民軍支配下の厳しい生活のなかで、家と祖父の魂を祭る「祠堂」を守っていく様子が描かれている。祖国や同胞に対する愛情から発した『嗚呼朝鮮』が作者の微妙な立場と戦争状況によって、不安な朝鮮の現状を伝えることに終わったことを考えると、「もっと純粋なものの形に、民族の哀しみを表現」しようとしたこの作品にあらわれる愛情の行方は注目される。

従って、次章では『無窮花』の作品分析を通して、帰化を分岐点とした作者の民族意識を考えてみたい。

注

（1）十返肇「文藝雑誌評―抜け目のない編集」（『時事新報』、一九五二・一・二一、夕刊）

（2）「張赫宙氏が帰化」（『読売新聞』、一九五二・一〇・一二）

（3）白川豊「張赫宙の日本語長編〈嗚呼朝鮮〉をめぐって」（『朝鮮近代の知日派作家、苦闘の軌跡』、勉誠出版、二〇〇八）

（4）金鶴童「張赫宙の『嗚呼朝鮮』『無窮花』論―6.25 戦争の形象化に見える作家の民族意識」（『日本学研究』、二〇〇八・五＊韓国語）

（5）先行論で取り上げている同時代評は、主に『嗚呼朝鮮』の単行本の帯や新潮社の広告に用いられた絶賛の文脈に限られていて、『嗚呼朝鮮』が孕んでいた問題を代弁していたとは言いかたい。

（6）張麗「朝鮮戦争をめぐる日本とアメリカ占領軍」（『社会文学　』、二〇〇九・七）

（7）山本健吉「文藝時評―文学の社会性獲得へ」（『朝日新聞』、一九五二・四・二七）

（8）田口東一郎「創作月評―微妙な作家の立場」（『図書新聞』、一九五二・五・五）

（9）「祖国朝鮮に飛ぶ（第一報）」（『毎日情報』、一九五一・九）、「故国の山河（第二報）」（『毎日情報』、一九五一・一一）、「喘ぐ韓国」（『明窓』、一九五一・一一）など。

（10）北原武夫「文藝時評（下）題材に負けた文学」（『産業経済新聞』、一九五二・一・二六）

（11）北原武夫「文藝時評（上）文体の新しさ」（『産業経済新聞』、一九五二・一・二五）

（12）平田次三郎「二月号の文藝雑誌展望―張の力作『嗚呼朝鮮』」（『東京タイムズ』、一九五二・一・二八）

（13）本多顕彰「文芸時評（上）〝これでいゝのか〟への回答」（『東京新聞』、一九五二・

一・二八、夕刊）

（14）注（8）と同じ

（15）注（7）と同じ

（16）初版一刷の発行日は一九五二年五月三一日、二刷は同年の六月一四日になっている。

（17）朝鮮戦争を背景にした作品には、堀田善衛「広場の孤独」（『中央公論・文芸特集』一九五一・九）、窪田精「フィンカム」（『文学芸術』、一九五二・一、創刊号）、武田泰淳「風媒花」（『群像』、一九五二・一～一一）などがある。

（18）Commit：〈A〉（罪・過）などを行う、犯す…〈B〉託する、委す、言質を与える、危くする、危殆に陥らしめる…〈C〉累を及ぼす…That will commit us. それでは我々が危くなる（研究社・新英和大辞典・第十版より）＊「広場の孤独」の前文による。

（19）注（1）と同じ

（20）手塚富雄「文芸時評」（『毎日新聞』、一九五二・一・二三）

（21）文恵京「韓国戦争期民間人虐殺研究：大田刑務所虐殺事件を中心に」（韓国学中央研究院／韓国学大学院、二〇〇八＊韓国語）

（22）張赫宙「祖国朝鮮に飛ぶ（第一報）」（『毎日情報』、一九五一・九）

（23）梁寧祚『6.25戦争史　第三巻』（国防部軍史編纂研究所、二〇〇五＊韓国語）

（24）堀田善衛「文学とルポルタージュ」（『文学』岩波書店、一九五四）

（25）注（8）と同じ

（26）張赫宙「在日朝鮮人批判」（『世界春秋』、一九四九・一二）

第六章　祖国を離れる者の願い―『無窮花』論

はじめに

『無窮花』（大日本雄弁会講談社、一九五四）は、帰化した張が野口赫宙（帰化名：野口稔）に筆名を変えて出版した初めての長編小説である。張は、この作品の創作動機について、同じく朝鮮戦争を背景に書いた『嗚呼朝鮮』（新潮社、一九五二）が「動乱の表面の現象を追ひ過ぎ、些かジャーナリスティックに取扱つたきらひがあつて、自ら不満を覚え、反省も出来てゐたので、もつと純粋なものの形に、民族の哀しみを表現しなければならないのだ」[1]と述べている。この創作動機から、主に「民族の哀しみ」を描こうとした『無窮花』の執筆意図が読み取れるが、実際に張は、朝鮮戦争における最も悲惨な「民族の哀しみ」が何だと考えていたのだろうか。

金鶴童[2]は、『嗚呼朝鮮』と『無窮花』の執筆背景と内容分析を通して、戦前、日本の民族的強圧によって作者の内部に潜められていた「民族意識」が、この二つの作品を通して自然に現れるようになった、と述べている。特に『無窮花』については、「朝鮮戦争の惨状を立体的に描写するために、時・空間的背景や登場人物の設定における作家の緻密な努力が認められる」と言って、『無窮花』をイデオロギーを超越した民族的作品として評価した。

しかし、金は、『無窮花』にあらわれている張の「民族意識」が具体的にどのようなものであり、なぜ張は「民族意識」に掻き立てられて書いた『無窮花』を、日本人作家・野口赫宙の出発点においているかについては言及していない。もとより、自民族の強い民族意識を批判的に述べてきた張であるからこそ、『無窮花』にあらわれる「民族意識」の深層に対する意味分析は、不可欠であるといえよう。

本章では、まず二度目の朝鮮取材以後に書いたルポルタージュや小説を通して、当時の張が祖国の惨状をどのように見つめていたかを検証する。さらに、『無窮花』の内容分析を通して、張が最も危惧していた「民族の哀しみ」を探ると共に、この作品を通して作者が同胞に伝えたかった真のメッセージを考えてみたい。

一．朝鮮取材とルポルタージュ

張俱楽部二度目の朝鮮取材は（『婦人　　』の後援）、一九五二年一〇月一九日から二八日

までの日程で、釜山→巨済島→釜山→京城（ソウル）→釜山の順に行われた。張がこの取材をもとに書いたルポルタージュ及び小説は次のようになる。

①倶楽部『朝鮮の慟哭』（『婦人　　』、一九五三・一）
②「廃墟に咲く」（『別冊小説新潮』、一九五三・一）＊小説
③「朝鮮」（『群像』、一九五三・一）
④「朝鮮に想ふ」（『解放』、一九五三・九）
⑤「眼」（『文芸』、一九五三・一〇）＊小説
⑥「小説　李倶楽部」（『講談　　』、一九五三・一〇）＊小説
⑦『無窮花』（講談社、一九五四・六）＊小説
⑧「権力者」（『新潮』、一九五四・一一）＊小説

中でも、『倶楽部　　』の現地ルポである①「朝鮮の慟哭」によると、当時の反日感情によって身の危険を感じていた張は、国連軍の眼が届く範囲でしか取材を行うことができなかったようである。このような厳しい状況の中で、彼がまず足を運んだ場所は、日本人婦人が多く収容されていた少林寺[3]であった。張は一回目の朝鮮取材の時もこの少林寺を訪ねて取材内容を背景にした短編「異国の妻」（『警察文化』、一九五二・七）、「釜山港の青い花」（『倶楽部　　』、一九五二・九）、「釜山の女間諜」（『文藝春秋』、一九五二・一二）を書いた。これらの短編は、主に朝鮮戦争の勃発によって日本に帰れなくなった日本人妻たちの苦痛を描いており、作者は異国に来て最愛の夫に死なれた彼女らの境遇に「憐憫の情」を抱いていたことがわかる。同じく日本人妻を持っていた張であっただけに、彼女らの境遇に眼をそらすことはできなかったのであろう。

しかし、二度目の朝鮮取材では、少林寺の中を取材することは許されなかった。それは、前述したように、当時における反日感情によって、日本人記者の取材に対する取り締まりが厳しくなっていたからである。張は警戒が厳しくなった少林寺の取材を諦めて、その代りに、貨物船で働いている日本人婦人や、日本人であることを隠しながら外国の兵隊を相手に売春をして生計を立てている女性を取材し、「異国の妻」たちの国際結婚の悲劇を数々と紹介している。

一方、張は休戦会談の最大の難題となっていた巨済島捕虜収容所を訪れて、以前、捕虜の間で起こった暴動事件や、収容所長であるドッド准将が捕虜達に監禁された事件（一九五二・五・七）を取材した。巨済島捕虜収容所は、朝鮮戦争の最中に捕らわれた人民軍捕虜を収容するために、ＵＮ軍が設置した収容所で、一九五〇年一一月に設置され、翌年の

六月には、人民軍が一五万人、中国人民義勇軍が二万人など、約一七万人の捕虜が収容されていた。しかし、当収容所には、北朝鮮に忠誠を誓う「親共派」と、強制的に徴兵されて人民軍になったため、共産主義には反対の立場を取る「反共派」に別れて、深刻な対立が生じていた。このような対立は、段々エスカレートして一九五二年の二月と三月の暴動に繋がって、二百人あまりの捕虜が死傷したという。さらに、一九五二年五月七日には、収容所長のドッド準将が親共捕虜に拉致・監禁される事件が発生して、国連軍は火炎放射器や戦車まで導入して捕虜たちを鎮圧した。この事件は世界の耳目を集め、その結果、休戦会談の捕虜交換に関する交渉は難航したのである。

張は、巨済島捕虜収容所の暴動事件をほぼ同時的に『嗚呼朝鮮』の後半部に取り入れるなど、捕虜達の間で起こった暴動について相当の関心を持っていた。それは、自ら巨済島収容所に赴く理由を「民族的な悲痛な気持ちから、やはりここへ来ないでは居れなかつたのです」と明かしているように、同じ民族同士が殺し合う収容所内の状況は、朝鮮戦争の縮小版とも言えるもので、民族同士に起きる内乱の悲惨さと、恐ろしさを最も実感できる場所であったからに違いない。

このような朝鮮戦争の苛烈さは、戦争を遂行する男たちの不幸に留まらず、多くの女性も大変な苦痛に貶めていた。つまり、戦争によって生活手段を失った女性達は、自分の体を売って命を繋げるしかなかった。巨済島も例外ではなく、UN軍の部隊が島に入ってから、道路やその他の設備は良くなっていたが、UN軍を相手にする女性たちが増え、女性の性道徳が破壊されてしまったのである。これは、終戦直後の日本人女性がパンパンなどに転落していく過程と同様に、戦争がもたらした破壊の一面であったと言える。張は、彼女倶楽部取材するだけではなく、一緒に撮った写真を『婦人　　』（「朝鮮の慟哭」）に掲載するなど、戦争によって生活が崩壊し、道徳も良心も踏みにじられた彼女らの境遇に深い同情を寄せていた。

そして、このような同情は、戦災孤児収容所を訪ねてより一層激しくなっていく。戦争は多くの女性を転落させただけではなく、数万名の戦災孤児を生み出したのである。朝鮮戦争によって夫を失った未亡人の数は二〇万名以上で、戦災孤児は一〇万名を超えると言われている。このような孤児達は、小さいながら戦乱の苦悩を背負って生きて行くしかなかった。張は、戦争が残した数々の不幸を目の当りにして、「嗚呼、平和よ、一日も早く来れ」と、嘆くしかなかった。このような張の二度目の朝鮮取材は、祖国の不幸と絶望を体験する連続であったと言える。

では、実際に張は自分の眼で直接見て来た民族の境遇を『無窮花』のなかでどのように形象化したのだろうか。次節では『無窮花』のストーリーを概観しながら、張が最も危惧にしていた「民族的哀しみ」の本質を考えてみたい。

二．「民族的哀しみ」の本質

一九五〇年六月二五日に勃発した朝鮮戦争は、実質的に戦闘が膠着状態に入った一九五一年二月まで、人民軍と韓国軍による攻勢と後退が繰り返され、釜山を除いた朝鮮半島の全域が戦場となっていた。この時期に人民軍側は「反動」を、韓国軍側は「附逆者」、即ち人民軍への協力者狩りを行い、数多くの命が失われた。その中でも、戦争勃発から約三ヶ月（九月二八日まで）間に及ぶ人民軍支配下の反動狩りは、「苦難の九十日」と言われるほど、苛烈なものであった。『無窮花』は、このような人民軍支配下における玉姫一家の不幸を描いており、動乱によって大家族の構成員がそれぞれ家を離れていくなかで、一人残された若き少女玉姫が、祖父の魂を祭る「祠堂」と家を守っていく過程が描かれている。

まず、『無窮花』の内容を概観してみよう。

玉姫家には、貞烈夫人と呼ばれる祖母をはじめ、父の明仁、母の李マリア、兄の英俊と仁俊、そして妹の順姫が住んでおり、裏の分家には、叔母の崔氏婦人と従兄の致俊、そして従妹の英姫が住んでいる大家族である。叔父の明相は、植民地時期に満州などで独立運動を展開したが、長い間連絡が途絶えて消息が分からなかった。そのような叔父が人民軍の高位官僚となって、明仁に「密使」を送り込み、それを知った「針女中」が死体で見つかる事件が起こってから、玉姫家にまつわる不幸の兆しがあらわれ始める。つまり、事件の取り調べ中に「密使」のことが公になって、従兄の致俊は行方をくらまし、明仁は右翼の刺客に撃たれることになったのである。さらに、動乱が勃発して人民軍支配下になると、玉姫家の長男である英俊は人民軍に、次男の仁俊は韓国軍になって、お互いに銃を向け合う立場になり、南北協商派であった明仁と、韓国政府を支持していた李マリアは人民軍によって大田刑務所に送られる。なお、妹の順姫は人民軍の中尉と恋に落ちたことが原因となって、反共義勇軍に処刑される。このように玉姫家の不幸が相次ぐ中、玉姫は祖父の魂を祭る「祠堂」がある家を守っていく自分の存在が誰よりも価値のある存在であることを自覚していくのである。

玉姫の祖父である義庵先生は、日韓併合が成立しそうなのを非憤慷慨して、売国政客た

ちへの見せしめのために自刃した「忠臣烈士」であった。その血が流れたところに筍が生えてきたという伝説があるほど、義庵先生の義挙は、長い間朝鮮民族の心に刻まれて尊敬されてきた。そのような、義庵先生の魂を祭る「祠堂」は、動乱以後、玉姫家に及ぶ数々の危険を避けさせる神聖な場所として描かれている。例えば、大邸宅の玉姫家を人民に「解放」するという名目で押しかけてきた部落民の用山は、「祠堂」の前に立ち止まって、「俺らたちは、忘れてゐただな、おらたちは義庵先生を見倣ふべきだぞ、おらたちは何か間違えてゐるだな！それは何だんべえ？さてわからねえことだが」と考え込んだ末に、その場を引き下がる。

一方、家宅捜査に入った人民軍は、「民族主義の本能」として尊敬される義庵先生の祭壇の前で、共産主義と合わない民族主義との戦いを経て「民族主義は全的に否定さるべきか否か？否定すべきであつても、日韓併合当時のこの忠臣烈士の教訓は尊い」と言って、祠堂から出ることを決める。このように、「忠臣烈士」と言われる義庵先生の存在は、動乱によって忘れかけていた「民族本来の精神」を喚起させる役割を果たしていたのである。

では、義庵先生に代表される「民族本来の精神」とは具体的にどのようなものであったのだろうか。玉姫は、祖母から日韓併合の成立に憤慨した祖父が、売国政客たちへの見せしめとして自刃したことを聞かされて、「さうしたつて、結局日韓併合は出来てしまつたではないか」という疑問が残り、祖父のふるまいを到底理解することができなかった。さらに、父の明仁が「片寄らない政治が死ねば、民族も滅びる」と言って、日増しに政治的立場が悪くなるにも関わらず、政治から手を引かないことも理解できず、「お父さま！政治をお止めになつて！そしてこの家を手放しませう。小ぢんまりとまとめて、果樹園でもやるのよ」と言うなど、政治と離れて平穏な生活を送ることを願う。

しかし、次男の仁俊は「うちには民族の純潔を守らないでは居れない血が祖先から伝来してゐるんだ」と言って、祖父から父に受け継がれている「民族主義」の重みを玉姫に語る。父の明仁は、植民地時期に少しでも自民族の経済破綻を防ごうと思い、心では総督統治に反対していたが、うわべは権力者に追従するふりをしていた。なお、戦後になってからは「南北それぐの背後にある二大勢力を排除して、民族自体の力で独立しなければならない」と主張して、金九が率いる南北協商派を支持したが、金九の暗殺事件以後、民族反逆者（親日派）であることから「親日家法」（反逆者法）に引っ掛かって検挙されていた。そのような父の「民族主義」を仁俊は、祖父から受け継がれた玉姫家の「宿命」であると解釈していたのである。

しかし、玉姫の祖母は、「民族自体の力で独立しなければならない」という明仁の政治的立場を「正しい」と肯定しつつも、「お前の父は弱過ぎる」と言って、「この民族の最も弱いところをため直すにはお前の父は適任ではない」と述べた。そして、朝鮮戦争が勃発すると、「この家を守るのはお前ぢやよ。お祖父さまの遺訓を守るのも玉姫ぢやよ」と、家族の中で祖父の遺志を受け継いでいく者は他ならぬ玉姫であることを強調していたのである。ここで、祖母は、「民族の最も弱いところ」、即ち朝鮮民族の弱点に言及しているが、それはどういうことであっただろうか。

祖母は亡くなる寸前に僅かな気力を絞って、「わが民族は不幸であり過ぎる」と言った。つまり、この国土の周囲には野望に燃える侵略民族があまりにも多く、「民族の平和愛好の天性」がねじ曲がって、「激烈な性情」に変わってしまった、というのである。だから、不幸にもこの民族は国を思う心は同じであっても、お互いに協力し合うより、南北に別れて憎み合い、対立が激しくなっていく。祖母は、このような「激烈な性情」が朝鮮民族の不幸を大ならしめる「民族の最も弱いところ」であると認識していたのである。父の明仁は、「片寄らない政治が死ねば、民族も滅びる」と言って、「中庸」な生き方を目指そうとしたが、自分の考えを貫く勇気[4]が足りなかった、さらに、実生活のなかでは、外に愛人を作って徘徊するなど、家族に対する愛情も乏しかった。それは、明仁の次のような発言からも確認することができる。

物ねだりを始めると血まで吸ひとりたさうにする順姫や、わたしの顔を見ると反対党の党員のやうに理屈ばかり云ふ奥方や、息子にしても、一人は遊び人、一人は不平家で、この家もほんとに形式で絡ってゐるやうで、情ないね。しかし、玉姫だけは、愛情で結びついてゐるんだよ。嬉しいんだよ

このように、家に安住できない明仁と違って、玉姫はばらばらになっている家族を「愛情」で結びつける存在であった。さらに、小作人の息子である判出に、「あんたは立派な自作農の息子ぢやないの。もつとはきくなさいよ。今は民主主義の時代なのよ」と、励ましてやりたい気持ちを持つなど、身分の上下に関わらず、人間本位の考えに基づいて相手に接する優しい心の持ち主である。そのような人情に溢れる天性を持つ玉姫を、祖母は誰よりも信頼して、祖父の遺志を受け継いで家を守っていく適任者であると考えたのである。

ここで、動乱の悲劇を乗り越える力を政治的理屈ではなく、「民族本来の精神」すなわち、「平和愛好の天性」に基づく同胞愛に求めようとした作者の思いが伝わってくるが、実際、玉姫は人民軍支配下において、どのように同胞愛を表わせただろうか。

次節では、玉姫の人物像を通して、小説のタイトルである「無窮花」に込められた作者の思いを確認してみたい。

三、「無窮花」と「毒の花」

前述したように、動乱は玉姫家の家族に北か南かという二者択一を迫り、離散と残酷な死へと追いやった。さらに、人民軍支配下の部落民は、大地主である玉姫家の土地を没収して、大邸宅からも追い出そうとする。しかし、玉姫は彼らの行動を憎むより、「よく考へると、あの人達のいふことは理解できるわ」と言って、「川向ふの人達だつて大きい家に住んでみたいでせうよ」と、部落民の立場に立って彼らの行動を理解しようとする。

さらに、人民軍によって家の一角が負傷兵の治療に使用されるようになると、自らも看病に取り掛かり、「この人達を内房（なか）へ移して上げて下さい。せめて一夜でも温突（オンドル）の中で寝（やす）ませて上げたいと思ひます」と申し込むなど、家族を不幸に追いやった人民軍を憎むというより、みんな同胞で祖国の幸せを願う心は同じであると思うなど、さらなる同胞愛に目覚めていくのであった。このような玉姫の心使いに感銘した人民軍の中尉は、玉姫を「女性同志」[5]ではなく、韓国流の「ミス金」に呼び直すなど、玉姫の同胞愛は、人民軍との思想の壁も乗り越えていたのである。

では、なぜ張は「同胞愛」を実践する人物像を、他ならぬ一七歳の若き少女に設定していただろうか。そこには、小説のタイトルである「無窮花」に繋がる、作者の思いが込められていたと考えられる。

人民軍支配下の期間（六月二五から九月）とほぼ重なって咲く（七月～一〇月）無窮花は、アブラムシなどの害虫がよく寄ってくるが、一〇〇日あまりの開花期間に、ほぼ毎日散っては咲く生命力の強さを持っており、韓国人の歴史と民族性に例えられる場合が多い。[6]祖母は亡くなる直前に、民族の「激烈な性情」を懸念し、それが祖国の不幸を大ならしめる要因であると言った。そして、「この国の運命にそつくりなお前」と、玉姫の身の回りに起こった不幸を祖国の運命に例えて述べている。しかし、祖母は、そのような祖国の未来を、決して暗く考えたわけではなかった。つまり、「血で血を洗ふやうなことが起きてもそのあとでは民族本来の血が芽生える」と言って、「全世界が野獣のやうな我慾を去つた時、この民族の天性が大いに役に立つだらう」と、民族本来の「平和愛好の天性」に希望を託していたのである。ここで、「平和愛好の天性」は、度重なる民族の不幸に屈しない強い生

命力の源泉であるのだ。「無窮花」というタイトルは、このような民族の強い生命力を表しており、人情に溢れる天性の持ち主である玉姫、そのものを象徴しているのである。

ところで、『無窮花』の後半部には、玉姫と対比されるもう一つの花、つまり、「廃墟に生えた一輪の毒の花」が言及されている。ここで言う「毒の花」とは、所謂「洋淫売（ヤンガルボ）」のことを指しており、玉姫は市場で見かけた彼女らの様子を次のように描写していた。

> まるぽちやの顔、やや出眼だがきれいな眼、せいぐ〳〵十七か八。あの娘がああならない以前にはさぞ悧巧な娘であつたらうと思はれる、が、きつい性格で他人と仲良く出来なかつたかも知れない、派手ごのみでとても貧乏には耐へられないであらう。

「異国の兵隊」と腕を組んで、大勢の人前に現れる派手な姿の「洋淫売」について、玉姫は「きつい性格」で「派手ごのみ」の、到底貧乏には耐えられない性格であろうと想像した。つまり、彼女らは、民族の最も弱いところである「激烈な性情」の持ち主であり、祖国の不幸を大ならしめる存在であったのである。玉姫が市場で再会した崔義蘭（順姫（妹）の学友）も、以前から「激しい性格で、派手好みの少女」であった。そんな義蘭が、今は「弟や妹たちの口を養つてやれる」ことだけが淫売をしている自分の慰めになると言う。もちろん、義蘭は自分から進んで淫売になったわけではなかった。しかし、いくら生活のためであったとしても、「異国の兵隊」に踏みにじられた女性のモラルは、多くの混血児を生みだすなど、戦争がつくり出す数々の不幸の中で、いつまでも後に残る不幸を負わせるのである。つまり、作者（張赫宙）は、道徳も良心も生活のために踏みにじられていく祖国の現実を懸念していたのである。

このような生活に追い込まれた女性達のモラルの失墜は、単に朝鮮に限られたことではなく、戦後、ＧＨＱ占領下におかれた日本にも見られる不幸の一面であった。そして、その背景には友好軍であったにしても、強大な異国（アメリカ）の権力が聳えていたのである。では、『無窮花』のなかで、このような「異国の兵隊」はどのように描かれていただろうか。

人民軍が撤退した後、市内に入ってきた「異国の兵隊」（国連軍）たちは、部落民の娘たちにいきなり抱き付いたり、「強制接吻」を無理やり押し込む「獣同様」な人間であった。玉姫は祠堂に隠れて難を逃れるが、玉姫家の下女二人は兵隊にレイプされ、その中の一人は汚れた体を何日も洗い流し、結局は舌を噛み切って自殺してしまう。なお、無断で祠堂に入り込んだ国連軍は、祭壇を物珍しげに眺めた後、香炉を持ち出して行くなど、非常に下劣な人間として描かれている。

これとは反対に、「中国義勇軍」は、非常に礼儀正しく、共産主義政体に統率されていても、その心を支配している宗教と論理は、朝鮮のそれと通じるものがあるらしく、祠堂を見ては、掌を合わせ会釈をするのであった。このように、作者は正反対の「異国の兵隊」像を描いて、文化と昔から伝わっている倫理の違いに言及しているわけだが、そこにはどのような時代認識が含まれていたのだろうか。

第五章で述べたように、『嗚呼朝鮮』における米軍のイメージは、例えば戦災民救済事業をやっている具氏の「吾々が頼るところは、結局は美軍の他にはない」という発言からもわかるように、戦災孤児に粉ミルクを援助してくれるありがたい存在であった。しかし、『嗚呼朝鮮』から二年後に出版された『無窮花』では、部落の娘たちを暴行し、平気で他人の物を持ち去る非人間的な存在として描かれている。

ここには、李承晩政権の警察に弟を殺された崔看護婦の「あたしだつて民主主義は好きですわ。赤色政権が、伝へられるやうな厭な独裁政治でしたら、断乎反対です。でも、今の韓国政府だつて、民主主義とは云ひ切れないぢやありませんか。米国だつて、いいところが沢山あるでせうけど、吾が国に合はないところだつてあると思ひます」という言葉から察せられるように、当時の李承晩政権と、その背景にあるアメリカに対する不信感があったのではないだろうか。実際、マッカーサーが指揮する国連軍の反撃によって、人民軍支配から解放された住民たちは、当初、国連軍を大いに歓迎していた。しかし、兵士の中には女性に性暴行をする人もいた。つまり、国連軍は平和軍であり、また住民には恐怖の対象でもあったのである。

さらに、アメリカを後ろ盾にしていた李承晩政権は、まず軍隊、警察、右翼政党などを総動員して、言論、出版、集会の自由など、民主主義的権利を一切認めなかった。だから、このような圧政を目撃したマーク・ゲイン[7]は、アメリカ軍政下の南朝鮮について「私は、苦悩と恥辱をもって、わが国旗のもとに――しばしばわれわれの積極的な奨励のもとに――人間の基本的権利を抑圧することにおいてこの世にたぐいをみだしえぬほど野蛮な警察国家が誕生しつつあることをみいだしたのだった」と述べているのである。

張は、「小説　李承晩」（『講談倶楽部』、一九五三・一〇）のなかで、「祖国解放の悲願に燃えて苦闘する」李承晩の半生を描いているが、李承晩の人物像を「なぜ動乱が起きたかを考えるよりも、なぜ赤い勢力が自分に逆らうのか、それを憎悪する心にかり立てられた」と描くなど、李承晩の頑固で「独裁的な性行」を強調している。つまり、李承晩は愛国心に燃える志士ではあるが、「頑固で独善的」な性情の故に、自分の意思に逆らう者は、皆が

国賊で反逆者になるのである。そして、このような李承晩の「独裁的な性行」もまた、民族の不幸を大ならしめる「激烈な性情」であることは言うまでもない。

四．祖国を離れる者の願い

張は戦前から、民族の「激烈な性情」を度々述べていた。例えば、戦前に書いた「朝鮮の知識人に訴ふ」（『文藝』、一九三九・二）をみると、民族性を「激情で、正義心に乏しい、嫉妬深い」などと表して、「われわれがもし完全に内地化してしまつたとすれば、われわれは自然落着のある、ひねくれのない民族となる」と述べている。さらに、戦後に書いた「在日朝鮮人批判」（『世界春秋』、一九四九・一二）では、「政治屋が多すぎる」「怒つては爆発する」など、「激烈な性情」を民族性の最大な欠点として述べていた。

しかし、張の見解によると、このような激情を持つ民族性は、民族本来の性格ではなかったという。つまり、朝鮮人の民族性は、三六年間の日本統治下で崩れてしまったのである。張が、歴史のなかで民族が最も優秀で輝いていたと思っていた時期は、高句麗、百済、新羅の三国時代であった。そのなかでも一番優れたのは新羅で、張は新羅の彫刻や美術品の素晴らしさを強調しながら、「朝鮮人の血の中に眠つている、この新羅の美が、今一度存分に発揮される時が来る」[8]と述べている。幼少年期を新羅の遺跡地である慶州で過ごし、小学校時代の恩師である大阪金太郎校長の影響で、幼い頃から新羅の遺跡に多大な関心を持っていた張であっただけに、新羅の芸術品に対する愛情のこもった発言が目立っている。しかし、ここで注目したいことは、その他の文章の中でも張は、時代を遡って三国時代の文化（芸術品）に表れる民族の崇高で「緩和な心」[9]を称賛し、これが民族本来の固有精神であることを強調していたことである。ここで、「新羅の文化―緩和な心―民族本来の精神」という表象のパターンと、それとは対照的なもう一つのパターン、「朝鮮末期以後―激烈・ひねくれ―民族の不幸」が読み取れる。

張の民族意識（朝鮮の心）は、右のような二つのパターンから、民族を不幸に追い込む激烈な民族性を嫌い・憎しみながらも、一方においては、そのような民族性の裏に隠れている「緩和な心」に愛情を抱く、相反する感情の繰り返しであったと言える。そして、このような矛盾した心が最も分かりやすく表れたのが『無窮花』ではないだろうか。つまり、張は『無窮花』を通して、理詰めで冷酷非情な人民軍や、復讐と怨恨故に血で血を洗うような行動をとる右翼（西北青年団[9]や反共ゲリラなど）の激烈で非人間的な行為を醜く描く

一方で、「緩和な心」の持ち主である玉姫を通して同胞愛を訴えかけているのである。このような同胞愛への希求は、直接祖国の惨たらしい現実を見て来た張の切実な思いによるものであろう。

前述したように、張の二度目の朝鮮取材は、帰化した直後である一九五二年一〇月一九日から二八日にかけて行われた。『読売新聞』（「見て来た悲劇の朝鮮―張赫宙氏談」、一九五二・一〇・二九）はこの取材について、「「民族反逆者」として李承晩政府から逮捕状が出ているとの説さえ伝わる母国への危険な旅だけに極秘裏に計画され、国連軍兵士の服装を借用したほかに、臨時首都釜山では黒眼鏡に眼帯をして変装したほどだった」と伝えている。実際、同記事に掲載された張の朝鮮取材談によると、彼が釜山に着いた日の現地新聞には「東京発」として張の帰化を大きく扱い、また京城（ソウル）にいた時には、張赫宙らしき日本人がひそかに来鮮しているとの報道があり、韓国新聞記者団が政府の治安部長官に会見を詰め寄ったが、同長官は「たとえ張がやってきていても国連軍の管理下内を行動するのならやむをえない」と語っていたという。張は、当時の体験をルポルタージュ風に書いた短編「眼」（『文芸』、一九五三・一〇）に詳しく描いている。

白川豊（『朝鮮近代の知日派作家、苦闘の軌跡』勉誠出版、二〇〇八）は、「眼」の構成を二つに分けて、一つは取材した「「異常な体験談」や「私」の実際取材中の出来事の正確な記録」であり、もう一つは「日本人となった「私」に対する非難と攻撃に過剰に脅える警戒感と不安な心理の表出である」と述べている。もちろん、「眼」には、そのタイトルが象徴しているように、祖国を訪問している「私」を怪訝そうに見ている周りの「眼」（視線）と、それを非常に警戒しながら恐れさえ感じている「私」の不安が主に描かれている。しかし、ここで注目したいことは、「私」に向けられた外部の「眼」による内なる不安より、祖国の痛ましい現実を目の当りにして「私」がこれまでとは違う心の「眼」を持って祖国の現状を見つめるようになったことである。張は、自分の内部に起こった変化を次のように述べている。

私がどのやうに、まことしやかに祖国のこの事態を悲しみ、心を傷めてゐると言つたり叫んだりしても、それは概念上の同苦共感に止まり、実際にはやつぱり他家の火事である。が、今私は眼の前に映るもの凡てが生きて話しかけるやうであつた。腰から上がない赤煉瓦の建物も、崩れ落ちたビルも、焼け爛れた民家も、見てゐると、「痛い」と叫んでゐるやうであつた。私はさっきの嫌疑で私が動乱に一歩踏み込んだやうな気がしてゐる。（中略）さういふ風の考へが私の心に芽生え、見る眼が違つて来たの

は確かであつた。

祖国の惨たらしい現実を「痛い」と共感していく「私」にとって、民族相残の悲劇は、これまで以上に痛ましく伝わってきたはずである。このような民族の哀しみに芽生えていく心の「眼」（愛情）こそ、「動乱の表面の現象を追ひ過ぎ」た『嗚呼朝鮮』と違って、「もつと純粋なものの形に、民族の哀しみを表現」しようとした『無窮花』の執筆に繋がったと言えよう。

しかし、張は祖国や同胞の境遇について、黙ってはいられない愛情を抱きつつも、祖国の事情に対して、下手に容喙してはいけない立場であることも知っていた。つまり、すでに日本に帰化していた彼が祖国に関わる文章を書くことは、母国を売り物にして原稿料を稼ぐ、反逆者の行為としてしか見られなかったのである。このような自分に対する同胞からの冷たい視線を知っていながら、あえて『無窮花』の執筆に携わったことには、祖国を離れていく者の切実な願いがあったのではないだろうか。即ち、『無窮花』の末尾において、家族のなかで唯一家に戻って玉姫と再会するものの、再び家を離れて行かなければならなかった仁俊（玉姫家の次男）の姿は、八日足らずの朝鮮取材を終えて悲哀の心を抱いたまま祖国を離れていく張を連想させるのである。

仁俊は、祖父から受け継がれる玉姫家の「宿命」を認めつつも、「自分を捨てることが出来ない」と言って、日本への密航を試みていた。張も、民族のために文筆で戦ってほしいと思う同胞の期待を知っていながら、日本語で始まった「私の文学」を捨て切れず、時局の波に乗って長い間自らの新しい文学を追い求めてきた。もちろん、『無窮花』の中で仁俊は、密航に失敗し、韓国軍の少尉になっていたが、一時的な帰宅で、いつ帰られるかわからないまま、家を離れて行かなければならなかったことは、朝鮮取材後祖国を離れていく張の立場と重なっている。

仁俊は、家を離れる直前に、姿勢を正して、玉姫と祠堂に向かって「挙手の礼」をした。そして、それを見た玉姫は「それは自分にでなくこの祠堂に向つてしたことだとすぐに気がついたが、この祠を守つてゐるのが自分であり、その自分が価値のある立場にゐるのだと自覚」するのである。このような玉姫の自覚を通して、張が同胞に伝えたかったメッセージが読み取れるのではないか。つまり、張は、「激烈な性情」の故に絶望的な状況に陥ってしまった同胞が民族本来の精神である「平和愛好の天性」を取り戻し、平和な国になってほしいと願っていたのである。それは、長い間、自民族の「激烈の性情」を嫌い、それに対する反抗を重ねてきた張が、野口赫宙としての再出発するに当たって、どうしても同

胞に伝えなくてはならなかったメッセージ（願い、頼み）であったに違いない。

このように『無窮花』の末尾における玉姫の自覚に着目するとき、祖国の平和を祈りながら祖国を離れる者（張赫宙）の切実な願いを読み込むことができるのである。

おわりに

ここまで、張が朝鮮取材を通して残したルポや、『無窮花』の作品分析を通して、朝鮮戦争において張が最も危惧していた「民族の哀しみ」の本質を考察した。張は二度目の朝鮮取材を通して、生活のためにモラルを失っていく女性や怨恨の裏返しによる民族性の崩壊など、数々の不幸を目の当たりにして、民族を不幸に追いやる最大の原因は、ほかならぬ民族の「激烈な性情」にあると考えた。

実際、張は長い間、このような民族の「激烈な性情」に不満と反抗心を抱いており、それは度々自民族の民族性を批判する文章としてあらわれていた。戦前の「朝鮮の知識人に訴ふ」や戦後の「在日朝鮮人批判」など、一見、このような文章は時局やマスコミの波に乗って朝鮮人の行動を批判的に述べているようにも見えるが、そこに明示されている張の論旨は一貫していた。つまり、民族の「激烈な性情」からなされる性急な行動を批判し、三国時代の芸術品にみられるような崇高で「緩和な心」を取り戻してほしいと思う、その一点に限っていたと言える。しかし、これらの文章を書くようになったきっかけが、主に自分の行動に対する周りの冷たい視線を感じた時であり、それを自分に対する攻撃として受け取り、自分の不満と反抗心を重ねて反撃に挑むという過程が、張自身もまた怨恨の裏返しに似たような「激烈な性情」に動かされて、結局は自民族との連帯感を保つことができなかった、ということができる。

先行研究のなかで『無窮花』は、「イデオロギーを超越した民族的作品」として評価されていた。しかし、本章で見て来たように張の民族意識は、民族の「緩和な心」を愛する半面、「激烈な性情」を嫌うという二つの心が入れ交じっており、『無窮花』を単純に「民族的な作品」と見なしてしまうと、この作品を通して作者が同胞に伝えようとした真のメッセージを読み取ることができない。

『無窮花』には、人民軍の看病に携わりながら「みんな同胞で、祖国の幸せを願はぬものはゐなかつた」と、さらなる同胞愛に目覚めていく玉姫の様子が強調されている。つまり、朝鮮取材を通して祖国の惨たらしい現実を見て来た張は、モラルや民族性が崩壊して

いく同胞の姿を目の当たりにして、同胞としての連帯感、即ち同胞愛を自覚してほしいと思っていたのである。これは、自らが果たせなかった民族との連帯を同胞に仮託するという二重的な行為としても見られるが、祖国の惨たらしい現実を見て来た張としては、どうしても、同胞愛を呼び掛けなくてはいられなかったのであろう。即ち、『無窮花』には、このような祖国の平和を願いながら、祖国を離れていく者の切実な思いが込められていたのである。

注

(1)張赫宙「ルポルタージュ朝鮮」(『群像』、一九五三・一)

(2)金鶴童「張赫宙の『嗚呼朝鮮』『無窮花』論—6.25 戦争の形象化に見える作家の民族意識」(『日本学研究』、二〇〇八・五＊韓国語)

(3)少林寺は、元日本人のためのお寺で、戦後、引き揚げ日本人の収容所として使われていた。

(4)アリストテレスの『ニコマコス倫理学』によると、勇気は、「恐怖と大胆とについての中庸」であると論じている。つまり、不快なものに対しては、それを恐れてはいけないし、また侮ることも危険である。その中庸をわきまえて行動することが勇気といわれる。

(5)「同志」とは、同じ目的のために協力する仲間を指す言葉で、社会主義運動家が多く用いる。

(6)金英爽「無窮花(国花)に対する小考」(『論文集 Vol. 16』大邱教育大学、一九八〇＊韓国語)

(7)マーク・ゲイン『ニッポン日記』(筑摩書房、一九五一)

(8)張赫宙「在日朝鮮人批判」(『世界春秋』、一九四九・一二)

(9)張赫宙「民族随想」(『民論』、一九四八・一〇)

(10)北鮮政府に粛清された地主の息子や、暴力団体の青年達が南下して結成した右翼青年団体。

結章

一．帰化後の自伝小説について

張赫宙は、帰化後に、「脅迫」（『新潮』、一九五三・三）、「戸籍謄本」（『小説公園』、一九五四・六）、『遍歴の調書』（新潮社、一九五四）、「異俗の夫」（『新潮』、一九五八・五）、『嵐の詩』（講談社、一九七五）などの自伝的作品を書いた。

まず「脅迫」は、第三章で見てきたように、戦前、戦中の親日活動、あるいは戦後の帰化への言い訳に留まらず、これらにともなう実存的不安を「私の文学」をもって乗り越えようとした、張赫宙の意思の軌跡をよくあらわした作品である。張は「脅迫」のなかで、日本語で始まった「私の文学」に言及し、「私の文学」をより高ませるために、「日本語を語る自分の子を生むことに方針を決めて、今の妻と結婚したんです」と、述べている。つまり、「私の文学」の高度な表現力に欠かせない日本語の勉強のために、日本人妻（野口桂子）と結婚し、子供まで授かったと言っているのである。

実際、張は一九三七年、下宿先の遠い親戚となる野口桂子と知り合い、同年の夏頃から長野県の上諏訪で同居生活を始めた。そして、翌年の一月には、長男が生まれたのである。[1] 張が「脅迫」を通して述べているように、「日本語の勉強のため」だけに野口桂子と結婚して子供まで授かったかどうかは確かめようがないが、植民地期、内鮮恋愛や結婚の問題を作品に扱った時期が、実際の生活のなかで野口桂子と同棲をはじめた後であることを考えると、野口桂子との同棲・長男や次男の誕生など、内鮮結婚と二世の誕生が張の「日本語への傾斜をもたらし、日本文化への傾斜に赴かせ、最終的には日本への同化を導き」[2] 出したことは充分考えられる。

このように、張の親日的文学活動と、帰化までの道のりを考える際には、日本にいる家族の存在（影響）を無視して述べることはできない。しかし、それに加えてもう一つ念頭におかなければならないことは、彼には日本の家族だけではなく、朝鮮にも妻と子供がいたことである。一九一九年（一四才）、母親に勧められて、四才年上の金貴行と早婚した張は、以後、貴行との間で二男三女をもうけた。[3]

張の帰化後の自伝小説には、このような朝鮮の家族（主に母親と前妻）に対する不満と、憐憫の情が入れ交じった叙述が目立っており、芸者の私生児として生まれた自分の生い立ちを恨み、母親と年上の妻に対する精神的苦悩を描き出す場合が多かった。例えば、帰化

後、野口赫宙に筆名を変えて出した短編「戸籍謄本」をみると、張の分身である「私」は、日本で生まれた長男の高校受験をきっかけに、昔、芸者の私生児として生まれ、周囲から軽蔑されてきた過去の記憶を想起していく。

「私」の母は、「舊韓国軍の府駐屯部隊の師団長」であった裵氏の妾であったが、その部下の張氏と肉体関係を持ち、「私」を生んだ。この事実がばれることを恐れて、母は生まれたばかりの「私」を連れて、朝鮮の西端から南の果てまで逃げ回った。「私」は、私生児であることから小学校に上がるまで戸籍を持たなかったが、実の父親である張氏の息子たち（二人）が相次いで早死して跡取りがいなくなったために、父親の戸籍に入ることができた。しかし、先方には本妻が健在していたため、謄本には「庶子」として載るしかなかった。この「庶子」という肩書がしばしば「私」に苦痛を与えて、高校への受験面接の際には、志願書に添えられた戸籍謄本のせいで面接官に恥をかかせられ、屈辱を味わなければならなかった。このように長い間「私」を悩ませた戸籍上の問題は、嫡母が亡くなってから、自然解消されていった。しかし、母は勝手に「私」を年上の女性と結婚させて、「私」はどうしても愛せられない嫁と、自分の人生を振り回してきた母から逃げる気持ちで、日本への渡航を決心したのである。しかし、日本で圭子と出会って、新しい家庭を築いたにもかかわらず、前妻の存在が邪魔になって、圭子と子供を自分の籍に入れることはできなかった。それが、終戦の翌年、母と前妻が相次いで亡くなり、やっと日本にいる妻と子が仲良く名を連ねて謄本に載ることができたのである。そして「私」は、高校の入学式を迎えた長男に清々しい気持ちで戸籍謄本を渡せるのである。

右のように、「戸籍謄本」は、「私」の生い立ちに関わる幼少年の記憶を中心に、長い間、戸籍謄本に縛られて惨めな思いをしてきた「私」の苦悩が描かれている。さらに、ここには母親と前妻に対する過去の記憶が、常に「私」を不幸な気持ちにさせてしまう負の価値として表れていた。特に、他の自伝小説にも繰り返し描き出されている母親に対する否定的な認識は、張赫宙の生来的劣等感を考える上で、重要な手掛かりになる。

張の代表的な自伝的長編『遍歴の調書』（新潮社、一九五四）を見ると、「私」は自分の母親（生母）について、「生母は十六の時に妓生になつたといふからそのからだは男から男への放浪で汚されてゐる」と言っている。このような「生母」が、「私」を生んだのは彼女が三〇才に近くなっていた時であった。それ以後「私」は、「生母」が幾人も男を取り替えるのを見ながら育って、ある時には、丸裸になって男に抱かれている「生母」を見て、吐

き気を催したことがある。その吐気は、いく日たっても治らないで、「私」に男女の性愛を嫌悪する習癖を残したのである。

このように『遍歴の調書』は、芸者出身で奔放な男性遍歴を持っている「生母」から悪影響を受けて、男女の性愛を嫌悪するまでになった「私」が、「生母」の欲情を醜く思いながらも、自分もまた複数の女性と「姦淫の罪」を犯してしまったことを告白していく。そして「私」は、「生母」から受け継がれた汚れた血による女性遍歴を自責しながら、雪枝との不倫関係を清算して妻（圭子）のもとに帰るのである。

圭子は、父親の反対にも関わらず、長い間貧しい生活を切盛りしながら「私」に尽くしてくれた。「私」は、彼女の献身的な愛に救われ、暗かった幼少年の記憶から少しずつ立ち直ることができた。つまり、「私」にとって圭子の存在は、不幸な過去から脱却させてくれる「救い主」であり、さらには「私の文学」に欠かせない日本語勉強の「糸口」であったのである。

金鶴童[4]は、『遍歴の調書』について「生来的劣等意識と朝鮮の妻による苦悩、そして、自らの女性遍歴により圭子が経験した苦痛の時間を、自虐的な書き込みで完成することによって、自らの精神的カタルシスを求める同時に、圭子の苦労に対する感謝の気持ちを伝えようとした作品」であると述べている。もちろん、『遍歴の調書』は、金が指摘しているように、自らの女性遍歴に対する「自虐的な書き込み」が目立っており、作者はそのような「書き込み」を通して心の浄化（カタルシス）を求めていたかも知れない。しかし、果たして張はこの作品を、長い間苦労をかけ、世話になった妻に（桂子）に対する感謝の気持ちで書いただろうか。

前述したように、圭子は「私」を暗い過去から脱却させてくれる「救い主」であり、日本語の世界に導いてくれる「糸口」であった。そのような圭子の御蔭で「私」は過去の「不浄」な身から「清浄」されることができたのである。しかし、生活が苦しくなるにつれて圭子は物事をズバッと言うようになり、それを不満と思っていた「私」は、一七才も若い雪枝と不倫関係に陥って、同居までするようになる。圭子は「私」の心を家族に向かせようとやさしく接してくるが、「私」の肉体は、「生母」の血が暴れ出して、夜になると雪枝の匂いが恋しくなる。結局、「私」は雪枝との関係を清算して圭子のもとに戻るが、それは、「私」から、というより、むしろ雪枝の決断によるもので、優柔不断な「私」は雪枝から先に別れを告げられることによって、やっと欲情の苦悩から抜け出すことができたのである。

このように、「私」は、雪枝との不倫を通して、自分の血の中に潜んでいる悪魔の存在に気付き、母親から受け継がれた血の「宿命」を強く認識するようになる。ここで、圭子の存在は、これまでのように「私」を「不浄」な身から「清浄」に導いてくれる救い主ではなかった。つまり、「私」は、圭子を通して心の「清浄」を求めていたが、結局は、「生母」から受け継がれた血の宿命を再認識するばかりで、後からは「姦淫の罪を清浄する方法があるだらうか」と、自分の罪を悔い改めることもできないのである。このような「私」の心理状況から考えると、『遍歴の調書』は、「圭子の苦労に対する感謝の気持ちを伝えようとした作品」というより、むしろ、圭子の愛によって「清浄」されていると思い込んでいたあらゆることが、単に「私」の願いであり祈りに過ぎなかったことを告白しているのではないだろうか。

「私」は、不幸で暗かった過去から逃げ出したい気持ちで日本に渡航し、それ以後、妻の国（日本）に同化しようとあらゆる努力をしてきた。それだけに、抗し難い血の宿命に対する再確認は、「私」の心理的不安を高ませたに違いない。つまり、『遍歴の調書』は、第三章で述べた「脅迫」に続く、作者（張赫宙）の心理的不安をベースにした作品であると言えるのである。このように、帰化後の張は次々と心理的不安を表す自伝作品を書いているわけだが、そこにはどのような執筆背景があっただろうか。

次節では、「異俗の夫」の作品分析を通して、帰化後の張赫宙について考えてみたい。

二．習俗として残る民族の残滓―「異俗の夫」

「異俗の夫」（『新潮』、一九五八・五）は、日常生活における習慣の違いで妻（圭子）と口論をした「私」が、妻との出会いから日本に帰化するまでの経緯を語って行く。そこで「私」は、出身の特殊性と、書くものの民族性を自ら塗りつぶして、同化へと方向を変えた最大の理由は他ならぬ「妻だ」と述べている。つまり、母親や前妻から逃げ出して東京にきた「私」は、日本で出会った圭子に救われ、結局は、帰化に辿り着くようになったというわけである。「私」が圭子に夢中になった理由は、何より彼女が「私」の「血の民族性を問題にしない」からであった。東京に来て孤独を感じていた「私」は、圭子の優しさと気配りに深く感動して、彼女が自民族を不幸に貶めた日本人であることは左程問題にならなかった。むしろ、彼女に対する愛情が増すにつれて、「私」の民族意識は次第に心から消え去っていったのである。

しかし、失われた民族意識を代弁するかのように、「私」には民族の習慣がつきまとい、日常生活におけるちょっとした習慣の違いを指摘されるたびに「民族的な」侮蔑を感じる。そして、日本人になりきれると思い込んでいた自分が情けないように思われるのである。特に、「私」の苦労を誰よりよく知っているはずの圭子から習慣の違いを不満そうに言われる場合は、何もかも捨てたい気持ちにさせられるのである。しかし、そのような「私」を引きとどまらせてくれたのは「言葉」であった。そして、その上に成り立つはずの「文学」であった。

戦後、在日朝鮮人民族団体から脅迫を受けていた「私」は、「言葉と文学」を捨てられず、自民族を敵にまわす立場をとらざるを得なかった。そのような「私」に、帰化は「予定のコース」であるかのように受け取られたのである。しかし、圭子は「私」に対する不満を民族から受けた嫌がらせや憎悪と結び付けて、帰化して国籍は変わっても「民族」や「血」は変わらないと、「私」の努力に水をさすような発言をする。同化したために文学的特徴を失い、作家としての立場に不安を抱いていた「私」は、圭子の言葉に「純粋な日本語をぼくはきっと書いてみせる」と、意地を張ることしかできず、別居を宣言して家を出て行く圭子を冷たい目で見送るのである。

右のように、「異俗の夫」は、帰化後民族的な特徴を失い、作家として下り坂になった張赫宙の不安を背景に、長い間、妻の国（日本）に同化しようと努力してきたにも関わらず、それを一番良く知っているはずの妻からも否定されるという、帰化後における張赫宙のアウトサイダーとしての立場をよくあらわした作品である。そして、ここには、障子の張り方や座り方など、日常生活における習慣の違いが、そのまま民族の残滓として受け取られ、日本語を完成させて、より良い文学を作り出して行こうする「私」の希望を絶望に変えていく。

「私」の初期作品が日本で受け入れられたのは、題材の異国性にもよるけれど、舌足らずで素朴な文章がエキゾチックで面白いという評価も多かった。しかし、「私」はそのような評価に安住することができず、もっと純粋な日本語を駆使して作品を書きたい願望が強かった。純粋な日本語は、その言葉を常用する人を書くことで生き、標準語の裏に根強く横たわっている方言を身につけなければならない。それは、植民地の日本語しか知らない「私」にとって、成し遂げられない難事業であったのである。「私」は、「言葉」と「文学」のために、自分の心から朝鮮を追い出して、日本を受け入れた。そして、言葉を完成するためなら、どんなことにも耐えて行こうと誓ったのである。そのような初志と努力をよく

知っている妻であるからこそ、一人個人の性格をそのまま民族の特性と押しつけ、民族的侮蔑を加えることは許せられないのである。

妻は、別居を決めて家を出る前に、「百パーセント同化しきれる訳もないけれど、同化しきったら何もならない」ことを言い出し、「初期のあなたが個性のはつきりした作品を書いたように、これから先あなたらしい特長のある仕事をのこして下さらないと、あたしも困ります」と言った。妻の指摘のように、帰化後の「私」は、胡坐をかくこと一つにも習慣の差異がつきまとう圧迫感の中で生活をしており、安易に同化し、日本人になりきれると思っていたことに裏切られたような孤独を感じている。そして、このような孤独感は、なぜ自分が妻の国に同化しなければならなかったのかに対する根拠と苦労を次々と語っていくのである。

しかし、そのような苦労を述べて行く過程において、作者として下り坂になったのは妻のせいであり、自分の文章が下手な理由は、赤ん坊の言葉を知らないためであるとひとり合点して、「言葉」の勉強のために「自分の赤坊を持つ必要」を感じたと言うなど、文学一点のために日本に同化しようした「私」の苦労を述べているはずなのに、それがむしろ弁明と愚痴に成り変わっている印象を与えているのも事実である。

小島輝正[5]は、「異俗の夫」について次のように述べている。

野口赫宙の「異俗の夫」にもぼくは新しいものをみとめない。なるほどこの人でなければ書けないことがここには書かれている。せつせつとむしろ書かれていてやりきれない気持に人をさせる。私の不幸を人は十分に推察することができる。しかしそれをこういう形でしか表現することのできない作家としてこの人の不幸には単純に同情してはならないという気がぼくにはある。

「異俗の夫」は、右の批評でも見られるように、作者自身の体験をもとに、自分がなぜ日本に同化し、帰化に辿り着くようになったのかを、不幸な幼少年時代の記憶から、戦後における自民族からの迫害まで、痛切に書いており、読む人をやりきれない気持ちにさせてしまう、「一種しょう（蕭）条たる作品[6]」であると言える。そして、このような落胆を引き起こすような語りかけは、戦後における張赫宙の自伝的小説の特徴でもあった。

前述した帰化後の自伝作品（「脅迫」、「戸籍謄本」、『遍歴の調書』）を見ても、作者の苦悩が繰り返し語られており、悲痛な印象さえ与えている。これは、帰化後における心理的不安と孤独感がそのような作品を書かせた、とも解釈できるが、「異俗の夫」の後半部において、妻が「この頃、あなたが同化しきろうという瀬戸際で、民族という形はそれは無く

なつていても、あなたが怒つたり、いやに淋しい顔なさつたりすると、却つて民族のいやみにとれるから不思議だわ。根底には無くなしていないわけでしょう（中略）そこのところを生かすのが、あなたの仕事の発展になると思うの」と言っているように、帰化してこれまでの文学的特徴（「民族」）を失ってしまった作者が、自分しか書けない精神的苦悩を作品に生かして、新たな作家的特徴を作り出して行こうとしたのではないだろうか。

しかし、このような試みが、必ずしも世間から受け入れられる訳ではなかった。「異俗の夫」については、前述した小島輝正の批評にも表れているように、「私」の不幸がかけがえのない作家の個性として認められることはなかった。第三章で検討した「脅迫」の場合も同じことが言える。梅崎春生[7]は、「脅迫」について次のように述べている。

張赫宙「脅迫」は終戦後作者が民族の裏切者として脅迫された話一種の私小説であるが、ここでは作者の切実な苦悩をぶちまけるというよりはしどろもどろな弁明に終わっている。この作品を支えているものはむしろ非文学的な精神だろう。

このように、帰化後における自伝小説は、張赫宙の「弁明」と愚痴として受け取られる場合が多く、このようなマイナス評価は、長い間「言語」と「文学」だけを追い求めてきた張に、更なる絶望感を抱かせたに違いない。

その他、野口赫宙に筆名を改めて出した作品の同時代評をみても、「面白いと正反対なのは野口赫宙の「選挙」[8]」[9]、「「権力者」[10]は危機を冒して李承晩に会つたりするところがあつて興味があるが、この人のおかれているむずかしい地位が、この人に本心を語らせず、この作品を面白くないものにしている」[11]など、帰化後の作品は、以前のように注目されることはなかった。このような下り坂に危機感を抱いたのか、張は、日本の国内問題に関心を深めて、結核や癌といった難病を扱った『黒い地帯』（新制社、一九五八）や『ガン病棟』（講談社、一九五九）を書く一方、『湖上の不死鳥』（東都書房、一九六二）などのミステリー小説にも手を染めた。

さらに、自分の出自たる朝鮮と、日本との歴史的関係に眼を向けて『韓と倭』（講談社、一九七七）と『陶と剣』（講談社、一九八〇）を書き上げた。この二作は、多数の文献を参考にして書かれた研究書のようなもので、張（野口）はここで、歴史を辿りながら日韓の同質性を立証して、なお自分のルーツをも確かめようとしたと考えられる。

さらに、このような傾向は、民族のルーツを探るという壮大な試みにまで達し、それは『マヤ・インカの縄文人を追う』（新芸術社、一九八九）の刊行にまで至った。このような自らの、そして民族のルーツに対する執拗な関心の特続は、彼自身が完全に民族から自由

ではなかったことの証に他ならない。そして、それは、そもそも彼自身が祖国と自民族を捨てた（帰化した）ことに端を発していたのである。

張は自らの、そして民族のルーツを辿り、それがほとんど人類のルーツにまで繋がっていることを立証しようとすることで、自分が歩んできた人生を、いわば世界史における普遍的な過程の一部として根拠づけようとしたのであろう。そのような意味から考えると、一九五二年の帰化は、自己確認の出発として意味付けることも可能ではないだろうか。つまり、張赫宙の帰化は「心の相剋」の終焉ではなく、根拠なき自己の根拠の確認に向かう果てしない彷徨の始まりだったのである。

三．おわりに

以上、「張赫宙研究」において課題とされて来た戦後（終戦から帰化まで）に注目して、作品及び文筆活動における実証的な調査をはじめ、日本の時代状況や同時代評を合わせて考察することを通して、張赫宙が帰化に辿り着くようになった過程と、その過程における内的論理（必然）を考察した。

これまでの張赫宙論は、初期作品にあらわれる民族意識の考察や朝鮮出身作家の日本文壇デビューの意味分析、さらには、張赫宙が日本の帝国主義に傾倒していく過程におけるアイデンティティの錯綜などが、考察対象となる場合が多かった。そして、張の帰化は、戦前における親日行為の延長線として解釈される場合が多く、戦後の思考はそれほど問題にされていなかった。

もちろん、張は、戦前の親日行為によって、戦後、自民族から脅迫を受けるなど、金達寿や許南麒など、戦後から本格的な執筆活動を始めた在日朝鮮人文学者たちとはまったく違う立場で戦後を迎えたのは確かである。しかし、当時の張が民族に戻り得る道がまったくなかったわけではなかった。むしろ、朝連や民団のどちらかに所属して民族のために活動した方が、様々な迫害を受けないで済んだかも知れない。

しかし、張は戦後の早い時点から自分の文学の道を日本に求めた。そこには、日本語しか知らない家族に対する配慮や、自己批判を要求する在日朝鮮人達への不満など、様々な理由があったと考えられるが、何より張を日本に留まらせた最大の要因は、「私の文学」に対する思いであった。

日本語で始まった「私の文学」は、より高度な文学的表現を求めて、日本語を常用する

日本人の習慣と意識の背景になる「日本の心」まで追求するようになっていた。そのような過程の中で、初期の民族意識は徐々に薄れて行き、遂には植民地政策である内鮮一体を肯定する立場を取るに至ったのである。

本論文は、右のような張赫宙が、戦後の混沌した状況の中で、「私の文学」を守るためにどのような行動をとり、戦後作品にいかなる影響を与えたのかを考察したものである。

以下、戦後の張赫宙について章ごとにまとめておく。

第一章では、終戦直後における書誌的考察を中心に、在日朝鮮人民族団体から「新生」の条件として自己批判を求められた張が、戦前の親日行為をどのように認識して行くのかを自伝的小説「民族」の作品分析を通して考察した。

終戦直後の日本では、国民生活を悲惨な状況に陥れた責任者の戦争責任追及に熱心であり、知識人らが侵略戦争に巻き込まれ、協力してしまったことを、主体性の弱さとして反省し、日本の近代文学の歴史を批判的に検討する作業に取りかかっていた。このような社会状況の中で、張は「民族」（一九四七・四～六）を書いて、植民地期における主体性の弱さを告白し、自己批判をも重ねていた。しかし、このような自己批判と反省は、「民族」以後の作品には見られない。「民族」以後の作品は、終戦直後における様々な人間像（日本人）を描いたものが多く、一九四九年、朝連がＧＨＱによって解散させられるまで、張は、あえて朝鮮や朝鮮人に対する執筆や発言を自ら封じていたのである。金達寿や許南麒などの在日朝鮮人文学者が、戦後、在日朝鮮人民族団体や新日本文学会に所属して、朝鮮民族の権利獲得や民族教育の普及などの民族運動に携わっていたのと違って、張は、終戦から約二年も過ぎないうちに、自ら民族に帰り得る「新生」の道を諦めて、日本人作家として生きて行くことを選んだのである。

本章では、終戦直後における張赫宙の執筆活動を手掛かりに、それが他の在日朝鮮人作家（金達寿、許南麒）とどのように違っていたのかを比較検討して、「戦後の出発」における張の固有性を確認した。

第二章では、終戦直後における張赫宙と在日朝鮮人との関わりを検証し、その関わりのなかで抱いた不満と反抗心が、主に一九四九年と一九五二年に活字化されていたことを確認した。この時期には、吉田政府による在日朝鮮人の取締りが厳しくなっており、マスコミもほとんど取り締まる側の立場に立って、朝鮮人が関わった事件を、犯罪として大きく報じていた。このようなマスコミの朝鮮人攻撃に、自らの不満と反抗心を重ねて手助けをしたのが、張赫宙であった。張がマスコミを通して主に語った内容は、戦後在日朝鮮人の

暴力と思想の問題を批判的に論じて、朝鮮人の無条件の自粛を求めるものであった。すなわち、マスコミの側からすれば、朝鮮人インテリである張を招いたことによって、在日朝鮮人の取締りに根拠を与える効果が得られたことになる。

張は、そのような文章を書いたのは「同胞の身に災いなかれ」という「朝鮮の心」もあったと言う。しかし、戦前から抱いていた朝鮮人としての後ろめたさ（劣等感）、或いは戦後の関わりによる在日朝鮮人に対する不満と反抗心が心の壁になって、結局張には、自民族に自らを完全に同一化することはできなかったことを、本章を通して確認することができた。

第三章では、自伝的小説「脅迫」の主人公「私」と張の自己認識の過程を重ねみることを通じて、終戦直後から「帰化」に至るまでの自己認識のなかで現実的な不安がより深い実存的不安に変わっていく過程を考察した。

終戦後、朝鮮人としての民族性と、それを語る資格に欠けていることを自覚した張に、残されていたのは日本語であった。日本語を用いることで、戦前以来の「日本の心」の追求の延長線上に、もはや「翻訳的小説」の水準にはとどまらない、「私の文学」が可能になるはずであった。彼にとっては、これが実存的不安から逃れるための唯一の希望だったのである。そして、この希望を実現したいという思いが、一九四八年頃から急増した児童向け著作の執筆に繋がったと考えられる。

第四章では、戦後における児童文学界の状況を踏まえて、一九四八年頃から急増する張赫宙の児童向け著作の内容を検討した。さらに、張が児童向け著作を通して目指そうとした文学的可能性と、「春香伝」翻案を通して見られる「新しい文学」への志向性について考察した。

張の児童向け著作には、戦後の再出発をテーマにしたものや、児童たちの関心を反映した読物が多く見られる。このような児童向け著作の背景には、あきらかに戦後児童文学界における新しい欲求と、それを支える大衆雑誌出版産業の地盤があったといえよう。つまり、そういう商業ジャーナリズムによって、終戦後、政治と文学論争が展開された大人の文学界で仕事をもらえなくなった張が、短期間において多数の児童向け読物を著作することができたのである。しかし、張は単純に金銭的報酬だけを執筆の目的にしたのではなかった。言い換えれば、彼はその営みを通して、「私の文学」が生まれ変わることを強く望んでいたと言える。戦後、作者としての立場に危機感を抱いていた張にとって、「私の文学」に対するあり方を再確認し、新しい自己を見出していくことは、再出発に向ける必然的な

行為だった。そのような意味で張の児童向け著作は、戦後における張赫宙の再出発の文学として位置付けることができるのである。

第五章では、張赫宙作『嗚呼朝鮮』（一九五二）に関する同時代評を丁寧に読み直す作業を通して、朝鮮戦争を形象化した『嗚呼朝鮮』が孕む問題を考察した。

朝鮮戦争を形象化した『嗚呼朝鮮』は、当時の日本にあまり伝わらなかった時事的事件を多く描いており、その中でも韓国政府や軍の不正・腐敗に対する叙述が目立っている。それは、張のジャーナリスト的姿勢によるものと言っても過言ではないが、同時にそのような知られていない事実こそ、朝鮮民族を幾重にも苦しめる「祖国朝鮮の真実の姿」である点を考えると、作者の訴え（怒り）は、やはり同胞に対する愛情から発したと言える。

しかし、主人公の希望が絶望に変わる後半部をみると、当時における時事的問題（巨済島捕虜暴動事件）を取り上げているので、読者の関心を引くには十分な展開であると言えるが、祖国や同胞に対する作者の愛情は感じ取れない。つまり、『嗚呼朝鮮』の後半部におけるストーリーの転換（希望→絶望）からは、執筆時における作者の微妙な立場による（祖国に対する）愛情のゆれが見えてくるのである。

第六章では、二度目の朝鮮取材以後に書いたルポルタージュや小説を通して、当時の張が祖国の惨状をどのように見つめていたかを検証した。さらに、『無窮花』の内容分析を通して、張が最も危惧していた「民族の哀しみ」を探ると共に、この作品を通して作者が同胞に伝えたかった真のメッセージを考察した。

張は二度目の朝鮮取材を通して、生活のためにモラルを失っていく女性や怨恨の裏返しによる民族性の崩壊など、数々の不幸を目の当たりにして、民族を不幸に追いやる最大の「民族の哀しみ」は、ほかならぬ民族の「激烈な性情」にあると考えた。このような考えは、人民軍の看病に携わりながら「みんな同胞で、祖国の幸せを願はぬものはゐなかつた」と、さらなる同胞愛に目覚めていく玉姫を通して、同胞としての連帯感と同胞愛を呼び掛けていたのである。即ち、『無窮花』には、祖国の平和を祈りながら、祖国を離れていく者の切実な思いが込められていたのである。

結章では、「おわりに」を兼ねて、帰化後の自伝小説の内容を分析した。帰化後に書いた自伝作品には、朝鮮の家族（主に母親と前妻）に対する不満と、憐憫の情が入れ交じった叙述が目立っており、芸者の私生児として生まれた自分の生い立ちを恨み、母親と、年上の妻に対する精神的苦悩を描き出す場合が多かった。

さらに、『遍歴の調書』と「異俗の夫」では、妻の国に同化しようと長い間努力してきた

主人公（「私」）が、「抗し難い血の宿命」や、習慣としてつきまとう「民族の残滓」に悩み続ける様子が描かれている。このような自伝小説には、帰化して「民族」という作家としての特徴を失って、下り坂になってしまった張赫宙の不安な心情が反映されており、作者はそのような自分の不幸な人生を文学に生かして、新たな作家的特徴を作り出して行こうとしたと考えられる。しかし、そのような試みは、却って「弁明」と愚痴として受け取られる場合が多く、張は、帰化以前のような世間の注目を集めることはできなかった。

イソップ寓話（「蛙と牛の群れ」）を見ると、井戸の中に住んでいた大きな蛙が、外の世界に憧れて、自分の体を膨らませて井戸の外に出てみたところ、そこには大きい牛の群れがあって、はじめてみた牛にあまりにも驚いた蛙は、腹から空気が抜けてしまい、草原の上に飛ばされてしまった、という話がある。この寓話が与えてくれる教訓は別として、草原に落ちてしまった蛙のその後を、張赫宙の生き様に例えて考えることはできないだろうか。張赫宙は蛙のように、朝鮮という井戸の中で安住することができず、外の世界（日本）に憧れていた。しかし、井戸の外には大きい牛（日本人・日本人作家）の群れがあって、いくら牛と同じようになろうと体を膨らませてみても、その群れの中に入ることはできなかった。

一方、戦後の在日朝鮮人文学者たちは、自分の故郷が井戸であることを忘れていなかった。つまり、彼らは井戸に帰る道を忘れまいと、その周辺をくるくる回りながら泣き続けていたのである。しかし、張は、もとから井戸の外で生まれたようにふるまった。彼は、牛の言葉を学んで、牛の仕草まで体得し、完全に牛になっていたと自負した。しかし、牛たちは、彼を仲間として認めなかった。牛たちの眼には、ただ、牛のまねをする蛙にしか見えなかったのである。

しかし、張には、「私の文学」という軸があった。この「私の文学」には、井戸の生活から牛の群の中で忘れられていく張赫宙ならではの物語がある。その物語を「終戦」や「帰化」と言った線引きをし、それ以後の人生は価値のないものにするのは妥当であるだろうか。張赫宙が生きたその時代が、現在に至るまで日韓両国に消え去ることのない傷を負わせたことを考えると、張赫宙の生き様と、その文学に対する帰趨を見届けていく作業は、植民地期に日本語創作をした朝鮮人作家の様相研究にも新たな視点を提示できると考える。

本論文が、今後における張赫宙の戦後研究と、植民地期に日本語創作をした朝鮮人作家の多様性を考える上での一助となれば幸いである。

四．本論文の成果と課題

本論文の成果としてまず挙げなければならないことは、現在まで本格的に検討されていなかった、張赫宙の戦後著作をまとめて、「張赫宙戦後著作年譜」を完成させたことである。先行研究における「戦後著作年譜」は、著作名や刊行月が事実と異なるところが少なくなかった。従って、本年譜においては、なるべく資料の実物を確認して、正確な年譜作成を心がけた。また、先行研究では言及されているが、雑誌掲載、もしくは単行本刊行が確認出来ない著作は除外し、筆者が新しく見つけた著作を補足した。

その中でも、終戦直後、民団で活動しながら異なる執筆名を用いて書いた著作物や、今まで殆ど言及されることがなかった児童向け著作を一次資料から収集し、その作品分析はもちろんのこと、終戦直後の児童文化を概観して、張赫宙の児童向け著作に対する意味づけを試みたことは、本論文における大きな成果であると言える。

さらに、張赫宙と在日朝鮮人たちとの関わりだけではなく、当時におけるマスコミの動向を実証的なデータに基づいて考察し、在日朝鮮人達と張赫宙との間に生じた溝が、どのように深まって行ったのかを説明できたのは、戦後の張赫宙を考える上で、欠かせない視点を提示できたと考える。

なお、第五章で論じた『嗚呼朝鮮』論は、作品分析だけではなく、同時代評を丁寧に読み直す作業を通して、同時代における『嗚呼朝鮮』の問題を追究することができた。さらに、『嗚呼朝鮮』と同じく、朝鮮戦争を題材にして書いた『無窮花』の作品分析では、張赫宙の民族意識の深層を考察して、この作品をきっかけに筆名を野口赫宙に変えて再出発する張赫宙が、『無窮花』の執筆に込めていたメッセージを読み取ることができた。

以上、本論文は、終戦から帰化までにおける張赫宙の足取りを辿りながら、張赫宙の文筆活動及びその意味を明らかにすることを目標とした。このような本研究は、今後における張赫宙戦後研究に、新たな視点と可能性を提示できると考える。

しかし、前述したように、本論文の研究範囲は終戦から帰化直後までに限定されており、戦後の張赫宙の全貌を明らかにしたとは言い難い。帰化後の張赫宙は、日本の国内問題に関心を深めて、『黒い地帯』（一九五八）、『ガン病棟』（一九五九）など、結核や癌といった難治の病を扱った社会小説や、『黒い真昼』（一九五九）、『湖上の不死鳥』（一九六二）などの推理小説も書いた。さらに、自分の出自たる朝鮮と、日本との歴史的関係に眼を向けて『韓と倭』（一九七七）と『陶と剣』（一九八〇）を書く一方、日本の古代人とマヤ・イン

カ人との関係を追究した『マヤ・インカに縄文人を追う』（一九八九）を刊行した。なお、晩年においては英語による執筆も試みて、二編の長編作品がインドのニューデリーで刊行された。[15]

このような、帰化から晩年における執筆活動に対する研究が完結されることによって、植民地期における「屈従」の作家張赫宙の生き様とその意味が、より立体的に把握できるはずである。これらの分析は今後の課題として残したい。

注

（1）白川豊（『張赫宙研究』、東国大学校博士学位論文・一九八九）によると、野口桂子は野口喜平次の三女で、深谷実践女学校を卒業したという。

（2）南富鎮「「内鮮結婚」の文学―張赫宙の日本語作品を中心に」（『人文論集』静岡大学人文学部人文学科研究報告、二〇〇四・七）

（3）注（1）の「張赫宙関係年譜『1905～45年』」によると、張は、一九一九年（一四才）頃に早婚して以後二男二女を設けた、と記されているが、二〇〇三年に出版された南富鎮・白川豊編集の「張赫宙日本語作品選」（勉誠出版）の「張赫宙略年譜」では、一四才に早婚して「二男三女をもうけた」と書いてある。一方、金鶴童（「張赫宙の日本語作品と民族」、国学資料院、二〇〇八*韓国語）は、張赫宙の自伝的作品『遍歴の調書』の内容をもとに、張が一九二二年（一七才）に結婚をしたと見ている。本稿では、南富鎮・白川豊編集の「張赫宙日本語作品選」（勉誠出版）の「張赫宙略年譜」に従い、述べることにする。

（4）金鶴童『張赫宙の文学と民族のくびき』（『亦楽』・二〇一一*韓国語）

（5）小島輝正「抑揚のない語り口―五月の雑誌小説から（下）」（『アカハタ』、一九五八・四・二三）

（6）小松伸六「力作は室生の〈黄ろい船〉―五月号、文芸・総合誌の小説」（『信濃毎日新聞』、一九五八・四・二一）

（7）梅崎春生「読みごたえのある中編もの―三月号の雑誌創作評」（『神戸新聞』、一九五三・二・二七）

（8）野口赫宙「選挙」（『文藝』、一九五五・八）

（9）本多顯彰「「母子像」（久生十蘭）と「記念碑」（堀田善衛）―面白さが何より大切である」（『毎日新聞』、一九五五・七・二六）の「小説案内」における読者感想。

（10）野口赫宙「権力者」（『新潮』、一九五四・一一）

（11）本多顯彰「制約された実名小説―「権力者」「碑と未亡人」「丙午会」など」（『東京新聞』夕刊、一九五四・一〇・二六）

（12）白川豊の「張赫宙の生涯と文学」（『人文論総』、二〇〇二・八）によると、張は一九九〇年に入って、四編の英語長編小説を計画しており、その内、次の二編は、一九九一年にインド・ニューデリーにある出版社で刊行されたという。

・『Forlorn Journey (or KikiSitan)』

・『Rajagriha-A tale of Gautama-Buddha』

初出一覧（各章とも、初出稿に大幅な加筆修正を加えた）

序章……書き下ろし

第一章……書き下ろし

第二章……「張赫宙の戦後の出発―在日朝鮮人民族団体との関わりを中心に」（『社会文学』、二〇一三・七）

第三章……「「脅迫」論―実存的不安をめぐる作者の軌跡」（『昭和文学研究』、二〇一一・三）

第四章……書き下ろし

第五章……「祖国に対する愛情のゆれ―張赫宙『嗚呼朝鮮』を中心に」（『昭和文学研究』、二〇一三・三）

第六章……書き下ろし

結章……書き下ろし

付表・（張赫宙戦後著作年譜）……「張赫宙戦後著作年譜稿」（『埼玉大学紀要・日本アジア研究』第八号、二〇一一・三）

参考文献

〈単行本〉

・韓国語

金鶴童『張赫宙の日本語作品と民族』（国学資料院、二〇〇八）
金鶴童『張赫宙の文学と民族の頚木』（亦楽、二〇一一）
梁寧祚『6.25戦争史　第三巻』（国防部軍史編纂研究所、二〇〇五）
兪淑子『在日韓国人文学研究』（月印、二〇〇〇）

・日本語

磯貝治良『「在日」文学論』（新幹社、二〇〇四）
磯貝治良・黒古一夫『「在日」文学全集1・金達寿』（勉誠出版、二〇〇六）
磯貝治良・黒古一夫『「在日」文学全集2・許南麒』（勉誠出版、二〇〇六）
磯貝治良・黒古一夫『「在日」文学全集11・金史良・張赫宙・高史明』（勉誠出版、二〇〇六）
磯貝治良・黒古一夫『「在日」文学全集17・詩歌集』（勉誠出版、二〇〇六）
伊藤氏貴『告白の文学』（鳥影社、二〇〇二）
任展慧『日本における朝鮮人文学の歴史』（法制大学出版局、一九九四）
岩波講座『近代日本と植民地6、抵抗と屈従』（岩波書店、一九九三）
岡野幸江／長谷川啓／渡邊澄子『買売春と日本文学』（東京堂出版、二〇〇二）
鎌田慧『「新日本文学」の60年』（七つ森書館、二〇〇五）
川村湊『戦後文学を問う―その体験と理念』（岩波書店、一九九五）
川村湊『生まれたらそこがふるさと』（平凡社、一九九九）
川村湊『温泉文学論』（新潮社、二〇〇七）
姜尚中『在日ふたつの「祖国」への思い』（講談社、二〇〇五）
神崎清『売春』（青木書店、一九五五）
金素雲『天の涯に生くるとも』（講談社、一九八九）
金達寿『金達寿小説全集一～七』（筑摩書房、一九八〇）
高榮蘭『「戦後」というイデオロギー』（藤原書店、二〇一〇）
白川豊『朝鮮近代の知日派作家、苦闘の軌跡』（勉誠出版、二〇〇八）

竹田青嗣『「在日」という根拠』（筑摩書房、一九九五）
張赫宙『愚劣漢』（富国出版社、一九四八）
張赫宙『恩を返したツバメ』（羽田書店、一九四九）
張赫宙（＊野口実）『異国の嵐』（偕成社、一九四九）
張赫宙（＊野口実）『港の聖花』（偕成社、一九四九）
張赫宙（＊野口実）『流れの旅路』（偕成社、一九五〇）
張赫宙『嗚呼朝鮮』（新潮社、一九五二・五）
張赫宙（＊野口赫宙）『無窮花』（大日本雄弁会講談社、一九五四）
張赫宙（＊野口赫宙）『遍歴の調書』（新潮社、一九五四）
張赫宙（＊野口赫宙）『嵐の詩』（講談社、一九七五）
鳥羽耕史『１９５０年代―「記録」の時代』（河出書房新社、二〇一〇）
鳥越信『戦後児童文学への証言　第一部』（理論社、一九七八）
鳥越信『戦後児童文学への証言　第二部』（理論社、一九七八）
鳥越信『日本児童文学』（建帛社、一九九五）
中根隆行『「朝鮮」表象の文化誌』（新曜社、二〇〇四）
南富鎮・白川豊『張赫宙日本語作品選』（勉誠出版社、二〇〇三）
根本正義『昭和児童文学の研究』（高文堂出版社、一九八四）
根本正義『占領下の文壇作家と児童文学』（高之堂出版社、二〇〇五）
朴春日『近代日本文学における朝鮮像』（未来社、一九六九）
林浩治『戦後非日文学論』（新幹社、一九九七）
文京洙『在日朝鮮人問題の起源』（クレイン、二〇〇七）
許南麒訳『春香伝』（岩波書店、一九五六）
本多秋五『物語戦後文学史・中』（岩波書店、一九九二）
マーク・ゲイン『ニッポン日記』（筑摩書房、一九五一）
山田盟子『占領軍慰安婦』（光人社、一九九二）
四方田犬彦『驢馬とスープ』（ポプラ社、二〇〇七）
林鐘国『親日文学論』（高麗書林、一九七六）
李建志『朝鮮近代文学とナショナリズム』（作品社、二〇〇七）
李建志『日韓ナショナリズムの解体』（筑摩書房、二〇〇八）
渡邊一民『「他者」としての朝鮮　文学的考察』（岩波書店、二〇〇三）

『偕成社五十年の歩み』（偕成社、一九八八）

〈論文とその他〉

・韓国語

一路 옹（おん）「犬野郎張赫宙は何を吠えたのか」（『解放新聞』、一九四九・一二・三）
金英爽「無窮花（国花）に対する小考」（『論文集 Vol.16』、大邱教育大学、一九八〇）
金鶴童「張赫宙の『嗚呼朝鮮』『無窮花』論―6・25戦争の形象化に見える作家の民族意識―」（『日本学研究』二〇〇八・五）
鄭大成の『『春香伝』日本語翻案テキスト（一八八二～一九四五）の系統学的研究」（『日本学報』、一九九九・一二）
白川豊「張赫宙研究」（東国大学博士学位論文、一九九〇）
白川豊「張赫宙の生涯と文学」（『人文論総』、二〇〇二・八）
文恵京「韓国戦争期民間人虐殺研究：大田刑務所虐殺事件を中心に」（韓国学中央研究院／韓国学大学院、二〇〇八）

・日本語

朝倉新太郎「許南麒詩集　朝鮮冬物語」（『新日本文学』、一九五一・七）
石塚友二「交友関係から」（『民主朝鮮』、一九四六・七）
伊豆公夫「在日朝鮮人の運命」（『解放新聞』、一九五二・八・九）
任展慧「張赫宙論」（『文学』、一九六五・一一）
任展慧「張赫宙と日本文壇への登場」（『日本における朝鮮人の文学の歴史』、一九九四）
任時正「張赫宙と著作年譜」（『論究日本文学』、二〇〇三・一二）
任時正「張赫宙『権といふ男』小考」（『立命館文學』、二〇〇六・二）
岩上順一「朝鮮作家に就て」（『民主朝鮮』、一九四六・八、九）
乾孝「児童文学の問題」（『文学』、一九五一・八）
河合修「他者の起原―植民地支配と「在日」文学」（『朱夏』、二〇〇四・五）
川村湊「在日朝鮮人文学とは何か」（『季刊青丘』、一九九四）
川村湊「植民地文学から在日文学へ」（『季刊青丘』、一九九五・夏）
川村湊「分断から離散へ―「在日朝鮮人文学」の行方」（『社会文学』、二〇〇七・六）
姜魏堂「朝連の思い出―張赫宙氏の所論を駁す―」（『民主朝鮮』、一九五〇・五）

北原武夫「文藝時評（上）文体の新しさ」（『産業経済新聞』、一九五二・一・二五）
北原武夫「文藝時評（下）題材に負けた文学」（『産業経済新聞』、一九五二・一・二六）
金達寿「日本文学のなかの朝鮮人」（『文学』、一九五九・一）
金達寿「在日朝鮮人作家と作品」（『文学』、一九五九・二）
金達寿「入党と分裂の波の中で」（『金達寿小説全集三』、筑摩書房、一九八〇）
金達寿「雑誌『民主朝鮮』のころ」（『李刊三千里』四八号、一九八六・冬）
金貞淑「張赫宙研究―初期作品を中心に」（『藝文攷』通号10、二〇〇五）
金貞淑「張赫宙連作小説『七年の嵐』論（その1）加藤清正」（『藝文攷』通号11、二〇〇六）
窪田精「フィンカム」（『文学芸術』、一九五二・一、創刊号）
権逸「人として恥しからぬ態度をもて」（『日本週報』、一九五二・七・二五）
高栄蘭「交錯する文化と欲望される『朝鮮』―崔承喜と張赫宙の座談会を手がかりに」（『日本文学国文学会』、二〇一〇・三）
小林聡明「在日朝鮮人メディア研究序説（1）―ＧＨＱ占領下における在日朝鮮人新聞の成立と変容」（『マス・コミュニケーション研究』、二〇〇二）
小林知子「ＧＨＱによる在日朝鮮人刊行雑誌の検閲」（『在日朝鮮人史研究』、一九九二・二）
篠崎平治「最近における在日朝鮮人の不法行為の発生状況について」（『警察時報』、一九五二・一〇）
渋谷香織「張赫宙論」（『駒沢女子短期大学研究紀要』通号28、一九九五・三）
白川豊「張赫宙の初期長篇作品について―「虹」、「三曲線」、「黎明期」を中心に」（『史淵』、一九八六・三）
白川豊「張赫宙の朝鮮語作品考」（『朝鮮学報』、一九八六・七）
白川豊「張赫宙の日本語小説考―1930-1945年」（『史淵』、一九八七・三）
白川豊「張赫宙作戯曲「春香伝」とその上演(1938年)をめぐって」（『史淵』、九八九・三）
白川豊「戦後の張赫宙」（『朱夏』5、一九九四）
白川豊「廉想渉と張赫宙―朝鮮近代作家の二つの「生」と文学」（『朝鮮学報』、二〇〇七・四）
外村大「植民地期の在日朝鮮人論―帰属・文化をめぐって」（『植民地期近代の視座―朝

鮮と日本』、二〇〇四）
宋恵媛「在日朝鮮人文学史―一九四五年～一九七〇年―韓国系団体・グループの文化・文学活動」（『在日朝鮮人史研究』、二〇〇四・一〇）
高山毅「児童文学の危機」（『新児童文化』、一九四九・一一・一五）
田口東一郎「創作月評―微妙な作家の立場」（『図書新聞』、一九五二・五・五）
武田泰淳「風媒花」（『群像』、一九五二・一～一一）
張赫宙「民族」（『創建』、一九四六・四～六）
張赫宙（＊黒丘）「四十年の嵐」（『民団新聞』、二～）
張赫宙「からすの会ぎ」（『少国民世界』、一九四七・五）
張赫宙（＊黒丘）「妻」（『自由朝鮮』、一九四七・～九、一〇）
張赫宙「愛を背負って」（一九四七・一一）
張赫宙「心きよらかに」（『少女世界』、一九四八・一二）
張赫宙「憂いは晴れて」（『少女世界』、一九四九・一）
張赫宙「鈴慕のしらべ」（『少女世界』、一九四九・三）
張赫宙「偽善者」（『小説界』、一九四九・六）
張赫宙「祈りの百合」（『少女』、一九四九・七）
張赫宙「歌う山彦」（『小学六年生』、一九四九・七）
張赫宙「愛のマンドリン」（『少女世界』、一九四九・九）
張赫宙「写真物語：雨がっぱのゆくえ」（『小学三年生』、一九四九・九）
張赫宙「嵐もすぎて」（『小学五年生』、一九四九・九）
張赫宙「聖なる友情」（『中学生の友』、一九四九・一〇）
張赫宙「湖水の歌」（『小学五年生』、一九五〇・二）
張赫宙「花咲く愛情」（『小学五年生』、一九五〇・五）
張赫宙「幸運のピエロ」（『少女クラブ』、一九五〇・七）
張赫宙「ゆずりあい」（『小学四年生』、一九五一・一）
張赫宙「愛のおとずれ」（『小学五年生』、一九五一・一）
張赫宙「友情のなみ」（『小学四年生』、一九五一・二）
張赫宙「幸福のエンゼル」（『女学生の友』、一九五一・四）
張赫宙「信子のいのり」（『小学五年生』、一九五一・六）
張赫宙「異国の妻」（『警察文化』、一九五二・七）

張赫宙「釜山の女間諜」(『別冊文芸春秋』、一九五二・一二)
張赫宙「廃墟に咲く」(『別冊小説新潮』、一九五三・一)
張赫宙「強制送還」(『キング』、一九五三・一)
張赫宙「脅迫」(『新朝』、一九五三・三)
張赫宙「眼」(『文芸』、一九五三・一〇)
張赫宙「小説　李俱晩部(『講談　』、一九五三・一〇)
張赫宙「沈清物語」(『少女クラブ』、一九五三・一二)
張赫宙「戸籍謄本」(『小説公園』、一九五四・六)
張赫宙「権力者」(『新潮』、一九五四・一一)
張赫宙(＊野口赫宙)「異俗の夫」(『新潮』、一九五八・五)
張赫宙「わが抱負」(『文藝』、一九三四・四)
張赫宙「朝鮮の知識人に訴ふ」(『文藝』、一九三九・二)
張赫宙「噫・朝鮮の運命」(『東京新聞』、一九四五・一〇・二三)
張赫宙「何処へ」(『自由公論』、一九四六・三)
張赫宙「日本国民に寄せる」(『創建』、一九四六・三)
張赫宙(＊雞林兒)「朝鮮歴史講座―第一章　上古史」(『民団新聞』、一九四七・二・二八)
張赫宙「民族の同化ということ」(『武蔵文化』、一九四八・一)
張赫宙「民族随想」(『民論』、一九四八・一〇)
張赫宙「われわれの立場から」(『日本週報』、一九四九・九)
張赫宙「在日朝鮮人批判」(『世界春秋』、一九四九・一二)
張赫宙「朝鮮民族の性格」(『毎日情報』、一九五〇・九)
張赫宙「ゲリラ戦と朝鮮人気質」(『日本週報』、一九五〇・九)
張赫宙「朝鮮遺跡の破壊を憂う」(『毎日情報』、一九五〇・一一)
張赫宙「祖国朝鮮に飛ぶ(第一報)」(『毎日情報』、一九五一・九)
張赫宙「故国の山河(第二報)」(『毎日情報』、一九五一・一一)
張赫宙「喘ぐ韓国」(『明窓』、一九五一・一一)
張赫宙「祖国朝鮮の苦悶」(『地上』、一九五二・二)
張赫宙「在日朝鮮人の内幕」(『新潮』、一九五二・三)
張赫宙「朝鮮人の騒擾について」(『新大阪』、一九五二・七・二)
張赫宙「朝鮮同胞に告ぐ」(『読売新聞』、一九五二・七・一五)

張赫宙「元朝連系同胞に訴える」(『日本週報』、一九五二・七)
張赫宙「朝鮮人の反省」(『東京新聞』、一九五二・七・二八、二九、三〇)
張赫宙「見て来た悲劇の朝鮮」(『読売新聞』、一九五二・一〇・二九)
張赫宙「韓国の不安はつゞく」(『地上』、一九五二・一一)
張赫宙「朝鮮」(『群像』、一九五三・一)
張赫宙「朝鮮の働き手」・(『婦人
張赫宙「テクスト構造にみる『深淵』―『深淵の人』と張赫宙」(『九大日文』、二〇〇八・三・三十一)
張允鏖「朝鮮戦争をめぐる日本とアメリカ占領軍―張赫宙『嗚呼朝鮮』論」(『社会文学』、二〇一〇・七)
坪田譲治「二十四年の児童少年文学」(『文芸年鑑』、一九五〇・六)
手塚富雄「文芸時評」(『毎日新聞』、一九五二・一・二三)
十返肇「文藝雑誌評―抜け目のない編集」(『時事新報』、一九五二・一・二一、夕刊)
南雲智「胡風と張赫宙」(『季刊青丘』、一九九五・夏)
南富鎮「昭和文学の朝鮮体験」(筑波大学博士学位論文、一九九八)
南富鎮「張赫宙文学と近代への挫折」(『日本文化研究』、二〇〇〇)
南富鎮「日本近代文学のアジア(6)張赫宙の朝鮮と日本―日本語への欲望と近代への方向」(『アジア遊学』、二〇〇三・六)
南富鎮「「内鮮結婚」の文学―張赫宙の日本語作品を中心に」(『人文論集』、二〇〇四)
任時正「張赫宙と著作年譜」(『論究日本文学』第七九号、二〇〇三・一二)
林浩治「張赫宙論」(『李刊三千里』、一九八三・冬)
平田次三郎「二月号の文藝雑誌展望―張の力作『嗚呼朝鮮』」(『東京タイムズ』、一九五二・一・二八)
飛田雄一「サンフランシスコ平和条約と在日朝鮮人」(『在日朝鮮人史研究』、一九八〇・六)
許南麒「売族者の運命」(『平和』、一九五二・一二)
古谷綱武「児童文学への要望」(『児童』、一九四七・七・一)
堀田善衛「広場の孤独」(『中央公論・文芸特集』、一九五一・九)
堀田善衛「文学とルポルタージュ」(『文学』岩波書店、一九五四)
本多顕彰「文芸時評(上)〝これでいゝのか〟への回答」(『東京新聞』、一九五二・一・二八、夕刊)

朴慶植「解放直後の在日朝鮮人運動」(『在日朝鮮人史研究』、一九七七・一二)
朴慶植「解放直後の在日朝鮮人運動（四）―阪神教育闘争を中心として―」(『在日朝鮮人史研究』、一九七九・六)
朴慶植「解放後にの在日朝鮮人運動」(『在日朝鮮人史研究』、一九七七・一二)
牧野武章「十五年戦争下における在日朝鮮人文学を通してみる政治的抵抗を軸とした研究」(『成蹊大学法学政治学研究』、二〇〇〇・一二)
槇本楠郎「増大する児童文化の危機」(『教育と社会』、一九四九・三)
増田靖子「少女の友の座談会に出席して」(『少女世界』、一九五〇・一二)
三枝寿勝「八・一五以後における親日派問題―解放後の朝鮮文学」(『朝鮮学報』、一九八六・一)
保高徳蔵「日本で活躍した二人の作家」(『民主朝鮮』、一九四六・七)
山本健吉「文藝時評―文学の社会性獲得へ」(『朝日新聞』、一九五二・四・二七)
梁石日「方法以前の抒情―許南麒の作品について」(『ユリイカ』、二〇〇〇、一二)
梁姫淑「張赫宙戦後著作年譜稿」(『埼玉大学紀要・日本アジア研究』第八号、二〇一一・三)
梁姫淑「「脅迫」論―実存的不安をめぐる作者の軌跡」(『昭和文学研究』、二〇一一・三)
梁姫淑「祖国に対する愛情のゆれ―張赫宙『嗚呼朝鮮』を中心に」(『昭和文学研究』、二〇一三・三)
梁姫淑「張赫宙の戦後の出発―在日朝鮮人民族団体との関わりを中心に」(『社会文学』、二〇一三・七)
吉田精一「ビルマの竪琴」(『生活学校』、一九四八・九・一)
読売新聞「張赫宙氏が帰化」(『読売新聞』、一九五二・一〇・一二)

凡例

（張赫宙戦後著作年譜）

1．著作採録範囲

（1）各種データベース所収分

・『文芸雑誌小説初出総覧「1945－1980」』（日外アソシエーツ、2005）

・国会図書館書誌検索　(http://opac.ndl.go.jp/index.html)

・戦後日本少年少女雑誌データベース　(http://manga-db.fms.co.jp/bgmag)

（2）以下の先行研究で言及している分

・白川豊「張赫宙研究」（東国大学博士学位論文、一九九〇）

・白川豊『朝鮮近代の知日派作家、苦闘の軌跡―兼想渉、張赫宙とその文学』（勉誠出版、二〇〇八）

・任時正「張赫宙と著作年譜」（『論究日本文学』第七九号、二〇〇三・一二）

・宋恵媛「在日朝鮮人文学史 1945～1970 年―韓国系団体・グループの文化・文学活動」（『在日朝鮮人史研究』、二〇〇四・一〇）

・金鶴童『張赫宙の文学と民族の頚木』（亦楽、二〇一一）

（3）（1）、（2）以外に編者が発見した分

右記の別は、（1）と（3）の内（2）で言及していない分について、○を「その他」の項目に示した。

2．内容

（1）表記

・作品名の表記は掲載紙誌に従った。

・書名の表記は原本に従った。

・単行本と雑誌名・新聞名は『』で示し、作品は「」で示した。

（2）項目

・「年」

・「作品及び著作（発表月・作品名・書名・ジャンル）・掲載紙誌・刊行元」

＊ジャンルについては、小説（短編、長編）／評論随筆／翻案／戯曲に分け、下記の略号を用いて示した。表記のないものは、評論随筆。（ただし、ジャンルの区分は編者の判断による）

【短】・・・短編、短編集　　【長】・・・長編

【翻】・・・翻訳、翻案　　【戯】・・・戯曲

・「その他」

＊「著作採録範囲」については右記。

＊戦後、張赫宙は複数の筆名を使用しているため、以下の略号を用いて示した。

（表記のないものは「張赫宙」）

〈野〉・・・野口赫宙　　〈黒〉・・・黒丘

〈雞〉・・・雞林兒　　〈実〉・・・野口実

＊編者未見の著作は＊を用いて示した。

＊著作が短編集の場合、収録作品を示した。

（張赫宙戦後著作年譜）

年	作品及び著作			その他
	発表月（日）・作品名・書名・ジャンル	掲載紙誌	刊行元	
1945	10（22）:「噫・朝鮮の運命（上）」 （23）:「噫・朝鮮の運命（下）」	『東京新聞』第 1114 号 『東京新聞』第 1115 号		
1946	3 :「何處へ」 「日本國民に寄せる」 4～6 :「民族」【短】 8（7）～翌年 4（30）:「意中の人」【短】 8・9 :「青年は立直る」 10 :「今日の随想」 11（8）:「教員の立場」 12 :『孤児たち』【長】	『自由公論』 『創建』 『創建』 『平民新聞』第 3～25 号 『農村文化』 『自由懇話会』 『東京新聞』第 1493 号	萬里閣	連載 3 回で中絶 連載 19 回で中絶 ○、＊ ○
1947	2 :「ひとの善さと悪さと」【短】 （17）:「文学の行方」 （21）～ :「四十年の嵐」【短】 （28）:「朝鮮歴史講座―第一章　上古史」 3 :「とこしえに」【短】 「内弟子の告白」【短】 5 :「からすの会ぎ」【児】 8 :「憎悪を憎悪する」 ～9・10 :「妻」【短】 11 :「愛を背負って」【短】 12 :『ひとの善さと悪さと』【短】	『藝林閒歩』 『東京新聞』第 1593 号 『民団新聞』第 1 号から 『民団新聞』第 2 号 『小説と読物』 『時代』 『少国民世界』 『New life』 『自由朝鮮』 『読物と漫画』	丹頂書房	〈黒〉（連載 8 回〈6. 30〉まで確認） ○、〈雞〉 ○ ○ ○ 〈黒〉(連載 4 回〈完〉、3・4 回確認) ○ 短編集 :「脱出」、「内弟子の告白」、「わかれ道」、「妹へ」、「とこしえに」、「ひとの善さと悪さと」所収
1948	1～2 :「罪の行方」【短】 1 :「民族の同化ということ」 2 :『やまめ釣る子』【児】 3 :「武蔵文化ニュース―新刊推薦」 9 :「わが処女作・わが出世作」 10 :「民族随想」 12 :『愚劣漢』【短】	『時代』 『武蔵文化』 『武蔵文化』 『文学集団』 『民論』	大日本雄弁会講談社 富國出版社	○ ○ ○ ○ ○ 短編集：「権という男」、「ガルボウ」、「葬式の夜の出来事」、「十六夜に」、「愚

	「心きよらかに」【児】	『少女世界』		劣漢」所収 ○
1949	1～3：「ミヤの犯罪」【短】	『地上』		
	1：「憂いは晴れて」【児】	『少女世界』		○
	2：「地獄の女」【短】	『文藝読物』		
	3：『恩を返したツバメ』【翻】		羽田書店	朝鮮の昔話「恩を返したツバメ」「トラをいけどったウサギ」「オニのかなぼう」「龍宮の母」所収
	「鈴慕のしらべ」【児】	『少女世界』		○、春香伝の翻案
	4（28）：「わが念願」	『東京新聞』第 2387 号		
	6：「偽善者」【短】	『小説界』		
	7：「祈りの百合」【児】	『少女』		○
	「歌う山彦」【児】	『小学六年生』		○
	8：『異国の嵐』【児】		偕成社	○、〈実〉
	9：「われわれの立場から」	『日本週報』		○
	「雨がっぱのゆくえ」【児】	『小学三年生』		○
	「嵐もすぎて」【児】	『小学五年生』		○
	「愛のマンドリン」【児】	『少女世界』		○
	10：「朝鮮傀儡部隊の最後」【短】	『クラブ』		
	「聖なる友情」【児】	『中学生の友』		○
	『港の聖花』【児】		偕成社	○、〈実〉
	11：「悲しい魂」【短】	『小説界』		＊
	12：「在日朝鮮人批判」	『世界春秋』		
	12～翌年 2：「秘苑の花」【短】	『富士』		
1950	2：『流れの旅路』【児】		偕成社	○、〈実〉
	「湖水の歌」【児】	『小学五年生』		○
	3：『秘苑の花』【長】		世界社	
	5：「花咲く愛情」【児】	『小学五年生』		○
	7：「幸運のピエロ」【児】	『少女クラブ』		○
	7～8：「ちょろ松色懺悔」【短】	『富士』		○
	9：「朝鮮民族の性格」	『毎日情報』		＊
	「閔妃事變」【短】	『オール讀物』		○
	「ゲリラ戦と朝鮮人気質」	『日本週報』		
	「戦乱の祖国を哭く」	『キング』		○、＊

	10：「夫變秋風嶺」【短】 11：「朝鮮遺跡の破壊を憂う」	『夫婦生活』 『毎日情報』		○、＊
1951	1：「ゆずりあい」【児】 「愛のおとずれ」【児】 2：「友情の波」【児】 4：「幸福のエンゼル」【児】 6：「信子のいのり」【児】 7：「韓国へのルポー」 9：「祖國朝鮮に飛ぶ」 「朝鮮の農民」 11：「故国の山河」 「喘ぐ韓国」	『小学四年生』 『小学五年生』 『小学四年生』 『女学生の友』 『小学五年生』 『毎日新聞』 『毎日情報』 『農民文学』 『毎日情報』 『明窓』		○ ○ ○ ○ ○ ＊
1952	2：「嗚呼朝鮮」【短】 「祖国朝鮮の苦悶」 3：「在日朝鮮人の内幕」 4：「部落の南北戦」【短】 「柳橋時代」 5：「避難民」【短】 『嗚呼朝鮮』【長】 6：「或る犯罪」【短】 7：「異國の妻」【短】 「元朝連系同胞に訴える」 （2）：「朝鮮人の騒擾について」 （15）：「朝鮮同胞に告ぐ」 （28）：「朝鮮人の反省（上）」 （29）：「朝鮮人の反省（中）」 （30）：「朝鮮人の反省（下）」 9：「釜山港の青い花」【短】 10（29）：「見て来た悲劇の朝鮮」 11：「韓国の不安はつゞく」 12：「釜山の女間諜」【短】	『新潮』 『地上』 『新潮』 『別冊文藝春秋』 『文芸首都』 『新潮』 『文藝』 『警察文化』 『日本週報』 『新大阪』第 2327 号 『読売新聞』第 27154 号 『東京新聞』第 3572 号 『東京新聞』第 3573 号 『東京新聞』第 3574 号 『面白倶樂部』 『読売新聞』 『地上』 『別冊文藝春秋』	新潮社	＊ ○、＊ ○ ○、＊

（張赫宙戦後著作年譜）

1953	1：「廃墟に咲く」【短】	『別冊小説新潮』		
	「強制送還」【短】	『キング』		○
	「朝鮮」	『群像』		
	「朝鮮の慟哭」	『婦人倶樂部』		
	「作家青木浩のこと」	『政界往来』		○
	3：「脅迫」【短】	『新潮』		
	5：「煙草の煙り」【短】	『キング』		○
	6、8、11：「三十八度線にも太陽がある」【児】	『太陽少年』		○、＊
	8：「昌子の場合」【短】	『新潮』		
	9：「放送恐怖症」	『放送文化』		○
	「朝鮮に想ふ」	『解放』		＊
	10：「眼」【短】	『文藝』		
	「小説　李承晩」【短】	『講談倶楽部』		
	11：「盆踊り」	『旅』		○
	朴榮濬「金将軍」、黄順元「鶴」、柳周鉉「捕虜と生きていた死体」、崔泰應「三人」【翻】	『新潮』		朝鮮戦争と関連した朝鮮の短編（4編）を訳す。＊
	12：「沈清物語」【翻】	『少女クラブ』		○
1954	6：「戸籍謄本」【短】	『小説公園』		〈野〉
	『無窮花』【長】		大日本雄弁会講談社	〈野〉
	『世界少年少女文学全集・東洋童話集』【翻】		創元社	○、〈野〉、朝鮮童話集として８編（「日の神と月の神」「歩いてきた山」「鬼の金棒」「とらを生けどったうさぎ」「金のおのと鉄のおの」「天女ときこり」「恩をかえしたつばめ」「シムチョンィ物語」）を訳す。
	7：「大戦と日本の内亂化が可怕い」	『文藝』		○、〈野〉
	9：「滿洲行」	『新潮』		○、〈野〉
	11：「權力者」【短】	『新潮』		〈野〉
	11：『遍歴の調書』【長】		新潮社	〈野〉
1955	6：「子への愛憎」【短】	『小説公園』		〈野〉
	8：「選擧」【短】	『文藝』		〈野〉
	11：「幻と現實」【短】	『小説公園』		〈野〉

（張赫宙戦後著作年譜）

1956	1：『若い女』【長】		東方社	〈野〉
	5（7）：「私の心配・私の希望」	『日本読書新聞』第 847 号		〈野〉
	7：『世界少年少女文学全集・東洋編５』【翻】		創元社	○、〈野〉、朝鮮童話集として３編（金南天「明るい朝」、安懐南「まぼろしの母」、李泰俊「城北だより」）を訳す。
	8：「天女の聲」【短】	『小説公園』		〈野〉
	10：「茸狩り」	『大法輪』		○、〈野〉
	11：『ひかげの子』【長】		新潮社	〈野〉
1957	3：「「抵抗者」について」	『Books』		○、〈野〉
	5：「山ににんじん」【児】	『朝の笛』		○、〈野〉、民話
	6：『美しい抵抗』【長】		角川書店	〈野〉
	「秩父夜祭」【短】	『キング』		〈野〉
	11（2）：「感覚のずれ」	『東京新聞』第 5480 号		〈野〉
	12：「『廓』を描いた人々」	『アサヒグラフ』		○、〈野〉＊
1958	5：「異俗の夫」【短】	『新潮』		〈野〉
	6：「山鳩鳴く日」【曲】	『悲劇喜劇』		〈野〉
	7：『恋の果て』【長】		東方社	○、〈実〉
	10：『黒い地帯』【長】		新制社	〈野〉
1959	5：『ガン病棟』【長】		講談社	〈野〉
	6：「キリシタン如来騒動」【短】	『宝石』		〈野〉
	7：「友達から聞いた話」【短】	『探偵実話』		〈野〉、＊
	9：「二重まる殺人事件」【短】	『探偵実話』		〈野〉、＊
	10：「斷崖」【短】	『探偵実話』		〈野〉、＊
	11：「市松人刑殺人事件」【短】	『探偵実話』		〈野〉、＊
	12：「小坂館殺人事件」【短】	『探偵実話』		〈野〉、＊
	11：『黒い真昼』【長】		東都書房	〈野〉
	12：「零点五」【短】	『宝石』		〈野〉
1960	1：「死者の勝利」【短】	『探偵実話』		〈野〉、＊
	2：「墜落者」【短】	『探偵実話』		〈野〉、＊
	「複雑なこの表情 北鮮帰還を現地に見る」	『面白倶楽部』		○、〈野〉
	4～8：「望郷の殺人」【短】	『探偵実話』		〈野〉
	5（8）：「動乱の母国を想う」	『週刊朝日』		○、〈野〉、＊

	7：「黒い渦」【短】	『宝石』		〈野〉
1961	4～9：「湖上の不死鳥」【短】 6：「素顔 金三奎氏」 9：「高麗郷」 10：『武藏陣屋』【長】 11：「新羅王館最後の日」【短】	『探偵実話』 『朝日ジャーナル』 『文学散歩』 『宝石』	 雪華社	〈野〉 ○、〈野〉 ○、〈野〉 〈野〉 〈野〉
1962	2：『湖上の不死鳥』【長】 「お滝ジュリアの受難記」 7：「赤い月餅」【短】	 『人物往来歴史読本』 『宝石』	東都書房	〈野〉 ○、〈野〉 〈野〉
1963	10：「夢は海のかなたに」	『人物往来歴史読本』		○、〈野〉
1964	2：「朝鮮役の日本人降伏部隊」 11：「生きていた親王」 12：「狐の仇討」	『人物往来歴史読本』 『人物往来歴史読本』 『笑の泉』		○、〈野〉 ○、〈野〉 ○、〈野〉
1965	7：「自己喪失のインテリ」	『大法輪』		○、〈野〉
1975	4：『嵐の詩』【長】		講談社	〈野〉
1977	5～8：「アメリカ・インディアンに古代日本人の源流を探る」 10：『韓と倭』	『歴史と旅』	 講談社	〈野〉、＊ 〈野〉
1978	7：「インカ帝国最後の王」	『文藝春秋』		〈野〉
1980	11：『陶と剣』		講談社	〈野〉
1989	6：『マヤ・インカに縄文人を追う』		新芸術社	〈野〉
1991	『Forlorn Journey (or KikiSitan)』 『Rajagriha-A tale of Gautama-Buddha』		Chansun International	＊ ＊

論　文　題　目　　張赫宙戦後研究　　2014.3　　梁　姫淑